第28回

人物を中心とした

鳥取県教育郷土史

県花……ナシ

篠村昭二

一　近代教育の開拓

鳥取県の近代教育は、藩校尚徳館の改革によって始まった。すなわち、明治二年、尚徳館は総学局と改められ、新たに医学寮が増設され、米子と倉吉に分局が設けられた。そして、士族以外の一部の者にも入学の機会が与えられることになった。この時、教育の内容と対象が拡大されたのである。

中国山脈の北側、日本海に沿って東西にのびる鳥取県は、因幡と伯耆の二国にわたっている。その東端、鳥取城下に成立していたのが宝暦以来の尚徳館であるが、これ以外に公的な教育機関はなかったのである。

伯耆国にも拡げられようとした総学局も、明治三年八月には閉鎖されるに至ったが、その直前、貢進生選抜のことがあった。明治新政府が、各藩の秀才を選んで大学南校に集め、新時代の指導者養成をはかろうとしたのだが、鳥取県からは、村岡範為馳・岸本辰雄・前田精太郎の三名がえらばれた。村岡はのちの音楽学校校長にして理学博士、岸本は明治大学の創立者である。

輝かしい未来を約束される貢進生は尚徳館の中から選ばれ、洋学修行の者が優先された。これは、鳥取の青年に新時代の到来を思い知らせる事件であったから、著者の関心は一せいに洋学に集まった。

尚徳館閉鎖ののち、鳥取には洋学の私塾が開かれ、伊藤喜市と田中景栄の二人が指導にあたった。奥田義人・平井致遠・内山小

馳為範岡村

次郎・須知源次郎らがそこで学んだ。奥田は後の文部大臣、平井は第一回の衆議院議員、内山と須田は軍人となった。

洋学私塾は、明治六年、慶応義塾出身の秋田県士族蓮沼友治を学長として迎えることによって、鳥取変則中学に移行した。蓮沼は、学力のみが人間的価値の基準であると宣言して、身分的秩序を否定し、中等教育を万人に開放するという原則を確立した。「学問のすすめ」の思想が、鳥取の地で実現されることになったのである。

行政の中心鳥取では、没落しようとする士族の関心に支えられて、小学校、中学校ともに、その普及は順調であった。鳥取をめぐる因幡地域では、鳥取の動きに習うことが長い間の習慣として成立していた。しかし、伯耆の地方には、また別の動きがあった。

明治六年六月、新設小学校に教師として赴任しようと急いでいた三倉哲一・安原信夫の二名は、米子に近い谷川村で農民の襲撃を受けた。新政に期待を裏切られ、反感を高めていた農民は、異様の人物と称して新任教師を攻撃したのだが、これを機に爆発した大一揆は、学校関係者に強い脅威を与えた。

会見郡と呼ばれるこの地域は、寺子屋の普及がもっとも進んだところであった。そこに見られたこのような事件は、新政とともに始まろうとしていた教育とは何か、教師とは何かという、最初の問いかけであったというべきであろう。

しかし、小学校の普及は、先覚的な指導者によって、地域ごとに進められていった。淀江では、医師村田晋によって、「人々自ら其身を立て其産を治め其業を昌にして以て其生を遂るゆえんのものは……」という「学制」前文を壁面に掲げた寺院で小学校が始められていた。倉吉では、旧陣屋の一室で、町の儒者友松道一が「大学」の一節を読むことによって小学校が始められた。林良造のごときは、藩校の教師から転じて、河原村の小学校教師となった。

ようやくにして発足した小学校の教育にとって、最大の課題は、近代的な教師の養成であった。田中尚は、明治七年六月、東京師範学校を卒業して鳥取に帰った。新知識として田中を迎え、旧尚徳館内に小学校教員伝習所が開かれたのは、同年九月であった。ここで、県内の教師はすべて、田中の指導によって一せい授業の方法を授けられたのである。田中についで、遠藤萱・松岡成喬が、広島師範学校を卒業して伝習所の教師となった。

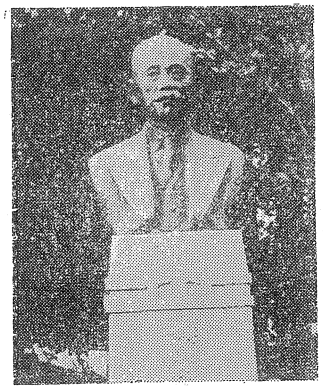
明治九年、鳥取県は、文部省から派遣された野村素介によって視察を受けた。野村は、「該県ハ地勢偏僻、人心頑固、故ニ資ヲ課シ学ヲ興ス施設ノ難キ、石州ト大異ナシ」と文部省に報告した。その後、鳥取県当局も、野村と同様のなげきを文部省年報の中でくりかえしているが、困難な自然条件の中で、鳥取県民の重ねた

教育的な努力は、決して少ないものとはいえない。

二　鳥取県教育の成立

鳥取県が島根県に併合されるという事件などによって、県内の教育に停滞があったことは認められねばならないだろう。しかし、その間にも地域ごとに独自な教育計画が進められ、鳥取・倉吉・米子の三都市を中心とする鳥取県教育の原型が形づくられていった。

たとえば、明治十四年、久米郡の山桝直好は、郡立農学校の創設を発議して実現させた。教師としては、学農社出身の滝七蔵を招き、伯耆国全域の産業開発という大理想を掲げた。いわゆる産業教育の起源を、農学校通則公布の明治十六年に求めるのが現在の通例であるから、倉吉農学校の企画は、きわめて先進的なものというべきであろう。



遠藤　萱

その後、札幌農学校から安田英吉を招いて県立農学校として再発足させたが、実業学校の経営は困難をきわめた。明治二十八年、時の県会議長山瀬幸人は、議長の職を辞して農学校長事務取扱となり、廃絶にひんした学校を再興し、現在に至る発展の基礎を築いた。

鳥取県の西端米子では、会見郡長大西清太の発議によって郡立中学校が開設された。それは、倉吉農学校創設と同じく昭和十四年のことである。大西は、維新期における急進派の武士の一人であったが、租税負担額最高の米子周辺にこそ中学校が開設されねばならぬという信念を持っていた。

鳥取県再置ののち、松江に転任していた遠藤萱が鳥取に帰って来た。遠藤は、再開された師範学校の教師となり、邑美郡書記として教育行政に当たったこともあったが、明治十八年に開設された鳥取高等小学校長に就任して二十数年間その職にあった。

遠藤は、女子高等小学校を作って市立女学校の基礎を築き、のちの県立高等女学校発展への道を開いた。また、私設の図書館を久松文庫と称して開設し、それを教育会の図書館とし、鳥取市立図書館に育て、県立鳥取図書館へと移行発展させた。鳥取県立ろう学校および盲学校も、遠藤によって開かれた私立学校の発展したものである。遠藤は、学校経営の資金を得るために、自作の絵の頒布会を作るなどの努力を重ねた。鳥取市立女学校も、二十年にわたる遠藤の苦心経営による私立女学校の発展した姿であった。

明治二十年、汗入会見郡は高等小学校の大衆化計画をたてた。一郡一校を理想としたその当時にあって、一挙に四校も設立しようとしたのである。この時、第一高等小学校長として総泉寺の本堂で授業を開始したのが羽山八百蔵である。その前年、県立学校となっていた米子中学を廃絶させられ、中等教育への途をとざされていた米子の地域では、高等小学校に強い期待をかけたのであ

る。明治二十一年、鳥取県尋常師範学校第一回の首席卒業生であった鈴木千代松は、異例の高給をもって、羽山八百蔵のもとに首席訓導として招かれた。

その後、昭和初年に至るまで、角盤校と呼ばれるようになっていた高等小学校の訓導および校長として、また西伯郡教育会の統率者として、鈴木千代松はこの地方の教育に献身した。師範学校の後輩浅沼喜雄が、西伯郡長として米子に来任し、鈴木と協力して教育振興に力をつくしたことも、米子市内に語り伝えられている。

昭和二十二年十一月、倉吉成徳小学校長奥野虎治は、小学生五十余名をつれて、鳥取まで往復八日にわたる修学旅行を敢行した。明治二十年に新築された成徳小学校の校舎と、奥野虎治の学校経営とは、倉吉地方の教育を代表するものであった。鳥取県の唱歌教育が、明治二十一年、成徳小学校において、御船久之によってはじめられたこともまた注目されねばならない。

女子中等教育への道は、鳥取で開拓された。明治二十年九月、鳥取のキリスト教徒は、「鳥取英和女学校」を設立したのである。鳥取にはじめて伝導が行なわれたのは明治十三年といわれるが、数年のうちに多くの信者を獲得していた。英和女学校の幹事は、尾崎又次郎・岡垣春六・上島伝次郎であった。女学校設立にあたって公告された宣言は、男女の本質的平等と、女性の知育の必要を説くものであったから、城下町の価値観に強い衝撃を与えた。

英和女学校ができると間もなく、妹尾ミネが会長となって「鳥取婦人会」を結成した。そして、対抗的に女学校設立のための募金運動を行ない、明治二十一年の末に至って私立鳥取女学校を発足させた。時の知事山田信道は百円の寄付金を与えて女学校を援助し、県の首脳部もまたそれに習った。私立女学校は鳥取西の経営に移され、明治三十五年には県立の高等女学校となって発展した。

英和女学校は、キリスト教徒に支えられ、伊井松蔵校長の献身的な努力によって経営されたが、県立女学校成立と同時に閉鎖せざるを得なかった。しかし、英和女学校の教育は敬けんな信仰と新しい女性観とを、鳥取の地に植えつけるものであった。

幼稚園教育は、明治二十二年、米子において前田重次郎によって先べんをつけられた。その翌年、鳥取では師範学校同窓会が幼稚園を作った。小田しのは、鳥取県内に奉職した最初の女高師卒業生であったが、鳥取女学校で教えながら、幼稚園育成の指導にもあたっている。小沢サキ・伊藤ナオ・山田カメなど、幼児教育と女子中等教育の発展を支えた人材が、鳥取師範学校初期の女子卒業生であったことは、注目されねばならないだろう。

鳥取市近郊、味野部落では、筧雄平が幼児を集めて保育し、農繁期の母親から負担を除こうとした。それは、県内で幼稚園教育のはじまるときとほぼ同時であったが、農繁期托児所の創始として、全国的な関心を集めるに至ったものである。

明治末年になって、鳥取・倉吉・米子の三地区に、それぞれ県立の中学校と高等女学校が成立し、鳥取県教育の基本的な配置が完成した。義務教育は、鳥取師範学校を通じて指導される体制が成立した。明治十七年、朝夷六郎によって創立された私立教育会

も、鳥取師範学校内に事務所を置く鳥取県教育会となって、県の指導行政と一体化していった。津田元徳は、鳥取県内最初の高等師範学校卒業生として、母校に帰り、後輩の信望を集め、学校の存在を重からしめた。

三　新教育運動の推進

(1)　自由教育と芸術教育

米子啓成小学校長磯尾岩夫は、大正三年の県教育会雑誌において、附属小学校に対する批判を行なった。付属の教育をモデルとする時代は去った、教師はそれぞれ独自な教育を展開すべきだ、と宣言したのである。その頃、師範教育に対する批判の声も県内に見られるようになっていたが、ヘルバルト派の教授様式に固定しようとする姿勢に対して内部から改革の声があげられたのである。

そのような教師の自覚は、大正十一年初頭、倉吉成徳小学校における「自由教育」発表会に、もっとも鋭い形で結実した。自由教育の推進者は、ようやく三〇歳になろうとする相見正義であった。成徳自由教育の公開は、注入主義の教育を児童中心主義に転回させようとするものであるが、それについては、さっそく批判が集まった。付属小学校主事のごときは、新聞に意見を掲げ、自発活動の尊重は子どもの徳性を損うものだと述べた。

若い相見訓導は、従来の教育は真に子どもを愛するものとは認められないと反ばくし、その後も毎年、自由教育の公開発表を続けた。ここで、付属中心の教育体制は解体させられ、教育界の新風は倉吉から始まるといわれるようになった。

成徳小学校には、伊佐田甚蔵ら、相見の協力者があって、児童劇を中心とする芸術教育をすすめていた。ところが、児童劇を発表するに至って、強力な反対運動がおこり、県会においても問題としてとりあげられるようになった。しかし、成徳保護者会長桑田安常は、終始、新教育運動を助けた。また、新聞記者として倉吉にいた大倉恒敏は、教育新人会を結成し、雑誌「教育運動」を発行して教育改革の運動を援助した。

芸術教育の運動は鳥取でも始められた。迁橋小学校と付属小学校は、大正十三年に前後して発表会を開いた。このとき、田中義雄・峯地光重らの主張をめぐって、市会議員吉村撫骨や、新聞記者涌島義博らの意見が表記され、一つの文化問題として関心を高めた。教育界の中にも、児童劇は子どもを退廃させるものだとして強い批判があったが、涌島や吉村らは、新しい運動をよう護してゆずらなかった。

付属の芸術教育は、三上留吉らによって少年団運動に発展させられていったが、成徳小学校の教育は、伊佐田甚蔵らによって、郷土教育と文化科教育に展開させられた。伊佐田は、入沢宗寿の指導によって、「文化科教育と郷土教育」の中に、成徳小学校での長い実践の成果をまとめて発表した。

(2)　作文教育の実践者たち

峯地光重は、生活指導という概念を定着させた人物といわれているが、明治四十四年、鳥取師範学校を卒業し、西伯郡の小学校に奉職しながらその思想を育てあげた。

軍隊式の師範教育に疑問を抱き、自然に対する深い愛着をもっていた峯地は、子どもの生命の要求をもとにしてすべての教科が考えられ、教育の全面が改革されねばならないと思っていた。教科のワクにしばられることなく、児童の生命の活動をそのままに生かす領域として綴方をとりあげたのである。峯地は、自由選題による綴方を書かせながら、綴方をもって児童の人生科をすべしとする考え方に到達して行った。

峯地が、草深い西伯郡の農村で「文化中心綴方新教授法」をまとめ上げたのは、大正十一年のことであった。峯地は、付属小学校に招かれて芸術教育発表会に加わり、チョンマゲ教育家を驚倒させたと評された。また、雑誌「小鳥」を創刊して、鳥取の児童文化運動に強い刺戟を与えた。

峯地は、東京児童の村に参加したが、のちには、ふたたび県内に帰り、郷土教育と生産教育に独自の境地をひらいていった。

峯地は、「綴方生活」の同人として広い影響力をもっていたが、県内にも峯地を指導者として若い国語教育研究集団が成立した。それは、佐々井秀男を中心とする伯西教育社の同人たちであった。佐々井は、稲村謙一・大谷芳美・福永晶爾・妹尾輝雄・小林正義・植田亮三を同人として、雑誌「国語人」を創刊した。

この雑誌は、全国各地の研究家から寄稿を求め、県内の同人を拡大しながら、広い交流の足場となっていった。植田亮三は、「工程」創刊号において「諸君は尋常五年生に、ライオンの形をした県を教へた経験をもたないか。まこと綴方鳥取こそは……全日本に向って咆哮するライオンだ」と述べている。

昭和十年当時、佐々井はすでに「新文話と綴方教育」「こどもの詩教育」「科学的綴方教育の設営」を発表し、稲村も「生活への児童詩教育」を発表していた。福永・妹尾らの鋭い発言も、すでに全国的な注目を集めていた。だから、植田亮三の発言に見られるような自覚は、決して誇大なものとはいえなかった。

(3) 体育県の成立

鳥取県の体育県としての基礎は、大正期に成立したが、近代体育の動きが伝えられたのは、明治十四年のことである。この年、鳥取中学の教師鈴木源太郎は、松江に派遣されて、そこで棍棒・啞鈴・球竿などの体操を習得させられた。鳥取に帰った鈴木は、全県下の教師を、順次鳥取に集めて、新しい体操の技術を伝達していった。

その後、兵式体操全盛の時代をへて、鳥取県の体育がまったく新しい姿を見せるようになるのは、明治の末年、三橋喜久雄の活動がはじまることによってである。

明治四十二年、鳥取師範学校を卒業した三橋は、体操教員検定試験に合格して母校の教諭となった。三橋は、体操の授業を担当しながら、師範生にまじって、同僚の講義を聴講するような努力を続けていたから、生徒の信頼はあつかった。

大正三年、鳥取県内の体育を視察した永井道明は、三橋喜久雄の指導を高く評価し、東京高等師範学校の教官として登用した。この時、新教授要目の制定によって体育界は新しい時代を迎えようとしていたが、永井の理想とするものは、三橋の指導によって鳥取県内に実現されようとしていたのである。

三橋の転出は、鳥取県の教育界に強い刺戟を与えるものとなった。また、三橋は郷土の体育指導に情熱を傾けた。三橋は、毎年夏休みには帰省して、小学校を講習会場として体育の指導を行なったのである。三橋の指導と激励によって鳥取県からは多数の体育指導者が育てられていったが、それによって、鳥取県体育の特色と性格もまた形作られていった。

鳥取県内の体育学校として、もっとも早く注目を集めたのは、八頭郡那岐小学校であった。鉄道も通わない山間の那岐に着任した校長山本慶一は、体育を学校経営の基本に置いたのである。山本慶一は、生来虚弱であった自らの経験と、山間に生活する村民の実態とをふまえて、健康こそがすべての基本と考えたのである。

二十数年にわたる山本の学校経営によって、村民の健康に対する関心は高められ、人間的な積極性も育てられていった。体育の実技は、教師によって指導されるばかりでなく、村民によって児童が指導を受けるという状態になった。山本の体育経営には、校医小松邦太郎の協力があった。山本の訓練に対して小松は養護を担当し、鳥取県における学校保健の模範的な姿を実現したのである。那岐小学校は、日本一の体操学校といわれたほどであったが、そこから優秀な教師が育っていった点でも注目を集めるものがあった。

三橋喜久雄に学んだ田中武雄は、のちに師範学校教諭となり、さらには体育主事となって、鳥取県の体育行政を推進した。三橋・田中は、ともに気高郡の出身者であるが、その気高郡の体育熱はとくに盛んなものがあった。体操検閲という体育指導コンクールをはじめ、それを全県の行事にひろげていった。

(4) 初等教育研究会

磯尾岩夫が、付属小学校の模倣をやめようと、教師の自覚を呼びかけたその翌年、すなわち、大正四年から鳥取県初等教育研究会が始められた。これは、教師の研究発表と意見交換のための集会で、会場も鳥取・米子・倉吉と移動させることにした。

のちには、女子部会を独立させて、さらに発表の機会を多くするなど、大正期の風潮に支えられて発展していった。しかし、やがてふたたび教育会の中に吸収され、全県的な交流の場は縮小されていった。

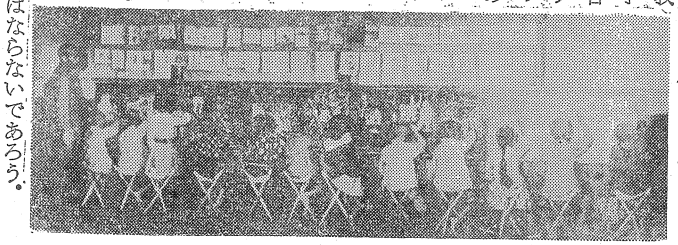
ところが、この研究会の形式は、米子市において生かされることになった。すなわち、昭和初年、米子市の小学校長友松文雄・三明太蔵・崎田茂信らは、輪番制で学校経営の成果を公開し、教師の相互研究の機会とすることを申し合せた。

友松文雄は、啓成小学校の校長であったが、祖父道一以来、三代にわたって初等教育にあたっていることを強く誇に感じていた。そして、深い学識と強い気骨をもって独特の学校経営を行なっていた。「国語人」の自由な言論活動も、友松の庇護のもとに行なわれていたのである。

崎田茂信は、常に新しい教育運動に関心をもち、児童中心主義の実践をこころみていた。杉田哲は、米子でボーイスカウト運動の中心となっていた。

三明太蔵は、大正十二年、明道小学校長に就任したが、それま

でに付属小学校訓導として芸術教育の基礎を築いていた。明道小学校では、母の日週間を設定し、音楽・図画・工作・児童劇、あらゆる芸術的要素を総合して、母への感謝を捧げる週間としたのである。三明は参禅によって修養につとめ、不断の読書家であったから、哲人として校下の信頼を集めていた。このような校長によってはじめられた米子市初等教育研究会は、太平洋戦争中の一時期を除いて今日まで教師の相互研究の機会として続けられている。第二次大戦後、初等教育研究会の形式は県内各都市によって模倣され、初等教育および中学校教育研究会としてその盛況を誇っている。相互の独自性を尊重する創始者たちの精神は、常に今後の指標でなければならないであろう。



三明太蔵と付属小学校の自治画

(5) 中等育の拡張と奨学制度

中等教育拡張のためには、県内に数多くの私塾・私学校が興廃を重ねたが、その中でもっとも先駆的で、しかも確実な歩みを進めたものは豊田太蔵である。

豊田太蔵

豊田が、鳥取県中部に中学校を設立したいと考えるようになったのは、明治十年代のことである。公費をもって経営する中学校が、行政の中心地鳥取にだけ設置されていることは、豊田の眼にはきわめて不合理なものとして映った。中学校教育は、万人に開放されねばならない自已開発の場であった。また、小学校終了時の学力で生涯を決定づける考え方にも従うことができない。それが豊田の教育思想であった。豊田は、自ら「晩登」と号して晩熟の人材にも勉学の機会を与えねばならないと決心していた。

豊田は、私財を投じてその理想を実現しようとした。自分の出身地である由良に育英会を起こし、その経営するものとして育英中学校を作ったのである。私塾として発足し、公認の中学校となるまでには幾多の苦心がねられ、家族の生活さえそのぎせいにして省みないほどであった。

大正期の教育熱は、県立中学校の不足を告げたが、豊田の中学校はその不満を補うに充分であった。しかし、豊田は、つねに行政の立場からの独立を守り、時流によって教育理念を動かされるようなことがなかった。彼は、いつでも教育を生徒個人の側から

考えようとした。豊田にとって、青年期に経験した明治維新の印象が強烈であったから、「学制」の精神が終生の教育理念となって動かなかったのである。豊田太蔵の理想は豊田収によって受けつがれ、第二次大戦後に至るまで、育英校独自の歴史が続けられた。

育英中学校に並ぶものとして、古田貞によって育てられた家政女学校があげられねばならない。昭和三十三年、古田は鳥取に裁縫塾を開いた。女子が家庭経営にあたり、独立の存在として認められる手段、それが裁縫技術であった。古田は、技能中心の各種学校として経営し、今日の家政高等学校の基礎を作ったのである。

鳥取県は、大正期の向学熱高揚時代を迎えて、急速な中等教育の拡張を迫られた。そのとき、もっとも問題となったのは鳥取第二中学校の新設であった。設立地の紛争と資金難によって、ほとんど絶望的な状態におちいっていた。

林重治

そのとき、徳田平市は、設立資金の全額を寄付して、問題を一挙に解決した。徳田は、漁業会社を経営する企業家であったが、かねてから郷土の発展と青年の教育に深い関心をもっていた。鳥取中学校長林重治は、徳田平市と鳥取県当局との間に立ってあっせんにつとめた。徳田の意を体した林は、第二中学校の校長となって、その創立事業を遂行した。

林重治は、寮における生活指導を重視し、進取的で独自な第二中学校の校風を築き上げた。精神薄弱児教育の父とたたえられる糸賀一雄は、林重治のもとに育てられた人材の一人である。

徳田平市に並ぶものは、米子市の坂口平兵衛である。昭和二年、坂口は米子商蚕学校設立資金の全額寄付を申し出た。米子にかねてから必要とされていた商業学校と、蚕業技術者のための中等学校とを合せて、総合制の中等学校がその時に実現したのである。県内の新聞は「東の徳田か西の坂口か」とほめたたえた。

坂口平兵衛の教育事業は商蚕学校の設立だけではなかった。大正三年、坂口は私財三万円を基金として「坂口奨学館」を設立し、高等専門学校進学者に学資金貸与の制度を始めたのである。これは、鳥取県内における私設の奨学制度として最初のものである。坂口奨学館の事業は第二次大戦末期まで続けられ、総計一二八人の青年が高等教育の機会を与えられた。その中には四名の女性が含まれ、また、奨学生は鳥取・島根の両県にわたっていた。

奨学制度としては、奥田義人記念奨学会があり、また、鳥取県勧学会は明治三十三年から事業を続けていた。なお、河田景与らのはじめた「成材社」の伝統があり、学生寮としては東京の「久松閣」、佐々木惣一が京都で試みた「固伯寮」などがあった。

四　戦後新教育の展開と教育遺産

混迷する戦後の鳥取県教育界で、最も早く、しかも確実な方向を明らかにして行ったのは長尾寛治であった。長尾は、求道的な読書家として知られ、三明太蔵の後継者として明道小学校長の位置にあった。昭和二十一年七月十六日、長尾寛治は明道校の授業やクラブ活動を公開し、民主教育について校長自ら意見発表を行なった。

戦時中に便乗的な活動をしなかった彼は、戦後もまた特別に奇をてらう必要がなかった。昭和二十二年二月、「学校演劇研究発表」をも引き受けて、淡々とその所信を表明していった。とう写印刷による「明道新教育月報」を、千数百ページにわたって独力で発行し、意見交換の場を与えながら、職員に対する啓蒙的な教育を展開した。

米子市は、教育計画のための実態調査を行ない、戦後に例を見ない市立高校を創設したが、市立学校発展の基礎は、鑵含雄校長の豊かな学殖と高潔な人格とによって築き上げられた。

田村虎蔵

成徳小学校は、大正期以来の自由教育の伝統に当たって、生活中心主義の教育活動を展開した。また、浅村忠晴を校長とする河北中学校は、教師不在の時にも進行するほど徹底して自主学習方式を実践した。八頭郡の柿坂黎介は、戦前に没頭した同和教育の経験によって、戦後の解放教育を大きく推し進めた。

新教育の推進を支えたものは、鳥取県教育の遺産の中に数多く見出すことができる。しかも、まだ発掘させるべき遺産は決して少なくないのである。

たとえば、音楽教育の改革者田村虎蔵、文部省唱歌の作曲者岡野貞一、大阪音楽大学の創立者永井幸次ら、鳥取県には音楽教育の人脈が形成されていた。これは、明治二十五年八月、理学博士にして音楽学校長であった村岡範為馳が「普通教育における音楽」という講演を行なった結果である。田村虎蔵・永井幸次・林重浩の三名は、ただちに村岡のあとを追って上京し、音楽学校に入学した。そして、それぞれに抜群の事業を達成し、後継者を育てた。

入沢実寿は、鳥取県人として教育の学問的研究を志した最初の人物である。日野郡の山間で内藤岩雄の感化を受け、代用教員をつとめながら教育への開眼を行なった。そして、新設の米子中学校でようやく中等教育を受け、上京して本格的な研究生活に入ることができた。成徳小学校の例に見られるごとく、県内小学校の実際指導に与えた影響も少なくない。

橋田邦彦、西晋一郎、佐々木惣一は、いずれも鳥取中学校の卒業生である。橋田は文部大臣としてばかりでなく、生理学者として、また思想家として鳥取県人に深い影響を与えている。西晋一郎に師事した鳥取県人もまた多く、佐々木惣一は文化勲賞を受けた法学者として鳥取県民の誇となっている。

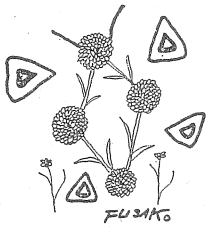
中井金三は、明治の末年、倉吉中学校に美術の教師として着任した。彼は、鳥取県内に来た最初の美術学校卒業生であった。中井の周囲には、美術愛好家の集団が形作られたが、その中に育ったのが前田寛治であった。前田は、パリに留学して日本画壇に新風をもたらしたが早世した。中井は、砂丘社の中心となって、長寿を保ちながら倉吉の地に美術愛好の風を育てていった。

なお、教育ジャーナリストの始祖と称する藤原喜代蔵もまた鳥取県人である。東伯郡東郷町の農家に生まれ、小学校三年中途退学の学歴をもって上京しながら、竹越与三郎に認められて読売新聞に入社し、独創的な「明治教育思想史」以下多数の著作を発表した。

森本角蔵は「四書索引」「五経索引」などの大著を完成している。県内にあって文化活動に献身して黒川多三郎・木山竹治・足立正らの教師もある。また、日常の教育活動に没頭した林菊三郎の例もある。

鳥取県教育の遺産発掘は、ようやく手をつけられたばかりであるが、そこから汲み取られるべきものは少なくないはずである。鳥取県における教育とは何か、教師とは何か、最初の問いかけは今後もくりかえし問い続けられねばならないであろう。

（鳥取県教育研究所員）



第45回

人物を中心とした

島根県教育郷土史

沢　弘吉

はじめに

藩政時代の本県の地域には、もと出雲・隠岐を管理する松江藩および広瀬・母里の両支藩、さらに石見に浜田藩、津和野藩および幕府直轄の大森銀山領があった。明治二年の版籍奉還に続いて、同四年七月廃藩置県が断行されると、出雲は松江・広瀬・母里の各藩がそれぞれ県となった。この三県は、同年一一月、浜田県に属していた隠岐を合わせて島根県となった。石見では、はじめ浜田藩と銀山直轄領を合わせた大森県と津和野県とであったが、のちに津和野県とともに浜田県となった。同九年四月には、島根県がさらに浜田・鳥取の両県を合併して、出雲、石見、隠岐、因幡、伯耆の五か国を包含する島根県となった。そして自由民権運動の発展の中で、鳥取県の再置運動が進められ、ついに同一四年九月、因幡、伯耆の両国が分離して鳥取県再置が実現し、同時に今日に見る島根県が誕生したのである。

藩政時代の教育としては、各々の藩に特有の郷学（藩校・寺小屋・私塾）があった。藩の武士教育の目的をもって経営されたのが藩校で、庶民の教育を担当したのは民間の寺小屋・私塾であった。

松江藩では、藩祖松平直政が江戸より儒官を招いて教育したのが開学の始めである。直政の玄孫宗衍は、桃白鹿等の儒者を招いて教育の任に当たらせ、宝暦八年（一七五八）松江市母衣町の邸内に「文明館」をつくった。これは「明教館」、「文武館」、「修道館」と改称しつつ、主として朱子学を教えた。同館には、国学所、軍学所、英学所、蘭学所などが設けられ、仏人アレキサンドルやワレットらの外人を招いて諸外国の学問もとり入れた。藩内には著名な学者、内村鱗香、沢野修輔らがいて、郷学のために尽くした。松江藩には、寺小屋一〇〇余、私塾三〇余あり庶民教育に当たったが、寺小屋では主として読書算等を、私塾では漢学・和歌などを教えていた。塾生は各塾とも二〇〇人前後であった。

広瀬藩の藩校「修文館」は、享保三年（一七一八）、七代藩主松平直義が「凡そ藩士たるものは、文武の両道を修行せざれば事に堪ゆる能わず。故に各自出精すべし。心得違いある者は、相当の処分申しつくべし」と発令して設置した。修文館には、皇学所・漢学所・洋学所・医術所・的場・槍場・鉄砲所・捕手場などがあった。また、寺小屋・私塾とも相当数あった。

母里藩では、天保七、八年（一八三六、七年）ごろ、松江藩から漢学者円山齢を招いて「明徳館」を設立した。

石見の浜田藩には、藩学としてみるべきものはなかったが、松平康定の藩政時代に国学の復興が唱えられ、大義名分を主とした郷学の振興に努めた。寺小屋は一〇〇余、私塾などは相当数あったもようである。

津和野藩には、代々名君が出たが、特に三代亀井茲視は、新文化を吸収し、人材の育成に努めて郷学の基礎をきずいた。八代矩賢は天明六年（一八七六）、藩校「養老館」を創立し、文武の教育に力を注いだ。一一代茲監は、これを拡充し、一万両を投じて校地を拡張し、諸施設を増築した。そして内容面では、従来の漢学・礼学・兵学にあわせて、医学のなかに蘭医科を設け、新しく国学科を加えた。国学教師岡熊臣が撰定した「養老館学則」にある「道者天皇の天下を治め給ふ大道にして開闢以来地に墜ちず、人物の因へ立つところにして今日万機即ち基道なり。古語に日、惟神とは神の道に隨ふも、又おのずから神の道あるをいふなり（中略）学者まさに名分を正し、大義を知るを以て要とす。（中略）道を学ぶもの、外には法令を肯かす、内には忠孝を励まし……。」が津和野藩学の精神であった。この養老館から維新前後に幾多の人材を出したことは有名である。津和野藩には寺小屋、私塾をあわせて六〇くらいあったが小規模のものが多かった。

明治の教育

明治五年八月学制が頒布されると、本県においてもそれに即応して急速に学校体制が整備された。これは、藩学・寺小屋・私塾などの教育施設がかなり充実していたからである。学制頒布後一年余で、県下の小学校が二百六十余校に達した。

明治八年三月、松江市殿町の大野舎人宅を仮校舎として、県立教員伝習所が開設された。正科・予科に分かれ、在学期間は一一か月であった。同九年一〇月、伝習所は松江師範学校となり、広瀬、浜村に支校をおいた。同一二年、鳥取師範米子支校を合併し、広瀬、浜村の支校を廃止、同一五年米子支校を分離、同一七年島根県師範学校とした。同一一年に松江女子師範学校がおかれたが、その後いろいろ変遷を経て、同三六年、島根県女子師範学校となった。

明治九年三月、松江教員伝習所の校内に、変則中学校を開設した。これは明治六年の岐阜中学校、同七年の岡山第一中学校についで、全国で三番目であった。同一〇年松江中学校として独立し、同

一七年島根県立第一中学校、同四〇年県立松江中学校となった。松江高等女学校は、同三〇年松江市立高等女学校として開校、同四〇年県立松江高等女学校に昇格した。浜田中学校は、明治二四年石見学校として発足したが、同二六年島根県立第二中学校となった。浜田高等女学校は、同三三年に設置された。

明治三八年、盲唖生も同じ人間であるというヒューマニティの上に立って、福田与志が私立松江盲唖学校を設立した。全国で一一番目の盲唖学校であった。その後、四〇年五月から松江盲唖学校は松江婦人会の経営となり、同四四年に外中原町に新校舎が落成、盲唖保護会の経営で、財団法人松江盲唖学校となった。

明治時代における本県出身の著名な学者、教育者には、中央で活躍した人も多いので、ここでは「郷土の教育に尽くした人々」とは別に「明治の先覚的な人々」についても記述したい。

松本巌（一八一九～一八七八）

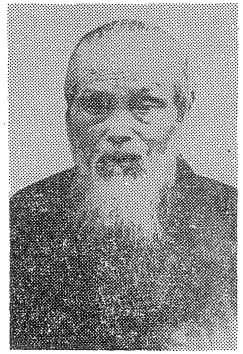
家業の医師になるため漢学を学んだが、頼三樹三郎らの志士と親交を結び二〇年間国事に奔走した。安政二年（一八五五）郷里に帰り、出雲大社の後方の八雲山のふもとに「勇塾」と称する家塾を開いた。この塾では、一般の漢学塾で使用される教科書のほかに、「名教百首」「詔勅要略」「日本魂」「日本魂説」など自著の日本倫理的なもの、「古事記伝」「古史徴」「六国史」などの歴史書、明治以後のものには「万国史」「世界国尽」「西国立志編」などがある。この塾の教育を受けた者は数百人に達している。

雨森精翁（一八二二～一八八二）

一〇歳のとき松江藩校明教館にはいり、一三歳で経史の代講をつとめるほどになった。後、大阪の篠崎小竹、江戸昌平黌の林大学頭に師事した。天保一三年、幕府が松江藩に対して南北史の校勘出版のことを命じたため、藩命によって帰国し、「北史」の勘校にあたった。嘉永元年翻刻は完成し、幕府に献上した。嘉永三年、城下の内中原（現在の内中原小学校の敷地）に養生塾を開き、子弟を教授した。その後、平田で私塾、亦楽舎を開いた。彼の教育方針は「修己治人」であり、いたずらに書物にとらわれず、漢土の風になじまず、日本人たる自覚をもって学問を活用し、有用の人物たれ、ということであった。

内村鱸香（一八二一～一九〇一）

生家が貧しい行商であったため苦学した。一八、九歳で初めて正覚寺の典攬和尚に師事したが、それも思うにまかせず、太宰春台の「和読要領」などを読んで自学自習の勉学に努めた。後、大阪の篠崎小竹の梅花塾に入り、ついで江戸の昌平黌教官安積良斎の門に入った。安政四年（一八五七）大阪で塾を開いたが数年で藤沢東畦・後藤松陰の塾につぐほどの盛況をきたした。元治元年（一八六四）藩命で帰国してから藩校文武館（翌年・修道館と改称）に出仕した。彼は自己の体験により庶民教育の必要性を痛感し、「町家郷民の子弟で、勉学の志はあっても学校に入学できずそのままにうち過ぎる者が多い。彼等に孝悌忠信の義



内村鱸香

を教えて御上の御用に立てたい。松江でも市中教諭所を設けて郷町の子弟の志の有る者を教導したい。」（「奉願口上之覚」）という主旨の嘆願書を出した。しかし、藩からは何の沙汰もなかった。明治七年西茶町に家塾相長舎を開いて子弟の教育に当たった。ここで学んだ者三千余人、若槻礼次郎・北尾次郎・梅謙次郎・滝川亀太郎・桑原羊次郎・二葉亭四迷等々がいる。明治八年設立の教員伝習校、（後の島根県師範学校）、同九年設立の変則中学校（後の松江中学校）の教師を任じた。

山村勉斎（良行）（一八三六～一九〇七）

広瀬藩の「修文館」発足時に松江藩から教授として招かれた山村良頭の孫であるが、自治的修練を基本とした教育を行なった。明治四年廃藩置県となり、五月一五日に藩校「修文館」は閉じられたが、勉斎は直ちに私塾「皇漢学修文館」を開いた。当修文館はこの地方の教育に重きをなし、出雲・因幡・伯耆より来たり学ぶ者が前後一千人を越えた。明治二九年、島根師範学校で同盟休校が起こり、校紀がきわめて頽廃した。時の県知事と校長はこれを憂い勉斎の出馬を要請した。これに応え勉斎は島根師範学校講師となった。

山村勉斎

家学は朱子学であったが陽明学にも近く、山田方谷と交友するとともに彼を敬慕した。著書に「四書五経磨鏡録」「蘇詩一斑」などがあり、別に漢詩雑誌「昇平一斑」を発行した。

勝部其楽（只市）（一八四六～一九三三）

塩治の儒学者伊東宜堂の有隣塾（当時出雲での最大の私塾）の塾長であったが、官軍に入り奥羽を転戦した。維新後は英国領事館助役クインについて英語を勉学し、やがてロンドンに遊学した、明治九年に帰国するとただちに今市町上成に英語学校を開校したが、翌年、当局の方針によって和漢塾とした。塾名は包蒙館で、修学年限三年、教科内容を文章、歴史、読法、算術、習字とした。生徒数も常に百人前後で隆盛をきわめたが、明治三一年、今市に郡立簸川中学校ができ、生徒漸減に赴くまま、四二年三月閉鎖した。

福田与志（一八六六～一九四一）

福田は明治二三年、一八歳で島根師範学校を卒業して本庄小学校訓導に任ぜられたが、たまたま未就学の一聾女児が学校に遊びにくるのを目撃して心を痛めた。また、兄福田平治も浮浪者を収容して松江育児院を創立したところ、そこには唖児もいたので、妹与志に盲唖教育の研究を勧めた。かくて福田は同三一年本庄小学校を退職して京都に出、京都盲唖学院の助教諭となった。同三三年、東京盲唖学校に転じ、東京高等師範学校長伊沢修二についてベルのヴィジブルスピーチ法の理論を研究し、教育効果の大なるを知った。翌年ふたたび京都盲唖学院に帰って訓導となり、四年間在職して、三八年四月松江に帰り、盲唖学校の設立準備にとりかかった。市長や郡長を歴訪し、基金や生徒募集を依頼するなど八方手をつくした結果、五月に松江私立盲唖学校設立の認可を得た。このときの校舎は母衣町のある民家の一室を借用、当時の児童数は盲児四、聾唖児七

名であった。彼女は大正一一年落成したばかりの寄宿舎の一室で亡くなった。

渡辺寛一郎（一八五三～一九三八）

松江藩校修道館から広島師範学校に学び、開発教授法・集団学習などを研究し、卒業後、松江教員伝習所の教師となった。明治一五年、東京師範学校に入学し、スペンサー等の新教育を研究して、同一六年帰郷、松江師範、松江中学の教師となった。渡辺は、官学にあきたらず、同年末、現新雑賀町に私塾「普通学舎」を開き、自主独立を基調とした教育を行なった。同二一年に、退職して在野の自由な立場で独立自尊、徳育主義を根幹とする私学経営にふみ切った。そして創立したのが「進取学館」であり、同二三年に、旧藩門閥経営の「松江義塾」を合併して「中学修道館」と改称し、南田町に移転した。県内はもとより、鳥取・山口・広島の各県、遠くは鹿児島県からも来学する者が多かった。同四〇年、知事の申し入れで、中学校修道館は松江市立工業学校修道館となり、翌年県立に移管された。

木幡久右衛門（一八六七～一九〇九）

松江藩校で漢学を学び、東京専修学校（のち専修大学）で法律ならびに理財学を修め、帰省して郷土文化の開発に力をつくした。日清戦争後、文化運動が盛んになり、県民の間に読書や図書の収集が流行するようになった。かねて地方文化の向上に図書館の欠くべからざることを痛感していた木幡は、明治三二年設立準備にとりかかり、広く世人に援助を求めた寄贈図書と家蔵図書をあわせて七千七百余冊を獲得してから図書館設置許可を得て開館し、初代館長となった。翌年、旧藩主松平家から城山三の丸に土地を借用し、多額の私財を投じて図書館を新築した。当時わが国には、公私立を通じて図書館と称するものはわずか三〇数館にすぎず、京都以西には一つもなかった。これによって、大阪、福岡、山口などでも図書館設立の機運が促進された。この図書館は大正八年に松江市立となり、昭和二一年に県立に移管されて現在にいたっている。

木幡久右衛門

奥原碧雲（一八七三～一九三五）

明治二七年島根県尋常師範学校を卒業して、三力屋村の小学校訓導となったが、明治二九年郷里の八束郡秋鹿村岡本尋常小学校に転任、郷里の学校に教鞭をとった。当時同校は児童数二〇余名の単級小学校に過ぎなかったので、村当局を説き、それまで、村内にあった三つの小学校を統合して、児童数二二〇名、五学級の秋鹿村尋常高等小学校とすることに成功し、同時にその校長となった。以来二九年同校の校長を勤めた。農村の児童生徒に質実剛健の志操を涵養し、農業に親しみ、勤労愛好の気風を養うため、小学校に農業実習地を設け、児童に対して家庭一坪農業、家庭十蛾養蚕を奨励するなどした。同三七年村立の実業補習学校が新設されたので、その学校長を兼任して青年教育に力を入れ、さらに大正一一年には女子教育のため村立女子技芸学校を設立し、洋裁、染め物など実際に役だつ

教育をしたため、地域住民から非常に感謝された、社会教育にも力を注ぎ、青年会、婦人会、教育会などを結成して村民の教化に努めた。

明治の先覚的な学者、教育者

中沼了三（一八一六～一八九六）

隠岐出身、京都の鈴木遠音の門に学び、漢学を修めたのち、京都で塾を開いた。彼の豊富な学識と熱烈な求道的態度とは、西郷従道、川村与十郎、桐野利秋、中岡慎太郎、松田重助らの門下生を引きつけた。孝明天皇が学習院を設けられると、儒官となり、また仁和寺宮の伴読ともなるなど、討幕運動の理論的指導者となった。明治元年、朝廷に大学建設の議が起こるや、平戸藩士楠本謙三郎とともに創設したのが漢学所である。同二年明治天皇の侍講となったが、これは平民で初めてのことであった。

西周（一八二九～一八九七）

津和野藩校養老館で儒学を修め、嘉永六年、藩主亀井茲監から沿岸防備のため、江戸行きを命ぜられた。江戸藩でオランダ語を学んだが、洋学を志し脱藩した。安政四年（一八五七）、幕府の藩書取調所（洋学研究所）教授となり、文久二年（一八六二）、幕命により軍艦咸臨丸でオランダに留学、ライデン大学で「法学（自然法）」、「万国公法学（国際公法）」、「制度学」などを学び、コント、カント、ミル等の哲学も研究して慶応三年（一八六七）帰国、日本に哲学や社会学を紹介した。明治三年、兵部卿となり、山県有朋のブレーンとして兵制・学制の二大制策の樹立に参画した。同七年、森有礼の創立した明六社に投じ、福沢諭吉などともとに「明六雑誌」を発行して、新しい西洋文学の紹介、旧思想の批判などに文筆をふるった。「哲学、心理学、主観、客観、理性、悟性、演繹、帰納、概念、抽象、具体、総合、分析」などの学術用語は彼の訳語である。また東京師範学校の初代校長も勤めた。

西周

福羽美静（一八三一～一九〇七）

津和野藩校養老館で漢学と山鹿流兵学とを修めたが、藩命により国学を専攻し、天保六年に上京して郷土の先輩大国隆正の敬事学舎にはいった。慶応元年藩命をおびて京都に上り、尊王志士と国事に尽くした。明治二年（一八六九）、明治天皇が東京へ移られるのに随伴し、侍講となった。同年、美静はさらに大学御用掛を命ぜられ、和泉橋の旧藤堂藩邸を大学東校として医学の専科とし、一橋門外の大学南校を其他各学科専攻の所として今日の東京大学の基礎を固めた。美静は同一二年、学士会員に推され、その翌年は文部省御用掛を兼ねた。また東京女子師範学校を創立して初代校長となり、かねての持論である女子教育尊重の基盤を築いた。

福羽美静

北尾次郎（一八五三～一九〇七）

松江市出身。明治元年、上京して開成所でフランス語を習い、同三年、官費でドイツに留学した。ベルリン大学で近代物理学、数学を学び、のちゲッティンゲン大学で、色彩感覚を物理学で扱った論文を出して学位を得た。再びベルリンに帰り、有名な色盲診断に使用される検光器を発明した。帰国後同一八年に東大教授となり、日本に初めて「気象学」を導入した。数学・物理学の大家としても名をなしているが、発明器具も先の検光器のほかに、穀粒剛性試験器、木材分割性試験器、電気測定器などがある。

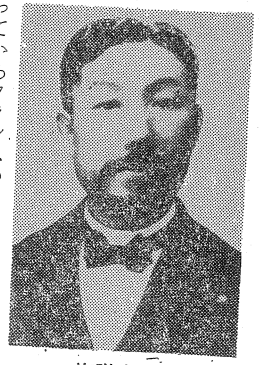
小藤文次郎（一八五六～一九三五）

津和野藩校養老館に学び、上京後、東京大学理学部地質学科を卒業（一期生）して、内務省に入った。同一三年、文部省留学生として地質学研究のため、ドイツのライプチッヒ大学、ミュンヘン大学に学んだ。明治一七年「日本産数種岩石の研究」で、ライプチッヒ大学から学位を授与された。同一九年東大教授、二一年地質でわが国最初の理学博士となった。小藤は五〇年に近い学究活動を通じて多数の論文を公表したが、主要なものはたいてい英文をもって綴られている。地震や火山に関する研究がことに有名である。小藤は地質学会に対し、世界的に貢献しただけでなく、日本の地質学界をその揺籃時代から今日の隆盛に持ちきたす基礎を築いたといえる。

小藤文次郎

梅謙次郎（一八六〇～一九一〇）

松江市出身。東京外国語学校、次いで司法省学校を卒業、司法省にはいってからフランスのリオン大学、ドイツのベルリン大学に留学した。帰国後、明治二三年、東京大学教授に任ぜられ、民法講座を担当した。また、法政大学の総理も務め、ことに中国留学生教育に努力した。彼は憲法制定の際はフランス留学中であったため関係しなかったが、皇室典範、民法等の起草にあたった。また、韓国の法律顧問も兼ねていた。著書には、仏文「和解論」のほか「民法要義」「民法原理」、「商法義解」などがある。



梅謙次郎

森鷗外（一八六二～一九二二）

津和野の藩医の長男に生まれ、七歳で藩校養老館で漢学、国学、オランダ語を学んだ。一二歳で父とともに上京し、一九歳で東大医学部を卒業、陸軍軍医となった。同一七年、ドイツに留学、陸軍衛生制度を研究するかたわら、音楽・文学・美学・自然科学などを学んだ。帰国後、近衛師団の軍医部長などを務めるかたわら、「舞姫」「雁」「阿部一族」「山椒大夫」「高瀬舟」「渋江抽斎」などをはじめ数多くの名作を残した。これらの作品は今日でも鑑賞教材として、中、高校の教科書にとり入れられている。

森　鷗外

岸清一（一八六七～一九三三）

松江藩校修道館に学び、松江中学を経て、明治一八年、東大法学科に入学、卒業後弁護士となった。岸は、明治四〇年、ロンドンでの第四回国際オリンピック大会を参観して、日本のスポーツの遅れを痛感した。同四五年、大日本体育会を創立し、大正一〇年会長となり、第八、九、一〇回の国際オリンピック大会に団長として参加した。大正四年、東京弁護士会長となり、法の確立と人権擁護に力を注いだ。大正一三年国際オリンピック委員会より国際委員に任命された。また、岸は郷土愛に燃えて、岸育英会を設けて人材の育成につくしたり、小泉八雲記念館の建設、旧制松江高等学校の誘致創立、松江市の岸運動場の寄付など、郷土のために尽力した。

俵国一（一八七二～一九五八）

鉄鋼界の権威といわれた俵は、東大工学部を卒業してから、ドイツのフライベルグ大学で鉄冶金学を研究し、帰国後、東大教授となった。ドイツからマルテンス大型金属顕微鏡を輸入し、鉄鉱の顕微鏡組織の研究を始めた。日本における初めての顕微鏡による鉄鋼研究者となった。大正四年、俵は日本鉄鋼協会を創立し、機関誌「鉄と鋼」を刊行した。著書には「鉄と鋼」「古来の砂鉄製錬法」「日本刀の科学的研究」などがある。東大工学部長時代に学年制を廃して単位制としたことは、他の学部でもこれに倣った。

岸　清一

高岡熊雄（一八七一～一九六一）

津和野小学校から山口中学校へ進み、卒業後は札幌農学校に学んだ。同所の研究生から講師となり、明治三三年農政学および農学経済学研究のためドイツに留学した。帰国後は札幌農学校教授となり、農政学、植民学の講義を担当した。昭和八年には第三代目の北海道帝国大学総長となり、低温科学研究所、付属病院登別分院、肉製品製造実習室、高山植物園、北方文化研究室を新設するなど、大学における研究機関の発展に努力した。著書には、「農政学」「米国の農業政策」「農政問題研究」「樺太農業植民問題」などがある。

大正・昭和の教育

明治時代は、教育組織の完成に眼が向けられた時代であると同時に、日清・日露の両戦役に勝ち抜くための教育に懸命の努力が払われた時代でもあった。明治の終りごろには戦勝気分のところへ、欧米の近代思想がはいり、個のめざめとともに教育もしだいに変貌をとげ、自由教育が盛んになっていった。

大正・昭和にかけて、本県の教育研究の拠点となったもののひとつに、島根県師範学校付属小学校と女子師範学校付属小学校があ

る。男師付属では、教科研究に力を入れるとともに、低・中・高・高等科の四段階による教育課程の編成に着手した。ことに低学年教育の在り方を検討して幼稚園と小学一・二年を一体とした幼年教育をうちたて県下に普及させた。女師付属は今市町から浜田市へ移転されるや、石見部の教育の中心となった。昭和初期、同校に設置された精神薄弱児学級・身体虚弱児学級などは、本県では最も早いものであり、全体観に立つ生活教育を行なって、全国的に反響を呼んだ。

昭和初期は、生活綴方教育が盛んであったが、昭和一六年、大東亜戦争が始まると、学校教育はほとんど戦時色にぬりつぶされていった。学徒動員令、学徒戦時動員体制樹立要綱が出るにおよび、県下の中学校、女学校、実業学校の生徒は、軍需工場および農村へ動員され、翌年には小学校高等科生もかり出されることとなった。そのころには学童疎開も盛んで、大阪市などから疎開学童が多数来県し、県下の寺院をはじめ施設へ収容された。同二〇年三月には決戦措置要綱が出て、国民学校初等科を除いて全面的に授業停止となった。

終戦後の二二年に六・三・三・四の新学制が実施され、一年間の混乱期ののち、二三年の教育委員会設置とともに、新学校制度も軌道に乗りだした。しかし、新制中学は生まれたばかりで、校舎整備に苦労が大きく、旧制中学校・女学校・実業学校なども新制高等学校に切りかえられたので、内容の充実に期日を要した。また、戦後の教員の研究、研修に大きな役割を果たした、島根県立教育研究所（現在教育センター）も昭和二三年に創立された。終戦直後の二一年には、島根県教職員組合が誕生している。

平田駒太郎（一八七一～一九二一）

長崎県出身、明治三七年、前年開設されたばかりの島根県女子師範学校教諭として着任した平田駒太郎は、教材園としての植物園を設置しようと考えた。初めは格好の土地がなく、日かげの捨地や、便所の裏など利用できる所は空地、斜面など何でも利用した。やがて、これも、学校の全地域にわたり、分類園、観察園、風致園、有毒植物園、薬用植物園、工業植物園、蔬菜園、山林植物園、水生植物栽培地、水田、桑園、温室、盆栽、温床などに分けられた。利用の便を図るために、科別、種別等も巧みな土地利用法と相まって合理的に経営された。経営面では、全地域を一〇区に分け、二〇〇人の全生徒を各区に配し、区長をおいて責任をもたせ、三～五名の週番をおいて管理に当たらせた。区員は毎週水金の二日、放課後主任教師の指導のもとに、播種から収穫までいっさい教えを受ける機構になっており、卒業までに全園を経営するシステムになっていた。裏山は久徴園といい、簸川平野を一望のうちに眺められるので、生徒の憩いの場ともなった。この植物園が、県下の各学校に学校園をつくる端緒となった。大正八年これが教材用としての価値の高いことが認められ、当時の西村知事から平田の姓をとって平田植物園とするという命名書が校長に渡された。平田のいた女子師範学校は、その後、浜田市に移転し、そのあとは今市高等女学校となり、現在出雲高等学校と改称されている。同校では、平田の集めた標本をもとにして、将来、科学教育センターを設置したいとの構想をもっている。

桑原羊次郎（一八六八～一九五六）

松江中学から東京の神田法律学校（現中央大学）に学び、卒業後、アメリカのミシガン大学院に留学して、学位を得た。明治四二

年、農商務省から日英博覧会の美術部計画委員として渡英し、翌年同博覧会の審査員となった。桑原の彫金と浮世絵の研究は世界的にも高く評価されており、刀剣のツバと浮世絵は日本有数の鑑定家であり、多くの秘蔵品をもっていた。著書には「浮世絵肉筆と版画」「不昧公遺墨集」などがある。大正二年に松江へ帰るや、郷土文化、教育、産業、政治など各方面に活躍した。文化、教育関係では、県立に移管されるまでの山陰盲唖保護会理事長、私立松江盲唖学校長や市立に移管されるまでの松江図書館の理事長に就任したり、郷土の各種資料の蒐集に力を注いだりした。それらの郷土資料のうちの書籍の大半は「桑原文庫」として島根大学内に保存されている。

青木実三郎（一八八五～一九六八）

島根師範を卒業したのが明治四一年で、当時、師範学校でも図画は臨画中心で、写生を少しくらい加味する程度であったから、まして小学校では手本そのままの臨画に終始していた。同四四年郷里の仁多郡馬木小学校へ赴任してから、手本を主体としながらも、児童の創作味を加えるという新方向をとった。次第に、写生画や改作画が主体を占めるようになった。同四年に校長になったが、図画だけは全校のを一手に引きうけ、改作画を考案画と改めて、児童の創作意欲を伸ばしていった。わが国の自由画の創始者といわれる山本鼎がロシアの自由画教育や農民美術を研究して帰り自由画を提唱したのが大正八年であったので、青木は山本より前に自由画らしきものを始めていたことになる。同九年の松陽新報社主催の自由画懸賞募集展で、審査にあたった元帝展審査員内藤伸は「馬木校の少年の感覚と、放胆にして鋭敏な観察とが極めて自由に流露して、少しの停滞もなく感じたままを卒直に描出し、極めて創意に富んだ作風をとげている。」と評した。青木は「自立自学の図画教育の創造」という言葉を使って図画を通しての「全人教育」をねらい、共同製作などによって社会性の陶冶を図ったりした。

山根新次（一八八五～一九六二）

出雲市出身、東大の地質学科に入り、郷土の先輩小藤文次郎教授のもとで「石見国浜田村付近の地質」を書いて、「地質学雑誌」に掲載した。明治四三年卒業、農商務省鉱山局地質調査所技師、京大理学部講師を経て、九大工学部教授となり、昭和一〇年には鉱山局地質調査所長も兼任した。同一六年には日本地質学会会長に就任した。

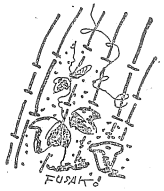
同二四年、新教育体制による島根大学の創立にあたり、初代学長に就任した。島根大学も他の新制大学の多くの例に漏れず、形は松江高等学校、島根師範学校、島根青年師範学校の統合昇格したもので、文理、教育二学部より成る小規模のものであった。この新制大学の発足に当たって、最も緊要で困難な問題は、㈠地元負担金の確立と履行、㈡分校等を統合廃止して分散した学部の集合、㈢教官陣容の充実と受け入れ態勢の確立などであったが、それらの解消に努めながら島大今日の基礎を確立した。続いて浜田分校の統合問題が起こったが、これについても非常な努力をし、全国最初の分校統合に成功した。教育学部の西川津移転、教育学部内への音楽科特別教科課程設置、文理学部の法科の充実に努め、同二八年の開設以来最初の学長選挙に再選された。また、地方大学は地方子弟の育成とともに地方文化の発展にもつくす義務があるとして島根県下の開発事業にも大きな寄与をした。（島根県教育庁総務課企画広報係長）

第二回

人物を中心とした

岡山県教育郷土史

——主として明治期における
小学校と幼稚園——



秋山和夫

一　小学校の教育

1　就学督促に努めた人びと

明治五年、近代教育制度の発足にともなって、全国各地に新しい小学校が設置されたことは周知のことがらである。しかし、新しい「学制」の理念は必ずしも一般民衆の要望に合致せず、無条件に人々に受容されたわけではなかった。このことは、就学率の低さという点に如実に示されていたのである。

就学率の推移

	明治10年	明治15年	明治20年
岡山県就学率	43.5%	59.8%	67.5%
全国平均就学率	38.8%	48.5%	45.0%

就学率の上昇のために、政府のみならず、各府県は異常な努力を払ったのである。岡山県においても事態は同じことであった。しかし、岡山県の就学率は全国平均をかなり上まわっていた。明治十五年から二十年にかけて、全国平均就学率は下向化の現象を示しているにもかかわらず、岡山県では就学率上昇の傾向が見られたのである。

明治十一年七月、「郡区町村編成法」の公布以降においては、岡山県では就学督促の主たるにない手は、郡区長の指揮監督下におかれた小学校長、ならびにその配下にある教員の手に移されてきた。

当時において、就学率の上昇を妨げていた主たる理由は経済問題であった。家庭貧困のために就学できない

という子どもに、経済的な援助の手をさしのべることであった。多くの教師達は、貧困のために就学できない児童に、自費で経済援助をおこなってきた。このことが結果的には岡山県下の就学率を高める大きな要因の一つとなったのである。こうした事例は、当時、岡山県下で発行されていた「学事雑誌」に多く載せられているが、その一、二例を左に引用しておこう。

「備前磐梨郡小野田小学校長行本健三郎、訓導補　安達利登治、同　金谷某三郎氏が協力して同校区域内の沢原、佐古、殿谷三ケ村内の貧困にして就学年齢に至りても、入校難きものに与へて入校を勧めんとて、先頃中自費にて石墨、石筆、紙、墨、書籍等数多く買入れられ、又、三氏が賢愚に貧富の差別なし、貧家却って賢子を出す杯古事を引きて懇して演舌ありしかば、是迄学齢に至りても就学せざりし者四十名計りも不日入校することになりし由。」(「学事雑誌」)岡山山陽新報社刊、第一号、明治十二年十二月十二日)

「備前児島郡彦崎村には、小学教員岡保興氏の発起にて、先頃より有志者を集め、一社を結び、興学社と号け、教育、衛生の二事を担当し、学区内の貧困にして其子弟を就学せしむる能はざる者には、書籍、筆、紙、墨等を給して就学せしめ、或は夜学を開きて壮年輩に読書、筆算、書牘杯を教授し……」(「学事雑誌」第五号、明治十三年二月二十三日)

かくして、各地で教師達の努力が着々と実っていくのであるが、時にはその地区における有力者の教育に対する無理解な妨害とも戦わなければならなかった。

「備前邑久郡福谷村々会議員出井誠三郎は無類の学問嫌ひにして、今の学問は何の役にも立たぬ。小学校は屁の如し杯と無暗に誤論を唱へるより、無智の父兄等は之を聞き、得たり賢しと子弟を就学させぬ故、四十戸もある処にて登校の生徒は漸く三名のみ、そこで校長や教員が誠三郎に説諭すると其場にてナルホド、左様、最も至極感心仕りたとやらかしては居れど、帰ると直ぐに誹謗に出掛るには実に迷惑して居ると言ふ。」(「学事雑誌」第五号)

経済問題の解決以外にも、上述の如き教育に対する無理解な見解とたたかいつつ、教師達は積極的に学校の意義、教育の効用を民衆に納得させる努力を続けていくのである。このために、あらゆる機会を利用して、教育幻燈会なども開催して就学率の向上を企図したようである。こうした各地の教師の地味な努力を忘れることはできないのである。

2　小学校教育の充実に貢献した進藤貞範

進藤貞範の岡山県教育界での活躍は実に多方面にわたっていた。ここで述べようとする小学校教育の普及、充実ということ以外に、幼児教育、女子教育の振興に果たした彼の役割はきわめて大きいものであった。

進藤は安政四年（一八五七）岡山市に生まれ、岡山藩学校および、廃藩置県とともに改組され「教師としては漢学方面の人を一人も用ゐず、外国人教師として英国人ペルシワル・オスボンを雇ひ、純然たる洋式学校に仕立て」られた岡山県普通学校に歴学

し、漢学、英学、数学の諸学科を修めた。その後、大阪の儒者、森田月瀬の門に入りさらに漢籍を研鑽した。明治十六年、岡山県師範学校訓導として大阪から帰郷し、附属小学校へ赴任したのであった。

進藤の活躍はこの時から始まるのである。

明治十六年というと、すでに見たように県下の小学校の就学率は一般に六〇％前後であり、各地の小学校教師達が就学率向上のために懸命の努力を払っていた時期でもあった。また小学校の教育内容や教授法についてもその研究が意図的であったとはいい難い。この時点においては、岡山県師範学校附属小学校ですら「万事が不完全であった」というから、他の学校においてはかなり不満足な状態であったことは想像に難くない。

進藤は、漢学の素養を基盤としながらも、洋学的な学問の研鑽によって、新しい教育の重要性を痛感していた。そのために、西欧的な方法に基づく教授法の研究を行ない、それを実践し普及させることを意欲的におこなったのであった。地方小学校の「模範」となること、将来教師を志す師範学校生徒の「教授法練習のための学校」ややおくれて（明治二十四年）普通教育の方法を研究する「実験学校」の使命が与えられていた「附属小学校」訓導としての地位が、進藤をしてその面の研究により積極的に立ち向かわせることになったのであろう。

小学校教育に関しての進藤の業績は大要次のごときものであった。

第一に、岡山県下の就学率向上のための努力をあげることができよう。彼は就学率の向上に多くの関心を払い、すでに見たような各地の小学校教師のこの面での努力を援助しようとしたのであった。そのために彼は、小学校教育の積極的意義を一般の人びとに啓蒙することに力をつくした。「彼は教育狂と言はるる迄の熱心家なり。教育品展覧会を岡山城内に開き、爾来本県各郡に展覧会とか、学事奨励会とかを開会し、大いに教育の促進を致した。」(「岡山県師範学校創立五十周年記念誌」大正十三年)という。進藤や各地の教師の努力が、明治十五年以降の就学率の下向化という全国的傾向の中で、岡山県民の就学率を上昇させた大きな理由の一つになっている。

第二は、新しい教科の導入、普及をあげることができる。彼は明治二十年、附属小学校に「唱歌」と「英語」を正式教科としてとりいれた。当時、「唱歌」は土地の事情によっては欠くことのできる教科であった。西洋音楽は日本人にはなじみのないものであり、その普及にはかなりの時間と手間がかかった。岡山県では、明治十九年に創設された井原幼稚園などには、創設当初オルガンを備えて幼児に唱歌を教えていたという記録があるが、小学校で唱歌をとりいれたのは、岡山県下では附属小学校をもって嚆矢とする。

明治二十年代のはじめには、唱歌教育に対する父兄の無理解、唱歌を教えることのできる教員の不足、学校設備の不備などから、まだ唱歌教育をはじめていない学校が多かった。倉敷が生んだ山川均によれば、明治二十七年、彼の通っていた倉敷の精思高等小学校にはじめて唱歌がとりいれられたとのことであるが、「男

に歌を！」というので、男生徒は非常な抵抗を示したという。（「山川均自伝」一一七ページ）。

こうした中で進藤は、唱歌を教えるために夏休みには東京や大阪に行って、音楽の講習を受けて、それを児童に教えるという熱意を示した。進藤の努力にもかかわらず、岡山市内の小学校が唱歌を正教科としてとり入れたのは明治三十三年のことであった。

教科の導入に関する進藤の今一つの功績は小学校における「裁縫」と「礼儀作法」の振興に尽したことである。彼は初等普通教育における女性の実学的教養を「裁縫」と「礼儀作法」に求めた。当時「礼儀作法」は「修身」の中に包摂されており、「裁縫」は土地の事情によって加えることのできる教科にすぎなかった。

かかる状況の中で、進藤は小学校で「裁縫」と「礼儀作法」を振興するために県下の学校を啓蒙して歩き、それらの教科の研究会には、しばしば講師として各地に招聘された。これらの教科の普及発展のために著述活動をも精力的におこない、彼の編集になる「小学作法要録」（岡山武内書房刊・明治二十六年）は小学校のテキストとして広く県下の学校に採用、使用されたものの一つである。岡山市でも、彼の努力によって明治三十四年、「尋常小学校に、唱歌と裁縫の二科目を正教科として加える」ことになったのである（「岡山市教育会五十年略史」昭和十一年四ページ）。

第三は、教授法の研究に先鞭をつけた点に彼の功績を認めることができる。明治二十四年、地方の実状に即した学級編制の法改正がおこなわれた。すなわち、「学級編制等ニ関スル規則」によって、一年生から四年生までの全学年を一学級に編制する単級編制並びに、多級編制の学校が法的に成立したのである。しかし「多級編制の学校が発達をみるのは四十年代に入ってからであって、とくに三十年代までは単級編制の学校が優位を占め、小学校総数の二十五パーセント（最低明治三十九年度）ないし四十二パーセント（最高明治二十六年度）がこれにあたるという概況にあった」（宮田丈夫「学級経営」十八ページ）。

このような事態は岡山県においても例外ではなかった。「当時の小学校数は町村数を超過し、其の多くは単級教授法によっていた」（「岡山県教育史」下巻二九三ページ）ということで、単級担任教員の研修を師範学校並びに同附属小学校でおこなってきていた。

このため附属小学校では、明治二十四年の「学級編制等ニ関スル規則」の制定以後、単級教授の研究が進藤を中心にして行なわれはじめ、尋常科の単級が明治二十六年五月、附属小学校に研究学級としてはじめて設置されたのである。この単級の「教授法は全国的に謳われ、本県教育界の誇りであった。」（「岡山県教育史」下巻二九四ページ）ということである。

単級教授についての進藤の見解を知るための資料は現在持ちあわさないが、現在の複式教育とでも云うべき「組合教授」についての彼の考えは大要次のごときものであった。

「組合教授とは或学年と或学年とを合せ教授する場合を指せしものなり。組合教授は不完全なりと一言の下に排斥せざるべからず」（私立岡山市教育会編「進藤君演舌筆記」明治三十三年三十五ページ）として当時行なわれていた「組合教授」の長所を次のように指摘している。

1　「生徒は活動を要するものなり、而して組合教授は一方に教授をなし、一方にては自動をなさしむるを以て生徒の活動の上に於て利益あり。……教師が一方にて教授をなし居れば、一方の生徒は自動し居れり。然るに単独にては（一学年一学級の普通学校の意＝筆者注）教師が自動の場合にまで立入り易きを以て活動を妨ぐる事あり」（進藤「前掲書」三十六ページ）。

2　「組合教授は学力年齢の差ありて不可なりと云ふ人あるも、一教場に大小の生徒を入るれば兄弟姉妹の関係生じ来り、実際の訓練に便利なり。今これを例せんか、長者が挙手を示して幼者のこれを習ふが如き、上級の生徒が模範を示すを以て実際訓練の助けとなる故に単独教授より往々利益あり。それ斯くの如くこれを換言すれば、単独教授は比較的に閑散なるを以て、生徒の自動を妨ぐるの弊に流れ易く、組合教授は自然の結果として自動の利益あり。而して生徒の自動は教育上最も必要なれば、組合教授は忌むべきことにあらず」（「前掲書」三十六ページ）。

この「組合教授」論は基本的に「単級教授」論に通ずべきものである。彼の「児童の自発活動の重視」「長幼の児童の相互扶助」の考えはきわめて現代的である。彼はこの点について次のように述べている。「完全なる訓練は完全なる教授に優ると云ふことがある。大なる生徒と小なる生徒を一所に集むることが出来ねば学校の効用なしと云ふも過言にあらず。長者が幼者を扶翼するは学校の躾にてこれをなし得べし」（「前掲書」三十四～三十五ページ）と。

この、進藤の近代的な教授感覚と、彼の影響が、以後展開された岡山県下の教育研究や、実践の起点となったのである。進藤の教授法についての進歩的、先覚者的な見識の一面を「岡山人物誌」は次のように伝えている。すなわち「貞範嘗て、『教授法のもと』と云へるを作りしが、後欧西の教育説輸入せられ、盛んに教授訓練のことを説くものあるに及び、衆皆其先見に服したりと云ふ。」（「岡山人物誌」大正十四年）。

われわれは「教授訓練のもと」という冊子の内容を知るよすがはないが、以上に見てきた進藤の業績は、道なき荒野に道をつける開拓者精神によって生み出されたものといえよう。この進藤の活躍によってこそ、岡山県の初等教育の基礎がつくられ、正しい方向が示されたといっても過言ではあるまい。

二　幼児教育

1　岡山県の幼児教育の特性

岡山県下における幼稚園の普及は、全国的にみてきわめて上位にある。すなわち、幼稚園修了者の小学校新入生の中に占める比率（＝就園率）は、昭和四十一年度において、香川県の八三・一五％には遠く及ばないとしても、全国平均四四・二四％をはるかに越えて、六四・〇五％と香川、兵庫、徳島、大阪、静岡の府県に次いで全国第六位を占めている。

また、園数の方からみれば、全国第十位で決して多いとはいえない。しかし、幼稚園の設置主体をみれば、岡山県下の幼稚園総数二百八十六園の中、国立　一、公立　二五八、私立　二七と公

立園の占める割合が九〇％をこえるというきわめて高い状態にある。公立園を数の上からみれば、兵庫県の四〇一園に次いで全国第二位である。最近公立幼稚園が増えてきているとはいえ、全国的には公立幼稚園は全体の三五・八％弱にすぎない（数字はすべて昭和四十一年度分）。

したがって幼稚園といえば「私立」というのが全国的には普通の考え方であるが、岡山県では全く逆になっている。このことは全国的にも特異な現象として注目されてよい。この現象は、最近のことがらではなく、明治十年代の幼稚園設立の時点においてすでに方向づけられていたことがらであった。

2　幼児教育の先覚者たち

（1）　岡山師範学校附属幼稚園の設置と主任保姆、榎本常

岡山県の幼稚園は、明治十七年九月に設置された岡山県師範学校附属幼稚園をもって嚆矢とする。明治十六年において、全国の幼稚園数は十二園、十七年には十七園であったから、同附属幼稚園の設立はかなり早いものであったといえよう。

この附属幼稚園がこの時期に設立された理由は、明治十七年二月十五日の「学齢未満の幼児を、小学校で学齢児と同じ教育を受けさせることを禁止し、幼稚園の方法で保育すべし」とする文部省の通達に刺激されたものと考えてよかろう。

岡山県下の小学校就学率はすでに見たように、全国平均をかなり上まわっており、明治十五年の岡山県下の六歳未満の就学者は、それぞれ学校就学者の中で男子は四・六％、女子は五・七％をしめていた。岡山市の場合、六歳未満の就学者（男子一三七人、女子一一四人）は六歳就学者（男子三一〇人、女子二四六人）の約半数を占めていた（明治十五年）。ちなみに明治十六年における全国の学齢未満児の小学校入学者の比率は三・七％であった。このように、岡山市においては六歳未満児の小学校就学がかなりの数にのぼっており、幼稚園を可能にする地盤はすでに用意されていたといえよう。

この附属幼稚園に初代の保姆として招聘されたのが、明治十二年、東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）を明治十二年に卒業した榎本常であった。榎本は明治十二年から十七年までの間、和歌山県で女学校の教師をするかたわら、幼稚園の設置、経営にも従事していた。この経歴と手腕が買われたわけであるが、東京女子師範学校の数少ない卒業生の一人を岡山へ招いて、中央の幼稚園教育についての新しい考え方を直接導入しようとした招聘者の見識は高く評価されてよい。

榎本は儒学的な教養に支えられ、その識見、気力ともに人にすぐれており、附属幼稚園のみならず、岡山県下の幼稚園教育の基礎づくりと推進に大きな力となったのである。

榎本は、岡山師範附属幼稚園の教育の原型を直接、大阪の模範幼稚園と雲珠幼稚園に求めた。この二園は東京女子師範附属幼稚園を模範にしていたので、東京女子師範学校附属幼稚園でおこなわれたフレーベル式保育が、間接的に岡山師範附属幼稚園に導入されたことになる。榎本はこの点を次のように述べている。「開園当時の園児は七十五人内外でした。保育法はフレーベル式で、只

今から見ますと余程変化していますが、その根本精神は少しも変わっていません。」（榎本常談「岡山県教育史」中巻二九三ページ）

榎本のしごとは、幼稚園の教育の方法を樹立することと、保姆養成であった。岡山県下では、明治十九年頃から、井原、岡山、倉敷、高梁、足守などに幼稚園が相ついで設立され、幼稚園増設の気運が高まっていった。幼稚園の増設にともなって保姆の不足が痛感されはじめた。岡山師範学校ではこの要望に応えて、明治二十年から榎本を講師として幼児保育講習会を開いた。第一回の講習会は、明治二十年十月十三日に終了し、二十四名の受講終了者を出した。その人達の多くは、それぞれ県下の新設の幼稚園に赴任して、各園の基礎づくりに貢献したのである。

榎本は、明治二十一年九月、福岡県へ転勤したため、その在職期間は長くはなかったが県下の幼稚園界に及ぼした影響は大きかった。幼稚園の何ものたるかかいもく見当のつかなかった当時、その設置運営の範はこの附属幼稚園に求められたのが当然であろう。それだけに榎本の責任は重大であり、影響も大きかったわけである。

榎本が岡山を去った後も、弟子達は絶えず榎本と連絡をとり、公私にわたる指導を受け、年に何回か榎本を岡山に呼んで直接指導を受けたり、旧交を暖めたという。このエピソードが榎本の人柄と、幼稚園教育界に占めた位置を暗示しているように思われる。

（2）　各地区の幼稚園設立者

すでに述べたように、県下では幼稚園設立の基盤が醸成されつつあったとはいえ、幼児教育に深い関心を持つそれぞれの土地の有識者の熱意と努力なくしては、幼稚園の開設は不可能なことであった。

井原幼稚保育場の場合はこうである。この園の設立は、同村の小学校長であり、その郡の督業であった枝益六の努力によるものである。枝は、元福山藩士であったが、小学教師として井原に赴任し井原滞在二十年にも及んだ。その間、井原近辺の各地の小学校長を歴任した。彼は、生産教育、外国語教育の必要を説き、幼児教育の重要性をもはやくから認識し、世人を啓蒙した。彼の人格的感化は大きく、教育界のみならず、町村民に対する影響は甚大なるものがあった。

彼は、明治十七年、岡山に附属幼稚園設立の報を聞き、翌十八年、枝の夫人、朝を私費で同園に派遣し、幼児保育法を数か月にわたって研究させた。明治十九年一月、当時の小学校の一隅にあった元代官所の一室を保育室にあて、枝朝を主任保姆として、井原幼稚保育場を開設することになったのである。

枝の熱心な啓蒙にもかかわらず、幼児教育に対する世人の関心は必ずしも高まらなかった。時の郡長、堀口章介は、枝の熱心な要望を退けて、同園の開園式への出席を拒否したと伝えられている。しかし村長、関戸粛蔵は、枝の熱意に動かされて、保姆の給料を村予算に計上し、公立として開園することを認可した。そのため保育料は一人月額一銭という低廉さであった。

この園の園児数は一定しなかったが、十五、六名から二十名ぐらいであった。年齢は、学齢前、一年、二年、三年と雑多で、しかも、入退園は時をかまわずなされた。このことは世人の幼児教

育に対する認識の低さを示すものであると同時に、幼稚園経営の困難さを物語るものでもあった。

一方、岡山市においてはすでに述べた、岡山師範学校附属小学校訓導進藤貞範が幼児保育の必要を世人に説いて、自力で、入学前一か年の幼児を収容する幼稚園を設立した。これは師範学校附属幼稚園の設立に刺激されたものであろう。進藤のこの幼児教育のしごとは、漸次学区民の認めるところとなり、明治二十一年にはいって、学区内の有志十九名の共立という形に経営がきりかえられた。ここで注意すべきことは、この共立川東幼稚保育場は小学校の教場三つを借用して開かれたということである。

岡山県では、明治三十年以前に設立された幼稚園が、師範学校附属幼稚園以外に十一園ある。その中、個人や学区民の力で設立された、いわゆる「私立」幼稚園が七園ある。この七園はすべて小学校の教室を借用して誕生している。残り四園の内、三園は最初から町村立幼稚園として町村の財政補助をうけて誕生し、すべてが小学校の教室を借用して保育室にあてている。他の一園については不明である。設立当初、すでに「公立」小学校の一室を「私立」幼稚園に貸与しているということは、幼稚園教育に対する市町村の暗黙の援助であったと解すべきであろう。

この伝統はのちに倉橋惣三をして、岡山の幼稚園について次のような評価をさせる原因となるのである。「岡山の幼稚園は、市立小学校の全部に附設されてあって、而も小学校との連絡が遺憾なく整っている。斯んな都市は私の知る限りでは他にはありません。恐らく日本一でせう。それに総ての設備もよく整ひ、特に校舎の建築等は余程新しい試みになって居ります」（大正八年七月二十三日倉橋惣三談「岡山県教育史」下巻三六～三七ページ）。

（3）幼児教育の振興につくした国富友次郎

その後、岡山市内には五つの「私立」幼稚園が、各小学校の教室を借用して設立されていた。岡山市は明治二十四年四月、これらの園を「市立」幼稚園とした。ところがわずか三年にして、岡山市は「経費都合ニヨリ本年限リ廃止致度候条御認可相成度」旨を県知事に具申し、明治二十七年三月末をもって市立幼稚園の廃止にふみ切ったのである。廃止というのは市からの財政補助の打切りということであった。一園を除き他の四園は引きつづいて、有志の協議により「私立」経営として保育は今までどおり継続されていった。その間、「市立」移管のための陳情は市当局へ何回も行なわれた。この市民の熱意が実って、岡山市は明治二十八年四月、再びこれら四園を「市立」としたのである。

義務教育の小学校においてさえ整備途上にあった当時、義務化されていない幼稚園に、市が経費負担をしたことは敬意を表すべきことであろう。しかし、ともすれば市立幼稚園廃止が市当局の俎上に上されたこともやむをえないことであった。

明治三十年、岡山市深抵幼稚園の園舎移転問題にからんで、幼稚園廃止論が市議会議員の間に再度おこってきた。当時は岡山市の水道敷設が行なわれており、市費多端な折であった。当時の深抵幼稚園は深抵小学校長であった国富友次郎が園長の椅子についていた。国富は、幼稚園廃止論が市会議員の間に起こっている事態をうれえて、幼児教育の重要性を市民や有力者に認識させることに努力し、幼稚園存続の世論を導き、かつ市議会議員の家庭を順次訪問し、幼児教育の必要を説き、折衝を重ねて遂に幼稚園存続の了解をとりつけたのである。国富は当時のことを次のように回想している。

「何故に幼稚園を廃止するかというと、もとより経済論もあったが、其の主とするところは、幼稚園では字を教えず、算術も教えていないから幼稚園は必要ではないと主張する人もあったが、漸く色々の支障を排することが出来、幼稚園移転が市会の協賛を得て、素意の通り、三十一年頃と思うが、不完全なる園舎より、稍々教育的の新園舎に移転することができたことは忘るることのできぬ喜びであった。」（国富友次郎「回顧四十年」深抵幼稚園四十周年記念誌所載昭和十年）。

これを機にして、国富の幼児教育への貢献が始まったのである。国富は幼稚園の存廃が市町村の財政状態によって決められたり、文字や、算術を教えることを幼稚園に要望する世人の認識の浅さを改めるには、幼稚園の保育そのものの充実以外にはないと考えるようになった。彼は幼児教育充実の方途と、保姆に人を得ること、保姆の資質を向上することに求めたのである。

こうした考えから、国富は明治三十三年一月、吉備保育会を結成した。この会は保姆相互の研修と、幼児教育に対する一般世人の認識を高めることを目的としたのである。「吉備保育会の発会式は、岡山市環翠幼稚園（現旭東幼稚園）で挙行され、会員は教育者を中心に市民の有志で、大いに気勢を挙げた事は本市教育の一大躍進であって一生忘れる事のできない快事であった」と国富はしばしば側近にもらしていたという（「国富先生のおもかげ」昭和三十一年一〇三ページ）。

会長にはときの師範学校長岡田純夫をおき、若い彼は（当時三十歳、明治三年生まれ）副会長として会の実質的運営をおこなったのである。しかし、数か月をまたずして岡田は退任したので、国富が会長におされ、昭和十五年岡山市長になるまでの四十一年間、吉備保育会の会長を勤めた。

国富は明治三十四年、岡山市深抵小学校長の職を退き、翌三十五年岡山市会議員になった。以後昭和十五年岡山市長になるまで、市会議員、県会議員を歴任した。その間、前述の進藤貞範らといっしょに岡山実科女学校の創設に当たった。ついでその女学校長、岡山市教育会長、岡山県教育会長、岡山盲唖学校長などを兼務した。彼の活躍は、教育界に、政界に、また社会教化事業界にと実に多方面にわたっていた。しかも、それぞれの分野で大きな足跡を残したのである。

それらの中でも、彼にとって最も関心が深く、情熱を傾けたのが幼児教育の仕事であった。なかんずくそれは吉備保育会の育成であった。吉備保育会は全県下のみならず県外の保姆をも会員とするまでに発展し、大正十年には京都、大阪、神戸の三市で組織していた「三市連合保育会」の正式加盟団体となり、広い視野の下に岡山県下の保育界のレベルアップを企図したのである。国富は「三市連合保育会」の大会には、吉備保育会長として、万難を排して出席し、しばしばその会の議長をつとめたのである。

昭和六年には国富自ら主唱して「中国、四国、九州保育連盟」

を組織し、その会の総務として、連盟の運営に当たった。連盟の大会は、岡山（昭和六年）博多（同十一年）別府（同十二年）と相ついで開かれたが、別府の大会が最後で中断してしまった。

（4）幼児教育実践を高めた折井と岡

明治末期から大正にかけて岡山市の幼児教育を実践面でリードしたのは折井弥留枝であった。折井は、明治三十一年、東京女高師の保姆科を卒業し、和歌山市内の幼稚園に勤務していた。同四十二年三月、国富友次郎によって岡山市旭東幼稚園主任保姆として招かれた。折井は、四十四年市内四園の園長を、大正十一年には市内七園の園長を一人で兼務し、市内幼稚園の保育内容の向上と保姆の指導に当たったのである。

また岡政は、明治四十一年三月、東京女高師保姆科を卒業し、同年四月岡山女子師範附属幼稚園へ主任保姆として赴任した。岡は日本の新保育運動の理論的指導者である東京女高師教授倉橋惣三の理論を実践化することに精力を注いだ。すなわち「教師中心の保育から幼児中心の保育」への転向を企図したのである。岡はこの理論に基づいて、岡山県幼稚園指導員として、全県下の保育実践と保姆の指導に当たったのである。

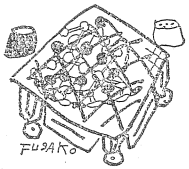
以上二人の実践と理論は、岡山県内のみならず「関西連合保育会」においても断えず注目され高く評価されたのである。

東京女高師教授倉橋惣三は少年時代を岡山で送り、岡山市内山下小学校において、国富友次郎と倉橋は師弟関係にあったのである。岡は東京女高師在学中、倉橋に知遇を得、以来師弟関係を保った人である。こうした関係で国富は、吉備保育会の総会などには講師として倉橋をしばしば岡山へ招いた。倉橋は、国富、岡という岡山県内の二人の指導者との特別な関係もあって、気軽に来岡し、岡山県下の保育には特別な関心をはらっていたようである。

岡山県下における今日の幼児教育の隆盛は、こうした人達によってその基礎がつくられたといわなければならない。

主な参考文献（本文中に注記したもの以外）
岡山県教育史（昭和三十六年）
岡山県保育史（昭和三十九年）
岡山大学附属幼稚園八十年のあゆみ（昭和三十九年）
岡山大学附属小学校九十年史（昭和四十一年）

（岡山大学教育学部講師）



第42回

人物を中心とした

広島県教育郷土史

吉久繁一

広島県教育の源流

藩主の学問奨励と庶民の教育要求

幕藩体制下において、広島県下では広島藩主浅野氏、福山藩主阿部氏の歴代藩主がともに好文で学問を奨励した。浅野氏は天明二年藩学問所（後の修道館）を広島に、阿部氏は天明六年誠之館を福山に開設し、それぞれ藩校として武士の子弟を教育し明治維新に及んだ。この両藩校は修道高校、誠之館高校として今に引き継がれている。

また郷学（藩主または藩臣の経営による地方民衆の教育機関）には三原浅野氏の朝陽館を初め、蒙養館、明善堂、講習所（いずれも広島藩）等があったが、教育の対象は後述する廉塾を除いてはほとんどが武士の子弟であった。かくして藩主や藩臣の好文も奨学も、体制維持のために武士の教育を目的としたもので、一般庶民にはほとんどかかわりあいはなかった。

しかしながら元禄以降町民階級の勃興と農村の商業化に伴なって、庶民の教育要求としての学問（読み・書き・そろばん）への要求が起ってきた。その施設としての寺子屋、私塾及び手習師匠は次第に全国に普及し、本県でも明治初年には寺子屋二五七、私塾六五の多きに及んだ。その教育の荷ない手はほとんどが名も無い武士、平民、僧侶、神官などであった。

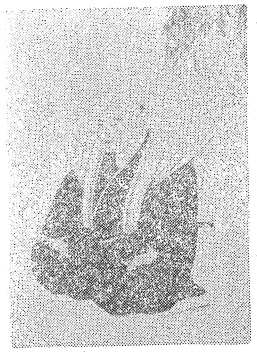
この寺子屋、私塾は自然発生的なものから次第に藩主の保護と干渉を受け、私的施設から公共的市民訓練的性格へ傾斜していった

が、これが本県でも近代の学校教育の有力な基盤となったことは重要な意義をもっている。

また注目すべき事例として、備後がすりの産地である備後下有地村（芦品郡芦田町）の寺子屋が、一八〇名に及ぶ生徒を収容する盛況を呈していたことは、産業の発達と教育の普及が深い関係をもつものとして興味深いものがある。

菅茶山と廉塾

菅茶山（一七四八～一八二七）は通称太仲と言い、備後神辺町の生まれで、父は酒造業と農業に従事していた。幼時より学問を好み、十八歳のとき京都に遊学して朱子学を学び、早くから儒者、詩人として盛名をはせ、関西の詩風そのために一変したほどであった。後郷里へ帰って家塾を開き、黄幸夕陽村塾と名づけたが、その後郷学に昇格して廉塾と称したほど非常に好評を博し、多くの門弟を教育した。その塾生の出身は四国九州はもとより、遠く奥州にまで及び、その階層は武士から庶民にいたり、地方文化向上に貢献したことも多大であった。頼山陽も一年余りここに身を寄せて講義したこともあった。



菅茶山

この廉塾の名は九州の広瀬淡窓の咸宜園と並んで天下に有名となったが、茶山は当時天下一の詩人と賞賛されながらも、誠実謙虚で少しもおごらず、特に村の子どもたちを愛し、四十年間子弟の教養に生涯を捧げ、文化十年八十二歳で死亡したが、その遺跡は国の特別史跡として保存されている。「黄幸夕陽舎詩」「筆のすさび」等の著作がある。

頼山陽

本県の生んだ代表的学者の頼山陽（一七八〇～一八三二）についてはかえって簡潔な記述にとどめるが、実名は襄（のぼる）、通称久太郎という。父春水は浅野藩の儒官、おじ杏坪また著名な学者であった。山陽は幼時から父や紫野栗山、尾藤二州などの大儒に学び、少年のころからすでに抜群の詩才を発揮した。彼は性奔放で家や藩の制約に耐えられず、脱藩を図ったが捕えられて一時幽閉された。のち茶山の神辺や大阪を経て京都に定住し、史論と詩文などの著作に専念するかたわら各地を遊歴して、天下の文人墨客と交遊して盛名をはせた。おもな著作には幕末の尊王論に大きな影響を与えた日本外史のほか、日本政記、日本楽府、山陽詩鈔などがあるが、また能筆をもって聞こえた。その子三樹三郎が幕末の勤王運動に身を投じて、安政の大獄に倒れたことも周知のことである。

窪田次郎と啓蒙所

大政奉還後明治政府は直ちに教育制度の大改革を検討し逐次施策

を講じたが、明治二年には「府県施設順序規則」において庶民教育のために小学校設置を奨励したので、各藩でもそれぞれ庶民教育機関の点検整備の気運が起きてきた。

この中にあって本県では福山藩の大参事岡田吉顕や同藩の五十川基によって小学校設置の構想が考えられていたが、財政的理由で実現にいたらなかった。

しかしながらこういう藩内の動向に注目して、卓抜なアイディアをもって小学校設置を進めたのが粟根村（深安郡加茂町粟根）の医師窪田次郎（一八三五～一九〇二）であった。彼は小学校建設には財政的基礎が第一であることに着目し、小学校設立母体として啓蒙社をまず作ることを考えた。啓蒙社とは一村あたり米五石を出し合った数か村が連合して、学校設立の基本となる団体である。この団体が啓蒙所という小学校を設立して、管内の七歳から十歳までの子どもを収容して教育を施そうとする計画であった。彼の構想は福山藩知事となった旧藩主阿部正桓に認められ、佐沢太郎、杉山新十郎及び窪田が中心となってこれを推進し、明治二年二月深津村（福山市）に最初の啓蒙所を設立した。さらに明治四年には「啓蒙社大意」などを出して宣伝啓蒙につとめ、寺子屋や私塾などの反対運動を克服して開設を進めた。かくして明治五年の学制頒布のときには、福山地方（当時小田県）では八三校、生徒数五〇九五人の多きに達したことは、新教育制度移行に役立った。彼の運動には全国から視察者が相ついだが、備中（岡山県）方面へも波及していった。明治六年八月文部大臣が福山へ視察に来たとき「啓蒙所には文部省も先手を打たれた感がする」と驚歎したほどであった。

窪田家は代々医者で庄屋をつとめていた。父亮貞は長崎でシーボルトについて西洋医学を学んだ新進の医師であった。次郎は父の業を継いだがやがて藩医となり、啓蒙社を推進して小学校設置の先駆者となった。さらに特記したいことは、二十年に及ぶ苦心の研究の結果、深安郡川南村片山（神辺町）の風土病の片山病（日本住血吸虫病）を発見したことである。彼はのち岡山市に転居し、六十八歳で死去した。

広島心学と中村道貫

石田梅巖を始祖とする心学が、いわゆる広島心学として広島を中心として非常に栄えたことは、本県の庶民教育の土壌をつちかう上に大きな影響があったことは見逃がせない。

すなわち文化、文政のころ矢口来広とその妻仲子は広島の土手町に敬信会を開き、奥田頼杖の歓心会とともに広島心学の基礎を確立した。この石学が神学・儒教及び仏教の三つを融合して平易な言語と身近なたとえで庶民の間にはいっていった力は大きいものがあったが、さらに来広の門下の中村道貫（一七九九～一七五六）が出るに及んで、広島心学は全国を風靡するにいたった。道貫は徳水と号し、広島藩士の二男として生まれたが中村家の養子となった。彼は江戸で道話を試みること三六五回に達し、非常に好評を博したあと広島に帰り、敬信会や歓心会の講席にも出席して教導につとめて人気を集めたほか、全国三百余村に出かけて教化のため生涯を捧げた。

草創期（明治五年～明治十九年）

明治五年八月学制頒布に伴ない、広島は第五大学区の本部となり、各中学区を配置、その下に小学校を配置することとなったが、その小学校は寺子屋や啓蒙所から移行したものが大部分で、財政的裏付の不十分と、再三にわたる行政区域の変更（明治九年ようやく現在の広島県の区域決定）による混乱もあって、学制の出発は容易ではなかった。

県の職制は当初庶務、聴訟、租税及び出納の四課に分かれ、学務関係は庶務課に属していたが、八年学務課が設置され、初代課長国枝文静が就任するに及んで教育制度も地に就き、白島学校や広島県師範学校出身の新進の教育者が新式の教育を進めるにいたった。

一方中等教育や師範教育も始まり、五年遵喬社、六年小田県教育研究所（福山の教員養成機関）、七年白島学校（広島県師範学校の前身）、十年広島中学校（現国泰寺高校）、十二年福山中学校（現福山誠之館高校）等が相ついで設立された。かくして明治十二年の教育令の制定を経て十九年の教育令公布まで、欧米心酔主義の退潮と相あまって、実用主義、主知主義的傾向から次第に国粋主義的教育が方向づけられていくことになった。

私立学校と師範学校の祖土井善右衛門

現在本県私学の振興充実は全国でも五指の中に数えられるが、その遠因は前項の本県教育の源流からもうかがわれるが、ここで付記したいことは藩学に対する家塾（私塾）の盛行である。古学派香川南浜の修業堂、同じく山口西里の柳花園、その子西園の敬業堂、陽明学者吉村秋陽の咬菜塾（いずれも広島藩）などは代表的なもので、朱子学によって独占されていた藩校に対して自由な学風を伝えたことは、藩学より私学、公立より私立への動きの底流となったことに注目したい。

さて広島藩校修道館は廃藩置県により学制頒布直前の明治四年十月閉鎖されたが、教育熱愛の人々によってこれを活用し、本県最初の私立の中等学校が設置された。その発起人が土井善右衛門で、篠村幾蔵等と相はかり、明治五年五月修道館跡（元西練兵場跡）に私立遵喬社を設立した。これは変則中学校として経営されたものであるが、本県で中等教育を施した最初の学校である。最初は英人シャイを招き青木良蔵らを助教として英語を教えたが、間もなく師範学科、国語科等をも置いて校運隆盛であった。さらに六年四月には小学師範科を付設したが、これは本県における小学校教員養成の最初である。この遵喬社は官立師範学校や官立外国語学校（いずれも明治十年閉校）の創設に伴ない閉鎖され、その小学師範科は七年七月東白島に創立された白島学校に移された。これは広島県師範学校の前身であり、翌年には付属小学校（現東雲小学校）も開設された。

土井善右衛門（一八一九～一八八五）は佐伯郡己斐村（広島市）の庄屋の生まれ、名は積善、百穀と号した。幼時から学を好みまた彫刻も巧みであったが、資財を投げ出して教育や救貧につぎこんだ

熱血漢である。明治十二年第一回広島県議員となり二期つとめるうち、自由民権運動にも参加し、十三年二月広島県有志国会開設請願建言書を元老院に提出した。彼は明治十八年に死んだが、己斐の旭山神社の入口には後述する山田養吉撰の土井百穀碑銘がその巧緻を後世に伝えている。

修道中学校創立者山田養吉

山田養吉（一八三七～一九〇一）は十竹と号し、藩儒坂井虎山らに師事して漢学を修めたが、年若くして頭角を現わし、慶応二年藩学問所の塾頭、賀茂郡志和村（志和町）の文武塾の教授などを歴任して漢学を教えるほか学校経営にも手腕を発揮したが、修道館廃止に伴ないのち海軍兵学校に転じた。

明治十一年旧藩主浅野長勲が広島浅野学校を設立したが、十四年これを修道学校と改称し山田を招いて校長に起用した。十九年浅野家が学校経営を廃止するや、山田はこれを継承して校主兼校長として鋭意再建につとめた。当時の教員数は三、四名、生徒は百名内外であった。その後公立学校の整備に伴ない私学の経営困難となり、彼は万難を排して学校経営に努力中三十四年八月死亡したが、その素志はやがて結実して修道中学校となり、今日の修道学園へと発展した。

整備期（明治十九年～明治末まで）

明治十八年初めて伊藤内閣が成立するや、初代文相森有礼は教育制度の整備に最も意を注ぎ、十九年に従来の教育令を廃し、小学校令、中学校令、師範学校令等を相ついで公布して教育の国家統制を企図したが、その後帝国憲法や教育勅語の発布、日清、日露の両役を経て明治末年にいたるまで、富国強兵をめざす国家主義的教育の色彩を深めていった。

この間にあって本県では十九年私立英和女学校（広島女学院の前身）、二十年広島高等女学校（後の山中高等女学校）と全国でも稀な私立学校の発足をみたが、公立の中等学校も二十一年の公立尾道商業学校（尾道商業高等学校の前身）設立後、三十年代に入るや職工学校（後の広島工業学校）、広島第三尋常中学校（現三次高等学校）及び豊田尋常中学校（現忠海高等学校）等が続々と新設された。その上三十五年には広島高等師範学校が広島に創立され、西の教育の本山として発足した。

明治三十年代は日清、日露の両役の戦勝による刺激により、初等教育も画期的に整備された時代であった。政府は明治三十年各府県に地方視学を、三十二年視学官及び視学を置くことを定めたが、本県においては三十三年初代視学官伊藤則久、初代視学杉本重雄、富樫東十郎（竹本と富樫は三十年の地方視学就任に引き続く）が就任するに及んで、教育諸法規を整備するかたわら、すでに置かれていた郡視学とに学事視察や教職員指導を強めた。

特に三十八年文部学監白坂栄彦が第二部長として就任するや、視学官三沢寛一、視学後藤居三郎らと共に鋭意教育の刷新に努力した。すなわち三十八年七月時の知事山田春三名で出した「普通教育施設要項」は、就学督促、出席督励、精神教育、体育奨励、教員心得、社会教育、実用教育」の七項目をあげ、その実行を期したもので、当時の郡視学奥久登（現存）や福島松太郎らは大いにこれを推進した。

広島女学院初代校長ゲーンズ

明治二十年秋たけなわの日没ごろ、多数の少女に迎えられて宇品港に上陸した若いアメリカ婦人がいた。彼女こそ広島女学院初代校長として四十五年の長い間同校発展の基礎を確立したN・ゲーンズ（一八四八～一九一八）である。広島女学院の起源はその前の十九年、砂本貞吉、宣教師ランバス父子及び杉江タツの協力により女子三塾を合体して私立広島英和学校と名づけ、広島における女子教育の第一歩をふみ出したのである。

N・ゲーンズ

ゲーンズは安芸門徒の中心広島であらゆる困難に耐え、常に宣教師としての至誠と至愛、情熱と英知をもって献身的に女子教育に一生を捧げた。二十五年、当時の日本には珍しい幼稚園を早くも開設、翌年には附属小学校をも設置したのを初め、逐次学園の整備充実に努めたが、この間にあって彼女を助けた妹のR・ゲーンズの涙ぐましい愛情と功績も忘れることはできない。

広島県教育会の発足

文部大臣森有礼の教育振興によって、明治二十年ごろから各府県に教育会が誕生していったが、本県でも二十年七月広島県私立教育会という名称のもとに「県下教育の改良上進を翼賛する」ことを目的として設立された。発起者は当時の小学校長土肥健之助、杉本重雄、岡田定、西川国臣、高島平三郎、三上真一らであったが、爾来各郡市にも教育会が作られて全県組織ができた。この教育会は大正六年広島県教育会と改称されたが、その本県教育に尽くした功績は偉大なもので、調査研究活動（芸備教育の刊行を含む）、長期講習会（尋常小学校教員養成）講演会、体育会、武道大会、図書館経営、教育表彰及び社会教育にも力を注ぐなど終戦まで多彩な活動を展開した。

山中高等女子学校主山中政雄

教育者ならぬ教育熱愛家山中政雄は、佐伯郡五日市町出身で広島で弁護士を開業し、県会議員でもあったが、前述のキリスト教主義の英和女学校に対抗し、日本婦人固有の美徳涵養を目的として、私

財を投じて明治二十年広島に広島高等女学校を新設した。同校は後に校主の名を冠して山中高等女学校と改めたが、全国でも屈指の女学校として実績をあげた。殊に小学校女子教員養成の一翼を荷なったことも忘れることができない。山中は大正八年七十一歳で死去したが、その後は妻トシが夫の遺志をついで学校経営に努力し、特に昭和二十年、終戦前に広島女子高等師範学校が開設されるに当たり、その学校の敷地、校舎等一切を国に寄附した献身的教育愛は、終戦後の学制改革の陰にかくれて埋もれさせてはなるまい。

日本青年団の父山本滝之助

幕藩時代から全国各地に作られていた若者組、若組中などの青年の集まりを組織化し、旧習打破と学習活動を志向して脱皮する気運が明治二十年代に起こってきたが、この青年団運動の先駆者であり、また組織者となったのは沼隈郡千歳村草深（沼隈町）生まれの青年教師山本滝之助（一八七三～一九三一）である。

彼は小学校を出ただけで訓導や校長を歴任した逸材であったが、村童教育のかたわら明治二十三年十八歳のころからすでに村の青年団を組織し「田舎青年」の著述や新聞「太陽」における文筆活動によって、全国の青年団運動のリーダーとなり、遂に三十二年二十七歳のとき日本新聞社後援会のもとに日本青年団を組織した。彼の「一日一善」「早起」「摸範日」などの実践活動は全国に波及していったが、この青年団は日清、日露の両役における銃後活動を認められ、文部、内務両相の指導によって大正十五年大日本青年連合会にまで発展した。その間彼は著述のかたわら全国各地を巡回して中堅青年の指導に尽力したが、昭和六年五十九歳で死去した。その直後に「山本滝之助全集」が刊行されたが、第三子山本高三が「青年の父山本滝之助」を、山本滝之助先生頌徳会が「山本滝之助先生言行録」を出した。

広島一中校長弘瀬時治

三十九年五月広島県師範学校長から広島一中校長として転任して以来、実に十九年の長い間学校の経営に恵念し、同校の名声を県内外にとどろかせた功績はきわめて大きい。

高知県出身の弘瀬は何物にも屈しない風貌の五尺近い偉丈夫で、全国中学校長会長をも勤めた傑物、明治・大正切っての大物校長である。その熱烈な教育精神は一中魂を不動のものとし、多数の生徒に多大の感銘を与え、各方面に傑出した人材を送り出した。生徒たちは彼の教訓によって実によく勉強したが、また校友会活動も活発であった。「鯉城の夕」の歌は生徒の志気高揚に大いに力となったが、特に大正十一年の織田幹雄時代の陸上部の活躍は天下にとどろいた。

弘瀬時治

なお弘瀬が三十五年から四年間広島県師範学校長として在職中は、広島県教育

会長としても大いに実績をあげ、教育会発展の基礎を確立した。晩年は東京で自適したが、昭和二十九年八十八歳で死去した。

発展期（大正元年より終戦まで）

第一次世界大戦前後の内外情勢の危機に対処して、中央では大正二年教育調査会の設置以来鋭意教育制度改正の検討が加えられ、遂次施策に移されて教育界は画期的発展を遂げた。本県においても広島高等工業学校（大正九年）、広島高等学校（大正十二年）、広島女子専門学校（昭和三年）、広島文理科大学（昭和四年）などの大学高専が相ついで設立された。また大戦後の中学教育就学熱の増大に伴って公立中学校が続々新設され、また師範学校（大正十一年福山師範）も増設された。

一方戦後のデモクラシーの風潮が活発となり、大正六年沢柳政太郎の成城小学校創設を契機として、特に初等教育界において新教育の研究や実践が非常に盛んになった。本県でも各師範学校や付属小・中学校、尾道市簡場小学校、賀茂郡西条小学校、芦品郡古府小学校等で新教育の研究が活発となり、はなやかな研究発表や公開授業が開催された。

かくして大正時代は教育界における統制と自由の時代ともいえるが、昭和に入り、八年の満洲事変後急速に臨戦体制が整えられ、教育もまた国家統制のものと日本精神高揚が強調せられ、太平洋戦争勃発に伴い、教育の戦力化へ突入していったことはまだ記憶に新しいことである。

崇徳中学校初代校長観山覚道

明治十年真宗安芸門徒の仏恩報謝の念願を結集して創立された進徳教社以来九十五年の伝統をほこる現在の崇徳学園は、その間再三の校名変更後大正二年三月崇徳中学校と改称して普通中学校として再出発したが、その初代校長が観山覚道（一八八二～）である。

観山は明治十五年賀茂郡福富町竹仁の生まれ。彼が初代崇徳中学校長として迎えられたのは年齢僅かに二十九歳、東京帝国大学卒業の後、呉市における教育経験数年後のことであった。従来の方針を改めて、広く門戸を安芸門徒以外にも開放した当初の学校経営の苦心は想像に余るものがあり、当時の教師は五人、生徒は僅か五十二人であった。翌大正三年、東大時代の同期生竹野恵真（観山の退職後第二代校長となった傑物で、昭和三十三年死亡）を教頭とし、昭和十六年まで実に二十八年の長きにわたって同校の経営に没頭し、多数の人材を各界に送り、県下はもとより近県屈指の私立学校へ発展させた。（今なお健勝で、郷里で自適）

創造教育の千葉命吉

大正中期の新教育運動の一方の雄千葉命吉（一八八七～一九五九）は秋田県湯沢市の生まれ。奈良女高師付小訓導から大正八年広島県師範学校付属小学校主事となり、十年八月東京高師講堂で開催された「八大教育思潮」講演会において「一切衝動皆満足論」という創造教育を強調して天下の耳目を驚かせた。この一切衝動（悉皆満足論は「イッサイショウドウシッカイマンゾク」とお経のように伝えられ、「好きなことは何でもせよ」と誤解されがちであったが、彼の本旨は「一つの行為に対してさまざまな欲求衝動が起きるが、そのいずれの欲求をも満足させるように行動する」ことであり、彼の別の主張である知行合一と同じである。つまり「よく考えて行動する」ことである。大正九年の「創造教育、独創教育養成の実際」と題する誓書の中に「どれでもよい　好きなことをやれ　やったら　真剣に徹底的に　全我が感激する満足をやるんだ　一切を満足さすところに　独創―最高玉上の値がある」と詩形で述べているが、これが彼の真意であった。当時彼の教えを受けた藤野教諭（現比治山女子高校教諭）は「主事先生は、『我意の生ずるところ、ただ果敢に猛進せよ』などとは教えられなかった。『自分のことは自分で責任をもて』と言われたようだ」と回顧談に述べている。（広島大学教育学部付属東雲小学校創立九十周年記念誌）

しかし彼の真意は容易に受け入れられず、かえって師範の寄宿舎の紛争事件や付小の火災も彼の説が原因との流説が伝わり、遂に在職二年で辞任した。後ドイツに留学、帰朝後立正大学などの講師をしたが、昭和三十四年死去した。しかしながら彼の創造教育論は次に述べる檜高憲三によって花やかに実を結んだ。

西条教育の檜高憲三

千葉命吉の広島県師範付属小学校在職中、最年少の部下訓導であった檜高憲三は千葉の提唱に共鳴し、若い情熱と英知をもって郷土

檜高憲三

賀茂郡西条町で実践に成功した。彼は大正十年僅か二十六歳で西条小学校長に抜擢された。

「西条教育は独創をもって根本原理とする。真に西条町に即する教育とは西条町を救う教育であり、西条町を救う教育とは西条町の向上発展をこい願い、地方文化の伸展を企図する教育であり（中略）この独創こそ本来具有する至宝であることに着眼し、かかる西条町民性大革新の念と併せて日本人の真の独創性を涵養助長し、もって世界的日本文化の創造を来たし、その永続的発展を培養すると共に、世界文化の伸展に積極的貢献をなさしめんとする念願より、まじめではたらきあるえらい日本人、何事も自ら進んで正しく、強く、優しい日本人」（西条小学校々訓より）の養成をめざした。

西条教育は独創主義の立場から、指導を教式としないで相談をもって第一原理とした。彼は指導・模倣・放任を排して児童の相談の意義を強調した。「問題を持たせ、相談する」といった教式の具体化のための施設としては児童会議、学級活動・学級予定板・ポスター掲示・部落会議・私の予定帖・自己反省録等用意周到な施設・計画及び行事が施設され、着々として成果を収めた。その研究会は昭和三年第一回公開以来逐年参加人員と範囲を拡大し、日本中に名声を

博するにいたった。

終戦後、翼賛壮年団長のゆえをもって一年追放の身となったが、県会議員を一期つとめた後、県の視聴覚教育に余生を捧げ、昭和四十一年七十一歳で死去した。

鈴木三重吉の童話運動と葛原しげるの童謡運動

画期的児童雑誌「赤い鳥」を発刊した文芸作家鈴木三重吉（一八八二～一九三六）が、童話運動に貢献した功績は輝かしい。三重吉は広島市の生まれ、東大卒業後夏目漱石に師事したが、在学中処女作「千鳥」を書いて早くも文壇に認められ、その後「小鳥の巣」「桑の実」など抒情的・主観的傾向の作品を発表したが、後児童作家として活躍し、大正七年三十五歳のとき遂に「赤い鳥」を創刊して世人の驚異の的となったが、万難を排して雑誌の刊行を続け、昭和十一年五十四歳で永眠した。

日本教育史上不朽の名を残した童謡運動家葛原しげる（一八八六～一九六一）は深安郡神辺町の生まれ、東京高師卒業後精華高女、跡見高女等の私学のみに四十年間奉職したが、その生涯を子どを友として生き抜いた童謡詩人であった。彼の代表作「ニコニコピンピン……」は彼の標語である。この歌を口ずさむと全国の子どもは思わずにこにこ笑い、ピンピンはねかえる……。子どもの健康、明朗を旗じるしとして活躍した彼は、終戦後芦品郡新市町の至誠女子高校の校長として学校経営に努力したが、三十六年母校大塚台上で急死した。年七十五。

鈴木三重吉

その他県教育推進に尽くした人

三沢貫吾　明治二十一年安佐郡安佐町の生まれで昭和二年広島高等師範学校徳育専攻科卒。温情と厳格の両面を相備え真摯（し）な教育者。玖村敏雄の後を受けて昭和十二年母校広島県師範学校専攻科の主任教授となったが、教授科目の倫理学や教育学が生徒に与えた影響は深い。戦後教育行政に転じ新教育の推進に努めたが、昭和三十二年七月、県教育次長退職直後長逝したのは惜しい。年五十八歳。その徳を慕う子弟が遺徳顕彰事業として、教育・哲学・倫理関係の図書を購入し、これを三沢文庫として県立図書館の管理運営に委せたが、この小稿もその資料に負うところが大きい。

土居愈吉　明治三十一年広島県師範学校卒。僅か二十二歳で広島市の大河小学校長として校舎建設に努力、のち広島県師範学校訓導を経て小学校長として名声を馳せたが大正十年公教育から身を引き、広島市の私立光道小学校の再建に献身的努力を傾けた。同校は自由教育・宗教教育・男女共学を旗じるしとして栄えたが、原爆のため惜しくも廃校となった。

浜田惣右衛門　明治三十二年広島県師範学校卒。浜惣の略称で通った大物校長。広島市竹屋小学校長を戦後に退職したが、当時は「竹屋の浜田か、浜田の竹屋か」と言われほどの傑物である。

幸野吉人　明治四十四年広島県師範学校卒。温厚篤実な教育者で、殊に三原女子師範主席訓導として功績をあげた。戦後は県教育委員にもなった。

片山昇　大正十一年福山市に新設された福山師範学校の初代校長、殊に明朗な新しいタイプの教員養成に意を用いた。

今堀友市　今堀友市ことし九十二歳で死去した今堀は明治三十九年東京高等師範学校卒。千葉師範、大阪女子師範の校長を経て、初代広島市立高等女学校長として功績をあげ、その後私学経営に尽くした。「校長の記録」などの著がある。

広島高師、文理大学及び高師付属小、中関係者

広島高師及び文理大

広島高等師範学校では初代校長北条時敬に続いて幣原坦、吉田賢竜などの名校長のもと著名な教授が輩出した。昭和四年広島文理科大学が創立され、広島は西の教育の本山としてさらに地歩を固めたが、ここでは長田新一人を代表として登場させる。

長田新（一八八七～一九六一）は長野県の生まれ、広島高師、京都大学卒業後沢柳政太郎に師事し新教育の思想的展開に努め、特にペスタロッチ研究の権威者となった。大正八年以来広島高師及び文理大に在職し、新風を巻き起こしたが、昭和二十年文理科大学長となり、引き続き初代広島大学々長となったが、その平和運動は世人の記憶に新しいものがある。三十六年急逝したが、主著に「ペスタロッチ全集」「ペスタロッチ伝」「原爆の子」等がある。

広島高師付属中学校の人々

明治二十八年に創設された付属中学校の堅実な学風は、実習学校・模範学校・研究学校として広く西日本の中等教育に寄与し、数学津山三郎主事、理科の河野通匡、図工の石谷辰次郎を初め、多くの教諭を出したが、そのうち初代主事長谷川乙彦だけをあげよう。

長谷川乙彦は付属小学校主事佐藤熊次郎と同じく、奇しくも明治三十四年東京高師教育学部卒、初代付属中学校主事として実に十七年十か月に及ぶ長い間、同校創立の基礎を固めるとともにその発展に貢献した。大正十四年、東京高師教授兼青山師範学校長に転じた。

広島高師付属小学校の人々

東京高師付小の「教育研究」に比べて、広島高師付小の機関誌「学校教育」は、地味で堅実であったがこの付小の基礎を固めた人は二代め主事佐藤熊次郎（一八七三～一九四八）である。佐藤は宮城県生まれで、東京高師は付中の長谷川と同期同学部。長野師範の付小から明治四十四年広島に招かれ、在職実に十九年間、当時創立後日なお浅かった付属小学校の校風樹立に貢献したが、また教育学者としても多数の著書があり、昭和二十三年没した。

なおこの外、理科教育の中田栄太郎・関原吉雄、作文教育の友納友次郎・田上新吉、音楽教育の山本寿、算数教育の山本孫一、修身教育の三浦喜雄、国史教育の中山栄作・大久保馨、読方教育の佐藤徳市などが代表的な名訓導であった。

（元広島県教育研究所所長）

人物を中心とした

山口県教育郷土史(1)

田村哲夫

県花‥‥なつみかん

山口県の明治維新前後の思想的背景を、藩政時代はもちろんのこと、中世大内氏の禅学・儒学にまで求め、現代の山口県教育の淵源を明らかにしておくことはたいせつな問題である。そこでおよそ維新前（その一）と維新後（その二）に大別して、山口県教育界の発展に影響を与えた人びとを、次の五項目に分けて紹介することとした。

(一) 中世の儒学者　(二) 藩政時代の教育者
(三) 近代教育の先駆者　(四) 教育実践者
(五) 本県出身の学者

(一) 中世の儒学者

山口県儒学の源流は、鎌倉末期から南北朝期にかけての、大内氏とその一族の禅宗帰依に見いだすことができる。

その内、まず臨済禅については、古くは大内氏親族の右田弘俊は帰化僧一山一寧国師の弟子となり、その子重俊は夢窓疎石国師の弟子となっている。また、本家の大内重弘は吉敷郡御堀に乗福寺を創建し、夢窓国師が揮毫した国初禅林の扁額を掲げ、帰化僧規庵祖円（南院国師）を招請開山とし、その高足鏡空浄心が事実上の開山となった。延元二年には日本の儒僧中で最もすぐれるといわれた虎関師錬が、乗福寺鏡空和尚のため洪鐘の銘文を作っている。鏡空のあとは法弟の蒙山智明の弟子東山崇忍が寺を董した。なお、蒙山は建武年間に周防の安禅寺住持を勤め、また乗福寺住持に寰中枢がいたが、ともに五山の碩学であった。

一方、大内重弘の子弘幸も延慶二年岩国横山に永興寺を創建し、高峯顕日（仏国国師）を開山に、夢窓国師を二世に推戴し、その弟子が寺を董した。その後荒廃したため、弘幸の子弘世は貞治六年に夢窓の高足春屋妙葩（普明国師）の道望をしたい殿堂を再建して、春屋を中興の祖に推戴し、その弟子を請じて住持とした。特に春屋の弟子玉林昌旒は永興寺十三世をつぎ、多くの末寺を興して岩国地方の教学を盛んならしめ、山口地方と共に山口県儒学（特に朱子学）の唱道に尽くした功績は大きかった。

また、元応二年玖珂郡伊陸に創建された高山寺は、建長寺無隠円範の高足棊山賢仙を初住とし、伊陸に道場を建てて教化に専念し、のち周防安国寺に指定された。文和元年八十六歳で高山寺に示寂した。この棊山の弟子大円智碩は周防の人で、師の歿後永徳年中に在住して高山寺を再建し、その後応永初年に山口の正法寺を開いて山口に示寂した。

大内弘世の子義弘は、在世中に山口に香積寺を創建し、帰依していた石屏子介を招聘して開山とした。石屏は入元僧で名声が非常に高く、あるいは周防の人ではなかったかといわれている。康暦二年山口を離れて天竜寺住持となったが、翌永徳元年示寂した。

岐陽方秀は嘉慶二年に山口の長寿寺住持となったが、翌康応元年東福寺に帰った。応永三十一年六十二歳で示寂した。岐陽は朱子学者として有名で、山口出身の桂庵玄樹（後述）も岐陽の高弟に学んだことがあった。

梵顒竈鏹は大内弘幸の二男師弘の子で、無伝正燈を師とした。ついで山口に帰って保寿寺を創建して山口人の教化につとめ、某年同地で示寂した。

以参周省は石見益田氏の庶族の出で、山口保寿寺に入り梵顒の教えを受けた。ついで東福寺に入ったが、師の示寂によって山口に帰り保寿寺住持をついだ。大内政弘は深く以参に帰依して国務にまで参画させた。享禄五年高齢にて示寂した。

梵良彦明は大内政弘の子で義興の庶弟であった。山口保寿寺に入り以参の教えを受け、師の示寂のあと保寿寺を董した。寂年不明。

さらに目を長門国に転ずれば、厚狭郡棚井の東隆寺は長門守護厚東武実が暦応二年に創建したもので、南禅寺約翁徳倹の弟子南嶺子越が入元のため厚東を過ぎる時、武実の懇請によって留まり開山となった。以後厚東領内の教化はすすみ末寺二十余寺に及び、長門安国寺に指定された。貞治二年示寂。出世弟子中には長門の人仲芳円伊があり、建仁・南禅の二寺を董し儒僧として名高かった。応永二十年寂。年六十。

赤間関（下関）の永福寺は嘉暦年中の創建と伝えられ、東福寺

桂庵玄樹

の入元僧平田慈均を開山とし、その弟子が寺を董した。

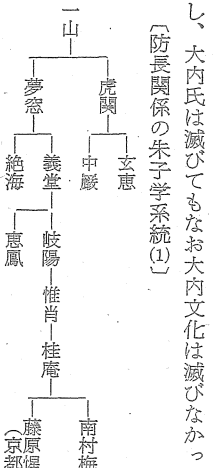
桂庵玄樹は周防山口の人で、南禅寺の惟肖得巌に師事し、業なって永福寺に住した。寛正五年遣明副使に撰ばれて正使天与正啓らと山口に入り、保寿寺の以参周省（前述）らと深交があった。応仁元年山口におった雪舟等揚らと入明して朱子の学を受け、文明五年帰朝して西国諸州を巡歴し、同九年薩摩に入って島津忠昌の家中に朱子新註を講じ、日本の朱子学研究に新風を吹き込んだ。永正五年八十二歳で薩摩に示寂した。

つぎに、長府の長福寺は嘉暦二年の創建と伝えられ、東福寺癡兀大慧の弟子虚庵玄寂を勧請開山とし、同門の傑山寂雄が二世となった。延元元年に足利高氏が西奔したとき、虚庵の道風をしたって小月村の一部を長福寺に施入し、厚東武実もまた重ねて荘園を寄付したと伝えられている。厚東氏没落の後は大内弘世の文化圏内に入ったことは東隆寺らと同様であった。

以上のように、南北朝期における山口県内の禅学、特に臨済禅は五山の学僧の地方教化にまつところが多く、また、周防からは石屏子介と大円智碩、長門からは仲芳円伊がほとんど時を同じうして出で、ついで桂庵玄樹が山口からでて朱子学を興隆したのも偶然とは思えない。

南村梅軒は周防山口の人で、学を桂庵玄樹に受け、朱子学を奉じて大内義隆に仕えた。義隆が朝鮮に朱子新註の五経を求めたのも、梅軒の勧めによるものと思われる。やがて梅軒は土佐弘岡城主吉良宣経に招聘されて、天文十年ごろに山口を去って南学の祖となった。桂庵といい梅軒といい、その朱子学の思想が近世日本の学界を風靡した先覚者であったことは、大内氏の経学に起因し、大内氏は滅びてもなお大内文化は滅びなかったといえよう。

〔防長関係の朱子学系統(1)〕



一方、臨済禅に対する山口県内の曹洞禅の禅学は、南北朝末期から盛んとなり、遂には大内氏時代を通じて臨済宗より曹洞宗寺院の方が勢力をもつようになった。

加賀大乗寺の徹山旨廓の弟子慶屋定紹が、周防山口に巡錫して鯖山に禅昌寺を開いた時、大内義弘は慶屋の徳をしたい荘園を寄付しようとしたが、慶屋はこれをことわったかわりに、春秋二季に防長両国内を行乞して、あまねく人民をたすけんことを願っ

石屋真梁

た。義弘はますます信服しその求めにしたがって以来、雲水は七千人に及ぶ盛況さで、慶屋の道風のほどがしのばれる。応永十二年六十七歳で示寂。その嗣法に五哲・三良があり輪番で寺務をとった。

石屋真梁は薩摩福昌寺開山で、義弘の弟盛見が、応永十一年ごろ吉敷郡小鯖に關雲寺を創建した時、石屋を勧請開山とし、その弟子定庵殊禅（後述）が住職した。在山五年で寺院が焼失したため長門船木瑞松庵に転じ空席となった。ついで同門の覚隠永本が応永三十年に師の遺命によって關雲寺に来住した。享徳二年七十四歳で示寂し、嗣法の高足十人を覚隠十哲と呼び、關雲寺に輪番し、また諸国に出て数十箇寺の開山となって宗風を振張し覚隠派と呼ばれた。

また、石屋真梁の弟子智翁永宗は日向の人で、大内氏の親族鷲頭弘忠の招聘によって長門湯本に大寧寺を創建した。在山四年で後事を法兄竹居正猷（後述）に托して応永三十三年六十五歳で示寂した。竹居はすなわち法弟の船木瑞松庵住職定庵殊禅に後住せしめた。この定庵は關雲寺を去って応永二十四年（あるいは十八年）に瑞松庵を創建し、同三十三年大寧寺に転じたが、永享四年六十歳で示寂した。

竹居正猷も薩摩の人で、石屋真梁第一の弟子であった。真林・福昌・永沢・竜泉・総持の各寺院を歴住し、永享四年法弟定庵のあとをついで大寧寺に住した。在山十六年の文安五年に檀越鷲頭弘忠が大内教弘に滅ぼされたため、いったん寺を去ったが、教弘の懇請によって再び住山した。このころ足利学校・金沢文庫の再興者として知られた上杉憲実が、西国に行脚して山口に来た時、教弘は大いに喜んでその養子となって父事した。また、大寧寺に竹居を訪ね、文正元年病死するまで寺内の槎留軒に隠棲した。竹居はこれより以前の寛正二年八十二歳で示寂した。

器之為璠は大隅国の人で、大寧寺に来て竹居の弟子となり、ついで周防長穂竜文寺主であった法弟在山曇璠のあとをついだが、寛正二年師の竹居示寂のため大寧寺に帰り寺を董した。同四年丹後の永沢寺に転じ、翌年再び竜文寺に帰った。応仁二年六十五歳で示寂した。在山曇璠も竹居の弟子で、永享元年大内氏家老陶盛政が周防長穂竜文寺を創建するに際し招かれて同寺に住した。某年示寂し、法兄器之為璠があとをついだ。大庵須益は薩摩の人で、竹居正猷にしたがって大寧寺に来り、ついで竹居の命によって竜文寺器之為璠の弟子となり、宝徳元年入室、寛正四年器之についで大寧寺に住し、応仁二年また竜文寺に退居したが、のち大寧寺に還って文明五年六十八歳で示寂した。金厳東純は羽州の人で、初め器之為璠と永沢寺に会い、のち大寧寺に来り大庵須益の弟子となった。応仁二年入室、文明三年大寧寺を董し、同九年総持寺に住したが、まもなく再び大寧寺にかえった。明応元年に至り陶弘房の菩提寺である吉敷郡仁保の瑠璃光寺に招かれて住山し、師の大庵を尊んで開山の祖となし、自からは二世となった。

以上によって知られることは、山口県の曹洞宗は周防鯖山弾昌寺の明峯派と、長門阿武郡北部における石見津和野永明寺末に属する数箇寺を除けば、ほとんど義山派の石屋系によって統一せられていた。特に石屋系の大寧寺と竜文寺及び瑠璃光寺を中国曹洞宗三箇寺と称し、近世に至っても多数の末寺を擁してその隆盛を誇っていた。また、石屋系のうち關雲寺の覚隠派は、中世には山

口を中心に大内氏歴代の庇護を受け頗る隆盛を極めたが、近世に入り前者ほど振わなかった。

(二) 藩政時代の教育者

大内氏滅亡後に山口県域を領有した毛利氏は、慶長五年の関が原役に敗戦してから長門国、周防国二箇国を知行し、宗藩の毛利本家は萩に入り、末家は長府・清末・徳山・岩国にそれぞれ分封された。また、寛永二年には宗藩領域内に毛利一門と家老及び寄組士らの給領地を配置し、宗藩の直轄地を分轄して代官を置き宰判と称して藩政を行なった。

教育面においては、宗藩と支藩の藩校教育や、一門家老寄組士らの郷校教育および私塾教育などが、多くの漢学者、国学者らによって行なわれ、その地方地方における特色を発揮していた。

(1) 宗藩と明倫館学頭

二代藩主毛利綱広は佐々木綿往を儒員に列した。これは藩として儒者を任用した初見であるが、儒における系統はつまびらかでない。しかし画家としても有名で、かつて荻生徂徠が激賞していることから、徂徠派ではなかったろうか。享保十九年八十六歳で病死した。

山田原欽は防府の人で、京都の伊藤坦庵に学び、藩主綱広・吉就二代に仕えて侍講を勤めたが、元禄六年江戸邸で自殺した。年二十八。

小倉尚斎は藩医宗爾の子で、初め句読を山田原欽に習い、のち伊藤坦庵の門に入った。ついで江戸に行き林鵞宇に学んだが、享保四年藩主毛利吉元が萩に明倫館を創立した時、召還されて初代の明倫館祭酒（学頭）となった。在職十九年で元文二年病死した。年六十一。

〔防長関係の朱子学系統(2)〕

桂庵玄樹―藤原惺窩―
- 那波活所―伊藤坦庵―
  - 山田原欽……
  - 小倉尚斎……
- 林羅山―林鵞峰―林鵞宇
- 松永尺五―宇都宮遯庵―宇都宮圭斎……

山県周南は佐波郡右田の儒者山県良斎（後述）の子で、宝永三年江戸の荻生徂徠の門に入り三年後に萩に帰った。享保二年に藩主毛利吉元の侍講となって萩明倫館の創立に尽力し、同四年に和漢の制度を整えて開校の運びとなった。元文二年小倉尚斎病死のあとをついで二代の明倫館祭酒となった。寛延元年辞職し、宝暦二年に六十六歳で病死した。周南は終生徂徠の復古学を説き、薫陶によって門葉は大いに繁茂して有用の人材を輩出した。

津田東陽は萩藩士で、周南に学んで寛延元年周南に代わって明倫館祭酒となったが、宝暦四年に五十三歳で病死した。山根華陽は三田尻船手組の出で、同地の河野養哲（後述）に学び、享保四年明倫館に入り、ついで周南に学んで宝暦五年明倫館学頭座所勤となり、同九年祭酒に進んだが、同十二年辞職した。明和八年七十八歳で病死。小倉鹿門も三田尻船手組の出で、河野養哲に学び、藩儒小倉尚斎の養子となった。享保四年明倫館に入り、また周南に学んで宝暦十二年に至り山根華陽に代わって祭酒となった。安永四年辞職して翌年病死した。年七十四。

繁沢豊城は長府藩医上領伯仙の三男で、宗藩儒者繁沢南塘の養

子となった。安永四年から山根南溟（寛政五年死五二）と交代で明倫館学頭座所勤となったが、寛政四年祭酒となり、文化三年在職中に七十五歳で病死した。豊城は山根華陽に学んで経学に深く、藩の徂徠学は豊城によって再び振起された観があった。小田村藍田は本姓岡田氏、藩儒小田村鄰山（明和三年死六四）の養子となり、文化三年から同九年まで祭酒を勤めた。文化十一年病死。年七十三。中村華嶽は藩儒中村梁山（周南門下、享和元年死七一）の子で、文化三年侍講となり、同九年山県太華と交代で明倫館学頭兼勤を命ぜられた。文政五年祭酒となり、天保六年辞職して翌年病死した。年五十六。

山県太華は本姓吉田氏。享和三年藩儒山県家を相続し、初め明倫館に入り繁沢豊城に学んだが、ついで筑前の亀井南冥に従学し、帰って藩主斉房・斉熙の侍講となり、文化九年中村華嶽と交代で学頭兼勤を命ぜられた。天保六年に至り華嶽に代わって祭酒となり、弘化三年の明倫館移転新築（嘉永二年落成）の事に参与し、学制の改革に尽くした。嘉永三年辞職し慶応二年八十六歳で病死した。太華は従来の徂徠学を捨て朱子学を採用したことは注目に値する。

平田涪溪は大津郡深川の藩士の生まれで、太華に学んだが一派に偏しなかった。嘉永三年明倫館学頭座取扱に任ぜられ、同五年辞職した。明治十二年に至って病死した。年八十四。中村牛荘は初め山田北海（後述）に学んだが、寛政十二年明倫館に入って繁沢豊城に従学した。文化十四年撰ばれて儒官となり、嘉永三年明倫館学頭座取扱となり、同五年祭酒に進んで小倉遯斎と交代で勤めたが安政二年辞職した。明治二年に至り八十七歳で病死した。

小倉遯斎は本姓内藤氏、藩儒小倉実光の養子となり、文政二年明倫館に入って山県太華に学んだ。天保八年藩主敬親の侍講となり、江戸に往来して江戸藩邸内の有備館（天保十二年設置―元治元年廃館）の創立に尽くした。安政三年明倫館最後の祭酒となり、慶応三年萩明倫館の名称は萩文学寮と改められ、遯斎はその御用掛となった。明治十一年七十四歳で病死した。

(2) 明倫館付属校―越氏塾と山口講習堂教師

河野養哲は三田尻船手方の出で、初め医者となったが、かたわら自家を開放して塾とし三田尻地方の子弟を教育した。時に貞享二年の二十五歳ごろと推測されており、塾名は河野氏の越智姓により越氏塾と称し、多くの人材を輩出した。特に山根華陽・小田村鄰山・小倉鹿門らが有名であった。養哲は享保十二年六十七歳で病死したため、一時教育は中断されたけれども、寛保元年三田尻宰判の郷校として復興され、右田の滝鶴台（後述）が教授した。その後経営不振となったので、明和四年からは明倫館の付属となり山根華陽（前述）らが輪番で塾を督した。安永四年また明倫館の支配を離れ、再び郷校として飯田楽軒（天明七年死五二）が督学となった。安永八年移転新築し規模が整い学政は大いに振うに至った。その後、吉田慎庵（寛政六年死五七）・脇山陽（寛政九年死三七）・吉武江陽（天保五年死七二）・今津桐園（安政三年死六八）・今津秋庵（明治八年死四九）らが督学となり、秋庵の時の万延元年にまた移転新築して再び明倫館の付属となった。文久三年からは山口明倫館の所轄に移され、元治元年には名称も三田尻学習堂、ついで三田尻講習堂と改められた。

一方、山口には寺子屋や家塾程度のものは少しあったが、しっ

かりした学校は建っていなかったし、書籍の備えも乏しかった。またこの山口は大内文化を生んだ学問にゆかりの深い土地であるだけに、教育施設の必要が強く望まれていた。こうした山口の現状を察したのは当時家塾を開いていた上田鳳陽であった。鳳陽は山口の人で、本姓宮崎氏、藩士上田清房の養子となり、寛政十二年から文化六年まで萩明倫館で繁沢豊城らの儒学や国学を学んだ。ついで山口の豪農商を説いて遂に文化十二年に学校を新築し山口講堂と称した。弘化二年山口講習堂と改称して山口地方文武諸稽古場の総名としたが、嘉永六年に八十五歳の高齢で病死した。

鳳陽の歿後は高橋漱石（明治二十四年死八一）・松原市右衛門らが講師として学事をついだ。安政五年明倫館助教山県潮坪（後の宍戸璣子爵）が督学となり学事を改革した。万延元年三田尻の越氏塾と共に明倫館の付属となり、翌文久元年には移転新築された。同三年に至って山口明倫館と改称され、従来の明倫館は萩明倫館と称し山口県に二大藩校が誕生した。明治三年の学制改革によって明倫館の名称は廃止され、山口中学・萩中学と改められた。

(3) 宗藩の郷校と教師

○熊毛郡大野毛利領と弘道館　領主毛利親頼は文化八、九年ごろ（あるいは十一年）に弘道館を創設し、家臣浅海猷蔵を教授役とした。天保四年に猷蔵は病死し、生田箕山が代って学頭となり、同十二年には小笠原遊斎が学頭となったが、弘化三年再び生田箕山が学頭となった。明治四年箕山は六十七歳で病死し、翌年ごろ廃館となった。

○熊毛郡三丘の宍戸領と徳修館　山田北海は萩藩儒山根華陽に学んだのち明倫館都講となり、文化六年三丘領主宍戸就年が徳修館を創立するに当たって教授に招聘された。文政三年に北海は六十六歳で病死したので、あとを宍戸家臣の勢一尚左がついで祭酒となり、弘化三年に領主元礼は明倫館に模して講堂を建て聖廟を設けた。尚古はその翌年四十九歳で病死した。その後は村井来山（安政三年死四七）・宮川米水（明治十三年死五八）らが学事をついだが、明治三年廃館となった。

○熊毛郡阿月の浦領と克己堂　領主浦元襄は家臣の文武修練場として天保十三年に克己堂を開設し、家老秋良坐山を中心教師とした。坐山は岩国領新庄の国学者岩政信比古（安政三年死六七）に学び、ついで萩明倫館や京都・近江に遊学して国学・朱子学を学んだ。維新には尊攘の議を唱え、最も海防に留意した。維新後は神道少教正となり明治二十三年八十歳で佐波郡中関に病死した。なお、克己堂は元治元年に克己文武場と改称されている。

○熊毛郡大河内の粟屋領と敬学堂　領主粟屋就道は享和元年に領内子弟の教育のため敬学堂を創設し、家臣の三宅優遊を祭主とした。優遊は文久三年六十歳で病死し、その子三宅空谷（明治三十八年死八六）があとをついで学事に当たったが、明治三年ごろ廃堂となった。

○熊毛郡三輪の井原領と縮往舎　領主井原親章は家中の子弟のため某年に縮往舎を開設して学事を奨励した。元治元年からは第二奇兵隊の分局となって隊士も加わり盛況であった。

○熊毛郡立野の清水領と慕義場　領主清水親知は文久三年に家老難波寧庵（明治二十一年死七八）に命じて、同所長徳寺内に文武修業のための慕義場を創設させたが、慶応二年に生徒の大半が領

主親春に従って出征し、遂に時勢の移るに従い翌年廃止した。

○佐波郡右田毛利領と時観園……本教館　寛永二年熊毛郡三丘から佐波郡右田に移封した毛利元倶は、早くも同五年に郷校時観園を創建して文武の道場とした。これは幕府の昌平校に先だつこと二年、宗藩の明倫館に先だつこと九十一年以前で、全国に魁けて学館を設けて家中に儒学を講ぜしめたことは特筆に値する。当時の儒家は明らかでないが、元倶から三代就信の代に山県良斎が時観園を督していた、良斎は領主元倶に従って右田に来たが、寛文八年京都に上り朱子学を修め、帰郷して延宝初年に時観園の儒学教授となって郷校を督した。領主就信の養子就勝の師儒をも勤め、元禄七年宗藩主吉就が病死したため就勝はその跡をつぎ吉広と改名して萩に移った。良斎もこれにしたがって萩に移り享保十三年八十一歳で病死した。山県周南（前述）は、二男である。

滝鶴台は萩藩士引頭孝清の長男で、藩医滝養正の養子となった。萩明倫館に入り小倉尚斎・山県周南に師事し、周南門下三傑の一人に数えられた。享保十五年に右田領主毛利広政に迎えられ時観園を督した、同十六年広政の命によって江戸の服部南郭に学び、翌年京都に行き同十八年萩に召還され、同十九年再び右田に入り督学となった、宝暦十年実子修業のため右田を辞し江戸に去った。郷校を督すること二十八年、右田の学風を一変させたが、その後宗藩の侍講となり安永二年六十五歳で病死した。

若月大野は右田毛利の家臣で、滝鶴台の高弟であり、江戸の服部南郭にも師事した。鶴台が宝暦十年右田を去ったあとをついで督学となったが、寛政二年七十歳で病死した。松岡文南は若月大野の高弟で、そのあとをついで督学となったが、歿年は不明である。

杉山良哉は三田尻の人で、越氏塾の飯田楽軒に学び、ついで筑前の亀井南冥の門に入った。寛政十二年右田に招聘され督学となったが、その後に時観園は博文堂と改称されたようで、文化三年の博文堂規約が伝わっており、良哉の教育方針が示されている。文化十年に四十四歳で病死した。良哉死後は誰が督学であったか不明であるが、長男杉山威澄は亀井門下の広瀬淡窓に学んで、天保の初年に右田に帰って郷校を督していた。また天保六年ごろには博文堂は脩来院と改称されたようである。威澄は弘化四年病死。年四十二。

大田稲香は佐波郡勝間の地下医大田秀橘の子で、文政十年広瀬淡窓の門に入り、天保十二年右田に招聘されて郷校の督学となったが、弘化三年校舎を移築し、文武教育振興のため大いに学制を改革して校名も更に学文堂と改称した。維新四境戦にはよく領主を補佐したが、慶応二年急病死した。年五十七。門下生からは大州鉄然、赤川晩翠、大楽源太郎、青木周蔵、長松文仲、佐久間佐兵衛、今川岳南らの人材が輩出している。

天野梅溪（華）は萩藩士天野識江の長男で江戸に遊学し、萩明倫館の都講となり、やがて同館用掛として学制の改革に尽し、文久三年政務方に転じて尊攘を論じ、元治元年の政変に幽閉されたが、慶応二年ゆるされて右田の大田稲香のあとをついで督学となった。そして学文堂をまたまた本教館と改称して学制の改革を実施し、明治四年五十六歳で病死した。

○吉敷郡間田の益田領と学習斎　領主益田元固は山口の豪商安部氏の出資を得て天保二年に郷校を創設し、学習斎と名付け岡恭斎

（文久三年死）を学頭とした。恭斎十九年勤続の後は、岡明甫・中井徹斎・荒川勘助・杉山孝敏らが相ついで在勤し、明治三年采地返上の際廃校となった。

○吉敷郡吉敷毛利領と憲章館　田中蘆城は吉敷毛利の儒臣で京都に遊学し、帰って領主毛利就直に挙用されて家中の子弟に教授した。蘆城は吉敷教育の先駆者で、山県周南らと親交のあった徂徠学者であった。享保二十年五十七歳で病死した。片山鳳翩も吉敷毛利の家臣で、田中蘆城に学んだのち京都に遊学した。帰って吉敷の子弟に教えていたが、領主就兼の挙用によって枢要に参し、吉敷文教の隆盛に尽くした。天明七年清末藩主毛利匡邦は育英館を創建した時、教授に招聘され、寛政十二年宗藩の儒臣に登用されて侍講にまで進んだ。文化五年六十九歳で病死した。服部伝巌も吉敷毛利の家臣で、片山鳳翩に学んで私塾章憲斎を開き子弟の教育に当たっていたが、領主毛利房裕に建議して新たに文武場を建てて郷校とし、憲章館と名付けて自から初代の学頭となった。

服部伝巌

学風は徂徠学を守り明治にまでこの伝統がうけつがれた。伝巌は嘉永四年八十一歳の高齢で病死した。伝巌以後の憲章館学頭には、桂月洲（亀井昭陽門下、安政六年死五二）・服部東陽（亀井暘洲門下、明治八年死四九）・名井于石（亀井暘洲門下、明治四十四年死七九）・大田幽石（広瀬淡窓・亀井暘洲門下、大正九年死八六）・吉村又蔵（名和道一のこと、明治六年死三六）らが任ぜられ、明治三年廃館となった。

○厚狭郡宇部の福原領と晩成舎・菁莪堂　領主福原親悛は天保年間に神田逸平・久保田寛彦らを教師に招聘して晩成舎を創立し、弘化二年には長崎の儒者佐々木向陽を招いて学長とし、晩成舎は福原邸内に移転して菁莪堂と改称した。嘉永四年向陽は菁莪堂の学則を定め、文久三年に至って六十三歳で病死した。そのあとは養子の佐々木松墩（明治十八年死五一）がついだが、元治元年に菁莪堂は福原家の執事堂とされ、新たな文武場として宇部維新館が開設されて教育内容も軍事色が強まった。

○厚狭郡厚狭毛利領と朝陽館　領主毛利房衆は文化初年（あるいは享和二年）に初めて学館を建て、市川玄翠を挙用して教授とした。玄翠の歿後は佐々木宇内・重本伝三郎があとをつぎ、文政年間に校舎が焼けたため一時中絶したが、房衆の子元美が弘化二年に新たに本館、文庫、演武場を建て、市川玄伯を学頭に任じた。玄伯は厚狭郡船木の人で、本姓不明、一時内藤氏を名乗った。のち市川玄翠の死後を相続して天保十一年ごろ市川氏を称えた。初め萩の山県太華に学び、文政四年江戸の古賀侗庵、佐藤一斎、大田錦城らに師事して朱子学を修め、同八年帰郷して子弟を教育した。弘化二年厚狭の朝陽館が新築され、玄伯は学頭に任ぜられて

大いに学事を興した。嘉永五年に五十七歳で病死したので、村田文七（朱子学派）・田口弥八郎（同派）・玄伯の長男市川淡蔵（陽明学派）らがあいついで教授の職についた。

○豊浦郡阿川毛利領と時習館　領主毛利広漢（号豊西、宝暦九年死三八）は山県周南に師事し、また江戸の服部南郭に学ぶなど、よく儒学（徂徠学）に通じていた。宝暦三年に至り領地に郷校を創立して時習館と称え、山県孫右衛門・立野孫左衛門・秋枝謙次・林太一らをその教師に任命した。その後、家儒蕭生鳳林が教授した。鳳林は文化十一年七十三歳で病死した。

○阿武郡須佐の益田領と育英館　領主益田元道は享保年間に初めて学館を建てて育英館と称し、家臣品川勿所を挙用して教授せしめた。勿所は京都の伊藤東涯に学び、学成って郷里に帰り東涯の古義学を唱えた須佐文学の先唱者であった。元文三年病死、年五十一。明和初年に領主益田広堯は儒臣波多嵩山を育英館の教授に用いた。嵩山は波多守節（山県周南門下、宝暦五年死三〇）の弟で、明倫館の山根華陽（前述）に師事し、ついで滝鶴台（前述）に学んだ復古学者であった。天明五年病死。年五十一。安永年間に領主益田就祥は家医山科太室を抜擢して文学の教授としたが、寛政元年病死した。年五十一。寛政年間には領主益田就恭は家臣小国玉淵を登用して教授せしめた。玉淵は筑前の亀井南冥の門に学び、ついで上京して皆川淇園に従学した。のち領主就恭の改革を補佐したが、享和年間に反対派に幽閉され、ついで赦にあってからは家居して子弟の教育に専念した。文政十三年六十二歳で病死した。小国嵩陽は玉淵の長男で、江戸の昌平校に入って安井息軒に学び、また林側斎の侍読となった。数年後に帰郷し領主益田親施の命によって育英館の学頭となった。吉田松陰（後述）とは特に親密で互に子弟を交換して教育に尽したが、元治元年の政変に領主親施が国事に殉じたことを憂憤の余り慶応元年に病死した。年四十二。坂上寓所は萩藩士口羽氏の家臣で、中村牛荘に学び、江戸に行き安積良斎、羽倉簡堂らに師事して朱子学を修めた。安政四年明倫館教授に抜擢され、文久二年江戸藩邸内の有備館教授に転じたが、慶応二年特に益田精祥に招かれ育英館の教授となった。居ること十一年、明治九年萩の前原の乱に連坐して京都に幽閉されたが、三年後にゆるされて京都に開塾した、同二十二年東京に移り翌年七十三歳で病死した。

○その他の郷校　慶応三年宗藩主毛利敬親は在郷の子弟を教育する初等教育施設（小学舎）として郷校を、各宰判単位に設立するよう奨励した。この新郷校令によって、阿武郡当島宰判浜崎に朋来舎、奥阿武宰判徳佐に修斉塾、前大津宰判に深川学校、先大津宰判に河原学校、美祢郡吉田宰判東厚保に熊野倉郷校等が設立され、郷校令以前から設立されていた郷校には、美祢宰判大田の温故堂（弘化初年）、吉田宰判伊佐の友善塾（安政三年）、熊毛郡上関宰判麻郷の成器堂（安政六年）等があって、学事は山口萩両明倫館が司った。

(4) 支藩と藩校教師

○岩国領と養老館

宇都宮遯庵は岩国吉川広嘉に仕え、京都の松永尺五に朱子学を学び、帰郷して家中に教授し、扶桑古今人物志を著し、幕府の忌諱に触れて岩国に禁錮された。のちゆるされて再び京都に上り教育に専念し宝永四年病死した。年七十五。また、宇都宮圭斎は遯

庵の子で、遯庵の教えを受けたが、伊藤仁斎にも学んだ。享保五年家中に講義し、同九年病死した。年四十八。その後、宝暦四年に至って吉川経永は岩国横山に初めて学校を建て横山講堂と称えた。ついで弘化四年に至り吉川経幹は規模の整った学館を創建して養老館と称した。玉乃九華を学領とし、二宮錦水を教授に、玉乃五竜・塩谷老田を寮領に任じて、ここに岩国の教育は大いに振興した。

玉乃九華は吉川家の世医で、本姓森脇氏を嘉永二年玉乃氏に改めた。若年から儒学を志し筑前亀井昭陽門下に入り徂徠学を学び、後に朱子学に変った。嘉永四年病死。年五十五。

二宮錦水は吉川家臣で、初め玉乃九華に学び、天保八年江戸の松崎慊堂に従学し、帰って侍講となり、養老館教授から学頭に進んだ。明治七年七十歳で病死した。玉乃五竜は本姓桂氏、玉乃九華に師事しその養子となった。上京して梁川星巌・斎藤拙堂らに学び、帰って養老館教授兼侍読となり、維新後は大審院長玉乃世履として今大岡と評された。明治十九年東京に自殺。年六十二。塩谷老田も吉川家臣として広瀬淡窓の門に入り、帰って養老館助教から教授兼監察に進み、維新後は岩国藩権大参事から福岡県大参事に転じ、のち岩国に帰って明治二十三年六十六歳で病死した。

○徳山藩と鳴鳳館・興譲館

国富鳳山は徳山藩士で江戸の服部南郭に従学し、帰って藩主毛利広鎮に侍し家中の子弟を教育して徳山藩教育の基礎を拓いた。宝暦十二年五十六歳で病死した。門下に本城紫巌・役藍泉・青木葵園らがいた。そして紫巌と葵園とは、明和六年講学のため武術の稽古場を借り、図書の講義をして藩校創設の素地をつくった。その後、藩主毛利就馴は天明五年に藩校鳴鳳館を開設し、紫巌と藍泉とを教授役に任じた。

本城紫巌は徳山藩士で、萩明倫館の山根華陽に学び、更に江戸に行き滝鶴台に従学し、天明五年藩校鳴鳳館の初代学頭となった。享和三年六十七歳で病死した。役藍泉は徳山の修験宗教学院の住職で、滝鶴台に徂徠学を学び、筑前の亀井南冥とは最も深交があった。享和三年藩校の二代学頭になったが文化六年病死した。年五十七。長沼采石は、国富鳳山門下で出藍の誉の高かった青木葵園（安永七年三十一で江戸に客死）の弟で、肥後の高木紫溟に従学し、徂徠学から朱子学へ転向しようとし、やがて藩内に朱子学が風靡する先駆をなした。文化六年藩校の三代学頭となった。天保五年に六十歳で病死した。この間、藩校鳴鳳館は天保二年藩主毛利広鎮の命によって移築拡張され学制は刷新された。

本城太華は紫巌の子で、初め肥後の高木紫溟に学び、翌年筑前の亀井南冥の門に転じた。天保五年藩校の四六学頭となったが、弘化元年七十歳で病死した。小川乾山は徳山藩士で、藩儒長沼采石・本城太華らに学び、江戸に行き佐藤一斎の門に入り、天保十四年藩校の教授から弘化元年に五代学頭となり、藩内の学風を徂徠学から朱子学に転向させた。安政四年四十九歳で病死した。福間青海も徳山藩士で、肥後の辛島塩井に朱子学を学び、嘉永四年藩校鳴鳳館の教授となって学制を改革し、同五年館名を興譲館と改称して初代教授となったが、財政面で反対派のため幽閉され、安政元年四十二歳で憤死した。藩主毛利元蕃の時であった。飯田竹塢も徳山藩士で阿波の紫野碧海に学び、安芸の吉村秋陽に陽明

学を学び、また江戸の佐藤一斎に師事した。帰藩後は藩校教授となり維新に尽した。明治二十六年八十二歳の高齢で病死した。

林芳蟹は藩儒長沼采石に学び、ついで岡山の井上達三、二本松の服部半十郎に学んだ。嘉永四年藩校助教に抜擢され、安政元年から教授取計に進み、また維新に尽した。明治十年七十一歳で病死した。桜井魁園は京都の春日潛庵や国学者松田直兄の門に入り、神典・国史を研究し、天保十四年藩校助訓役となり、嘉永七年教授取計に進み、特に藩の国学を興した。明治二年病死。年五十六。和歌を善くし秋園とも号した。本城蒙堂は徳山藩士江村忠韶の子で、藩儒本城太華の養子となった。安政元年藩校訓導役となり江戸の安積艮斎の門に入り、文久三年から藩校教授となって政務にも参与したが、元治元年の政変に幽閉され、翌慶応元年殺害された。年四十一。渋見猶造は嘉永四年藩校の寮長となり、順次進んで明治元年徳山藩校最後の学長を勤めた。廃藩後は家塾山静塾を開いて子弟の教育に当ったが、明治十七年六十二歳で病死した。

○長府藩と敬業館

長府藩主毛利綱元は元禄十年唐僧で山城宇治万福寺七世の悦山道朱を迎えて黄檗宗竟苑寺を創建し、藩中の子弟に文教道徳を教授せしめた。当時悦山の外に河野玄遠・内藤好麓らが儒学を教授したという。寛政四年に至って藩主毛利匡芳が初めて藩校敬業館を建て、藩儒小田済川を都講に任じて、準士以上の皆入学を奨励している。済川は豊浦郡宇部の人で本姓は松岡氏、長府藩家老細川宮内の家医小田雲同の養子となった。少年のころ実兄永富独嘯（明和三年死三五）に従い上京して医を山脇東洋に学んだ。明和八年萩明倫館に入ること三年、天明二年長崎に遊学し、帰って侍医に進み、寛政四年藩校の都講となったが侍医を兼ね、同五年教授に進んだ。同九年侍講となった。享和元年五十五歳で病死、ひごろから最も中庸を崇信した。

臼杵鹿垣は都濃郡下松の柳正興の子で十七歳の時筑前の亀井南冥に学び、ついで長府に来て敬業館の小田済川に認められ、寛政十年長府に招かれて敬業館訓導となった。享和元年済川病死のため鹿垣が学事を摂督した。翌二年教授に進み、柳氏を臼杵氏の本姓に復した。文化三年長府藩の世臣に加えられ、文化十年病死した。年四十二。

国島警斎は豊浦郡神田村の人で、本姓は小田氏。阿川の蒲生鳳林（文化十一年死七三）、長府の小田済川（前述）に学んだ。長府の儒家国島滄浪のあとを相続し、ついで敬業館の教授と侍講を兼ねた。文政九年病死。年五十七。

臼杵鹿垣

小田南畝は長府藩医松岡道遠の二男で小田済川の養子となった。初め敬業館舎長となったが、江戸の昌平校に学び、帰って訓導に進み、養父のあとを相続した。天保二年藩主毛利元義が聖廟を建て初めて釈奠を行なったとき主司した。同六年四十六歳で病死したので、藩主は深く惜んで学頭を追贈した。小田孟章は長府藩儒小田南畝の子で、安芸の吉村秋陽に学び、ついで江戸の佐藤一斎の門に入った。三十歳の時帰国して学館訓導となり三十六歳で病死した。歿年は不明。臼杵横城は藩儒臼杵鹿垣の子で、小田南畝に従い、江戸の古賀侗庵に学び昌平校に入った。天保年間帰藩して敬業館訓導となり、弘化初年に教授に進んだが、元治元年に五十九歳で病死した。

○清末藩と育英館

天明七年に至って清末藩主毛利匡邦は初めて藩校育英館を創設し、吉敷郡吉敷の儒者片山鳳翩（前述）を招聘して学規を定め教授を司らせた。

呉林梅処（くればやし）は豊浦郡下大野の人で、本姓境田氏、寛政四年清末藩医紅林玄淳のあとを相続し、紅と呉とは国訓が同じゆえ呉氏を称した。同年儒業を命ぜられ育英館の会頭となった。また片山鳳翩とは交りが深かった。のち側目付役に進み文化十四年病死した。享年不明。

(5) 私塾の教師

岩国の東沢瀉は弘化二年二宮錦水に学び、安政元年江戸に行き佐藤一斎・安積艮斎・大橋訥庵らの門に出入し、万延元年備中の山田方谷・門田撲斎・但馬の池田草庵・安芸の吉村秋陽らに学び、特に秋陽の陽明学を奉じた。岩国に帰り藩校養老館の教師となったが、時事を痛論して容れられず元治元年辞職し、慶応二年には岩国の尊攘不振を憂い、友人栗栖天山（慶応三年自刃二八）と精義隊を組織したが、保守派のため流刑に処せられた。明治元年釈放後の同三年玖珂郡保津に沢瀉塾を開いて専ら育英に尽し、同十七年閉塾された。同二十四年六十歳で病死した。

妙円寺月性

遠崎の妙円寺月性は天保二年に佐賀の善定寺不及や豊前の恒遠醒窓に詩文を学び、同八年広島の坂井虎山にも学んだ。同十四年大阪の篠崎小竹の梅花塾に入り塾頭となったが、嘉永六年に海防を自からの任とし、帰国して巡講に努め、私塾時習館を開いて教育に当り、世に海防僧と称せられた。安政五年四十二歳で病死したが、門下生では大楽西山（後述）・赤祢武人（慶応二年刑死二九）・大洲鉄然（明治三十五年死六九）らが有名であった。

台道の大楽西山は本姓山県氏、天保十四年大楽家をつぎ、遠崎の海防僧月性の薫陶を受け、安政二年豊後の広瀬淡窓の門に入った。翌年帰郷して右田の大田稲香（前述）に学び、尊攘の事に奔走したが、慶応二年台道に私塾西山書屋を開いて志士の養成につ

とめた。明治三年に山口脱隊事件の主謀者として、また大村益次郎暗殺計画者としての疑を受けて九州へ出奔したが、翌四年筑後川畔で暗殺された。年四十。後の首相寺内正毅元帥も西山の門弟であった。

陶の富永有隣は文政十二年明倫館に入り、故あって嘉永六年萩の野山獄に入獄中吉田松陰（後述）と知己となり、安政四年出獄して松下村塾の賓師となったが、同六年去ってのち秋穂二島に私塾定基塾を開いて子弟の教育に当っていた。維新に際しては各地で活躍したが、明治二年脱隊事件の首領となり、翌年土佐へ脱走した。同十年捕えられ、同十七年特赦によって出獄し、同十九年帰国し、帰来塾を開いた。同三十三年病死。年八十。

山口の加藤桜老は水戸藩士の子で笠間藩士の養子となり、水戸の会沢正志斎・藤田東湖に学び、江戸に出て昌平校に入り、兵学を清水赤城に受けた。文久三年長州藩の招聘によって山口に来り留ること六年、山口明倫館に教授し、あるいは私塾詠帰塾（初め慶応塾）を開いて水戸学を講じた。塾生は二百余人に及び、三浦梧郎や大島義昌らもここに学んだ。明治になり教部省に出仕したが、のち退職して明治十七年東京で病死した。年七十四。

下関の三輪東皐は筑前の医者平井玄琳の子で下関商人三輪賢克の養子となった。儒学に志し、京都あるいは萩に遊学して徂徠学を修め、下関に帰って私塾を開いたが、子弟三百人にものぼったという。寛政七年七十一歳で病死した。

三隅の村田清風は寛政九年明倫館に入り、在学三年で退館して山田北海（前述）に儒学を学んだが、享和三年再び明倫館に入り、繁沢豊城・小田村藍田（共に前述）らに学び、文化五年退館した。その後は藩政の要路に登用され、民政の改革・文武の奨励・兵制の拡張等に力を尽し、長州藩の大政治家として世に知られた。天保十四年には私宅を教場として尊聖堂を開設し、弘化二年に三隅に隠棲して沢江地方の士庶の教育に専念した。安政二年再び藩政に参与したが、間もなく同年七十二歳で病死した。

村田清風

萩の吉田松陰は藩士杉百合之助の子で叔父玉木文之進の養子となった。幼時は叔父玉木文之進（慶応三年死五五）・林百合之助（嘉永四年死五六）に家伝の山鹿流兵学を、山田愛山（元治元年刑死五五）に長沼流兵学を学んだ。その後各地を周遊し、江戸では佐久間象山に従学した。ところが安政元年下田事件に罪をえて萩野山獄に送られ、翌二年実家杉氏の家に幽居し、同三年閉居の身で家学を教授することを許されたので、居宅の一棟を塾舎に当て私塾教育を開始した。これより先、天保十二年ごろ叔父の玉木文之進が松下村塾と称する私塾を開いて萩松本地

吉田松陰

方の子弟を教育し、ついで松陰の外叔父に当る久保久成（文久元年死五八）が松下村塾の名称を襲用して子弟の教育に当っていた。松陰はこの松下村塾の名をつぐことを許されたものである。ところが満二年余の安政五年再び獄に入れられ、ついで翌年江戸に送られて三十歳で刑死した。しかし、松下村塾の学業は依然続けられ、門人の中谷正亮（文久二年死三五）らが塾の指導に当ったが、文久から慶応にかけての数年間は国事多端で、塾生も四方に奔走して学業は自然と中断された。慶応二年に松陰門下の馬島甫仙（明治四年死二八）が塾頭を勤めて復興された。明治四年甫仙が塾を去ったあとは河井惣太がついでいたが、間もなく辞職したので、同年再び玉木韓峰が教授した。また松下村塾名は五年後には松陰の兄杉梁園（明治四十三年死八三）がついで自宅で教授し、明治二十年ごろに及んだ。

萩の仲東門は明倫館の都講で、寛政～文化のころ萩の土原に家居して楽群堂と称する私塾を開き、萩城下で最も盛んな塾であった。天保三年病死したが、享年は不明である。

萩の岡本栖霞も天保～弘化のころに故あって仕官せず、萩の江向に家塾の江南塾を開いて名声をあげていた。明治二年五十五歳で病死した。

萩の土屋蕭海は藩士佐世氏の家臣で、初め中村牛荘（前述）に師事し、ついで広島の坂井虎山、江戸の斎藤竹堂・塩谷宕陰・羽倉簡堂・藤森弘庵らに学び、また吉田松陰とも親交があった。安政元年帰国し、翌年萩の塩屋町に私塾の八江塾を開いて子弟の教育に尽した。その後尊攘のことに奔走し、文久三年藩世子の侍読となったが、元治元年病死した。年三十六。

萩の近藤芳樹は吉敷郡台道岩淵の農家の出で、幼時から学問に志し、初め猪飼敬所に心学を、原古処に儒学を学び、文政六年上阪して村田春門の門に入って国学を学び、また翌年紀州の本居大平に従学した。天保十年藩主毛利敬親に召還されて藩士近藤家を相続した。萩明倫館に教授するかたわら、嘉永二年には藩命によって萩の新堀一乗院内に国学教授の私塾抄宗寮を開いた。萩藩の国学は芳樹によって大いに振興し、抄宗寮ものち江向に移されて廃藩ごろまで存続した。芳樹は山口県庁に出仕し、明治八年宮内省に転じた。同十三年病死。年八十。

(6) 心学の教師

長州藩で心学道話が行なわれたのは、文政七年赤石某という心学講師を萩に招いたのが初見で、翌年には広島心学の奥田頼杖（嘉永二年死五八）を萩の有志が招聘して心学道話の講習を行ない、以後毎年招いた。同十年には私立の心学道場日章舎が萩新堀に設立され、更に天保六年奥田頼杖は正式に萩藩の御用道師に採

用されて心学熱はますます高まった。同十三年に至って萩江向に藩立の日章舎が開設され、その後に敬身堂と改められ、萩明倫館の管轄に属した。なお天保末ごろには関東心学受続の愛媛の近藤平格（明治元年死六九）も熊毛郡上関や大島郡方面を回村している。

古谷震岳は佐波郡植松の人で、萩の私立日章舎に入って奥田頼杖に心学を学び、天保十四年京都の心学道場明倫舎に入って上河淇水や中沢道三の教えを受けて石門の奥儀を究めた。間もなく帰藩して藩命により水津藤右衛門と交代で日章舎の道話を担当した。震岳は明治九年六十三歳で病死したが、高弟には牟礼の藤本七郎右衛門や吉敷の石崎赤溪（大正五年死八三）らが知られていた。

(7) 長州藩の洋学者

長州藩では享保四年萩に藩校明倫館が創建されていたが、未だ医学校は設立されなかった。しかし天保八年毛利敬親が藩主となり、村田清風の理解と、藩医賀屋泰安・能美洞庵・青木周弼らが中心となって医学校設立の機運は急速に高まり、天保十一年に至って萩八丁の南苑御茶屋に設置され、「南苑医学所」と称した。漢方医学と翻訳医学とを講じ、青木周弼を蘭書の翻訳掛として、ここに長州藩学最初の西洋学採用となった。

青木周弼は大島郡和田の地下医青木玄棟の長男で、文化十一年に三田尻の能美友庵に医業を学び、天保三年ごろ江戸の坪井信道の塾に入り、また宇田川榕斎にも緒方洪庵と共に蘭学を学んだ。同六年ごろ帰郷したが、同八年に弟の青木研蔵と共に長崎に遊学して蘭学の研究に専念した。同十年藩主毛利敬親に召還されて藩医となり、翌年藩の医学校南苑医学所の創設には蘭学教授に挙用された。また、弟研蔵は弘化四年に同所の西洋書翻訳御用掛となり、東条英庵・松村太仲と共に蘭書の翻訳に当った。嘉永二年医学校の制度が改正され、従来の南苑医学所は済生堂と改称され、周弼はその会頭役兼蘭学掛となった。また、済生堂は翌三年に好生館と改称され、周弼は譜代藩医に取り立てられて好生館教諭役となり、研蔵は田原玄周と共に好生館西洋原書頭取役となった。同四年周弼は侍医に進み、また安政二年御側医に挙げられ、研蔵も同年田上宇平太と共に西洋学所の西洋学師範掛に任ぜられている。この西洋学所は、時局にかんがみ一段と洋学（西洋書による兵学）の振興のために好生館に付属する一局として設置されたものであった。ついで、安政五年周弼の建言によって江戸藩邸内に蘭書会読会が開かれ、江戸と萩と相呼応して洋学の研究はいっそう盛んとなった。翌年好生館と西洋学所は、好生堂と博習堂とにそれぞれ改称され萩の明倫館内に移された。文久三年周弼は能美洞庵の後任として好生堂教諭役となったが、その年萩の自宅で病死した。年六十一。弟の研蔵は侍医から御側医に進み、明治二年大典医となったが、翌年東京で事故死した。年五十六。

なお、医学校好生堂は、慶応二年に山口へ移転して山口好生堂と称したが、明治元年再び山口好生局と改められ、更に同三年山口医院と改められた。同七年山口から三田尻に移され華浦医院となった。

一方、西洋学研究所としての博習堂は、元治元年山口博習堂に合併し、慶応元年三田尻海軍学校へ合併し、ついで明治元年三田尻洋学塾となった。

（山口県文書館専門研究員）

人物を中心とした

山口県教育郷土史(2)

県花‥‥なつみかん

田村哲夫

(三) 近代教育の先驅者

(1)中等教育　文部省布達第一三号によって、従来の旧藩設置の学校は悉く廃止されたので、山口県でも、山口・萩両明倫館改称の山口中学・萩中学を、明治五年九月限りで閉学させた。同十一月新たに山口変則中学校・萩変則中学校として開校し、岡村熊彦・中村百合蔵がそれぞれ首席教授となった。また別に外国教師を招いて、山口英国語学所にイギリス人ダルネー夫妻を、萩独乙語学所にドイツ人ヒレル夫妻を、岩国英国語学所にイギリス人ステーベンスを、それぞれ備い入れて洋学教育に当たらしている。同六年に変則中学は変則小学と改められ、鴻城学舎・巴城学舎とも称したが、翌年一時廃止となった。間もなく上等小学として復興され、同八年開校し、長屋又輔が鴻城学舎校長、桂路祐が巴城学舎校長となった。ついで両校長は入れ替ると共に、県営から毛利家の私立経営に改められた。同九年再び両校長は入れ替り、同十一年に鴻城学舎は私立山口中学校、巴城学舎は山口中学校萩分校と改められ、長屋又輔が引続き校長を兼掌した。同十三年再び県に移管されて県立五中学校制が実施された。即ち、岩国中学校（新設）、徳山中学校（新設）、山口中学校（既設）、豊浦中学校（旧豊浦学舎）、萩中学校（既設萩分校）の五校で、校長は塩谷処・齊木忠蔵・長屋又輔・熊谷俊一・中村雷樹であった。

岡村熊彦（養斎）は萩の学者で、山口明倫館・三田尻講習堂・熊毛郡立野の郷校藁義塾等で教え、明治元年から再び山口明倫館文学教授となり、同五年山口変則中学の首席教授となったが、翌年五九歳で病死した。著書の報国問答・忠節事績等は有名である。

中村百合蔵（浩堂）は萩の明倫館学頭中村牛荘の子で、山口明倫館教授から萩明倫館に移り、明治五年萩変則中学の首席教授となったが、のち毛利家史編集に従事して同二十八年七三歳で病死。

長屋又輔も萩出身で、明治六年から山口県庁に勤め、学務課長となって鴻城学舎・巴城学舎・山口中学校・山口師範学校等の校長を兼任した。同十六年内務省に入り、北海道樺戸典獄を最後に大正三年病死した。六八歳。

桂路祐は萩の国司家から桂家の養子となり、蘭書・航海術にすぐれ、万延元年函館で英語を学び、翌年幕艦に測量師として乗船し黒竜江を視察した。文久三年の下関攘夷戦には壬戌丸艦長として活躍し、維新後は巴城学舎・鴻城学舎の専任校長となった。明治九年萩区長、同二十三年萩町長となったが、翌年五六歳で病死。

長屋又輔

塩谷処（老田）は岩国出身で、広瀬淡窓門下であり、岩国養老館教授から岩国日新隊副督として維新に活躍した。明治三年岩国藩権大参事、同四年から六年まで福岡県大参事を勤めたが、同十三年山口県立岩国中学校初代校長となり同二十三年六六歳で病死。

齊木忠蔵（西峰）は徳山出身で、安積艮斎門下である。維新には徳山献功隊の参謀となり、のち徳山興譲館助教となった。明治十三年県立徳山中学校初代校長となり、同二十四年六四歳で病死。

熊谷俊一は長府の豊浦学舎（明治六年創立）の校長から、明治十三年県立豊浦中学校初代校長となった人であるが、伝記の詳細は不明である。

中村雷樹（栗軒）は萩藩医中村春岱の二男で、吉田松陰や安井息軒・会沢正志斎らに学び、藩府の役人として明治二年には山口藩権大参事に進み、同五年から山口県庁の役人となり、学務掛・租税課長兼出納課長を経て同七年退職した。同九年巴城学舎校長となったが、同十三年県立萩中学校長となり、同十七年再び山口県用掛を勤めた。翌年から二十年まで萩明倫小学校長、ついで私立修善女学校が創設されて校長となった。同二十二年自治制初代の萩町長に就任したが、翌年東京に出て毛利家編輯局副総裁となり、間もなく病死した。六〇歳。

県立五中学校は、明治十七年には山口中学校を本校とし、岩国・徳山・豊浦・萩の四中学校を分校とすることに改められ、同十九年県立山口中学校は文部省管理の山口高等中学校に昇格され、翌年からこの高等中学校の予備校としての岩国学校・徳山学校・山口学校・豊浦学校・萩学校の五学校が開設された。この綜合的学制の総長は河内信朝で、今田純一・難波恭平・貫元介・竜見経誠

中村雲樹

・綿貫謙輔がそれぞれ五学校の校長であった。

河内信朝は萩に生まれ萩の明倫館に入学後山口明倫館に転学、明治二年東京の開成学校、同四年大学南校に学んだ。ついで法制局に勤め、同十四年東京控訴裁判所詰の判事となったが、同十六年山口県下の中心校である山口中学校の専任校長に就任した。同十九年官立の山口高等中学校に改組されたが、更めてその初代校長に任ぜられた。同二十六年病気のため一旦退職したが、同二十九年山口県尋常師範学校長、同三十年東京の高等師範学校長、文部書記官を歴任して、同三十一年から三十三年まで再び山口高等中学校改称の山口高等学校の校長に帰りざいた。同三十六年五五歳で病死。

(2)師範教育　一方、教員養成について山口県では、従来の私塾・家塾の教師をそのまま新学制の小学教師に採用しても、教授法に暗くては学制の趣旨を徹底させることが出来ないから、教員の速成を計るため教員試験所を山口と岩国に設置し、明治六年に長屋又輔と今田純一の両名を教則掛として東京師範学校へ派遣、帰県後県下の小学教師を順次入所させて実地授業法を伝習させたが、同七年に至って恒久的な施設としての山口県教員養成所を山口に設立、防府の上司淵蔵を幹事（所長）とし、萩の佐々木一介・岩国の大草彬史・豊浦の横島武二を教師に任命した。

上司淵蔵は防府の名家の生まれで、三田尻講習堂に入り、主として岡村寳斎に師事したが、明治元年師に従って山口明倫館へ入学、同五年山口変則中学助教から、翌年山口変則小学一等教師となった。同七年山口県教員養成所創立時の幹事兼教師に就任し、同十年から防府の私立周陽学舎初代舎長をも兼ねた。同十六年山口県師範学校の専任校長となり、同二十九年退職したが、この間、私立山口高等女学校長を兼ねるなど、山口県教育界の重鎮であった。昭和四年八一歳の高齢で病死した。

(3)専門教育　まず、山口県の医学専門教育については、明治元年に山口好生局（医院）で教育と診療とを行なっていたが、廃藩置県で県営となり、福田正二が山口医学校の校長となった。同七年に三田尻へ移転して華浦医学校と改称されたが、同十年県営が廃されて福田正二を校主とする私立学校となって維持された。しかし同十三年には再び県営に復され、山口県医学校と称し、校長には引続き福田正二がなった。翌年山口県華浦医学校と改称されたが、同十六年財政難から廃校となった。

福田正二は小郡の人で、青木周弼に西洋医学を学び、山口医院の教授となり、右のように医学校長として専念した。医学校廃止後も三田尻に開業すると共に医師の教育も続け、明治三十五年に五七歳で病死した。

また、下関では明治五年奇兵隊病院のあとを受け、松本洞庵が

赤間関医学校を経営し、翌年石井信一が主任教師となったけれども、同九年廃止されて華浦医学校に引継がれた。なお、萩でも明治八年に赤川玄悦を社長とする私立医学社が創設され、同十四年県営の山口県萩医学校を新設して赤川玄悦を校長としたが、翌年には廃校となった。以後、山口県では昭和十九年宇部に山口県立医学専門学校が開校されるまで、医学教育施設はなかった。

次に、山口県の農業専門教育については、従来は農事・獣医学等の講習会を実施していたが、明治十八年に至って山口に山口農学校が創設され、高岡直吉が校長で、次席は井原百介であった。特に井原百介は初め山口中学校教諭を兼務していたが、翌年二代校長となった。

また、商業専門教育は下関で明治十七年初めて有志による区立赤間関商業講習所が創設され、中村英吉を所長として始業した。同十九年赤間関商業学校（二十二年から市立）と改称され、菅川濟が校長となった。

(4)高等教育　明治十九年官立山口高等中学校が設置され、翌年県立山口中学校長河内信朝を初代の校長としたことは前に述べたが、同二十七年から岡田良平（静岡県出身、文部省参事官、後文部大臣、枢密顧問官、昭和九年死、七一歳）が二代校長となった。この年高等学校令による山口高等学校と改称され、同二十九年文部省参事官に専任となって山口を去った。その後、明治三十三年から四十年まで校長となった松本源太郎（福井県出身、五高教授、後学習院女学部長、大正十四年死、六七歳）の時、大学予科としての山口高等学校は、商業専門学校としての官立山口高等商業学校に同三十八年から変革した。このため、山口県には大学予科としての高等学校がなくなったので、しばしば政府に復興を請願した結果、大正八年にようやく官立山口高等学校が山口に復活した。この初代校長は新保寅次、二代は岩田博蔵であった。

(5)女子教育　山口県では岩国が早くから女子教育に意を用い、安政年中以来男生徒の通学する塾とは別の女塾を設ける風があったが、明治五年の学制発布直後に「女校之議」「女学条例」が作られて、岩国女学校が創建された。今田純一が主幹で同十二年に及んだという。また、萩では同四年から織機裁縫を教えた赤川ミチの私立嫩貞松舎が開業していた。しかし、何といっても毛利トキ子が同六年校長となって開校した厚狭郡舟木村立船木女小学は、新学制に沿った県下最初の近代女子教育施設で、山口県でも唯一校の特異な存在であった。男児の小学校は舟木村立舟木小学と呼ばれ、女小学と呼ぶことで校名は区別されていた。

毛利トキ子（勅子）は徳山藩主毛利広鎮の七女で、山口藩主毛利元徳の姉でもあった。天保十年厚狭毛利元美の夫人となり、明治六年から山口県最初の女訓導として前述の舟木女小学で女児に読書と裁縫を教えていたが、同十一年病気にかかり翌年死去した。六一歳であった。同校はトキ女史の遺徳を後世に伝えるため、トキの字音を冠して村立徳嵩学舎と改称し、同十七年には徳嵩高等女学校と改称されると共に、村立の女子中等教育施設に発展した。

その後、徳山では徳広寺住職赤松照幢（大正十年死、六〇歳）が明治十九年に新妻の安子（西本願寺勧学赤松連城長女、大正二年死、四九歳）と共に徳山婦人講習会を開設して女子の修身教育を創め、翌年私立白蓮女学校と改称して規模を拡張し、同二十三年私立徳山女学校（大正五年閉校）と改称した。その他、赤松夫妻は防長婦人相愛会育児所・女学校付属幼稚園・同養蚕染色実習所等を設け、地方婦女子の教育に貢献した功績は大きかった。

こうした明治二十年代から、女子にも単に裁縫の実技だけでなく、普通学科を授ける女子教育の必要性が認識されだした。即ち、同二十年には山口の馬来勝平が私立山口女学校を、同二十二年玖珂郡米川の綜安竹次郎が私立米川女学校を、下関の小松昌平が私立赤間関洗心女学校を、同二十三年山口の服部章蔵が私立山口英和女学校を、萩の中村雲樹が私立修善女学校を、同二十四年長府の多久間信衛が私立長府英和女学校を、同二十九年玖珂郡麻里布の大田タメが私立今津裁縫学校、同郡伊陸の楊川コトが私立周東女学校、同所の三吉ハナが私立三巧舎を、同三十三年熊毛郡田布施の岡村種香が私立嬬雅女学校を、防府の大沢良輔が私立周南女江学舎を、山口の中村ユスが私立中村裁縫女学校を、同三十五年山口の村尾マツが私立村尾女子裁縫学校を、同三十六年山口の近藤ヨシが私立裁縫伝習所、宇部の香川昌子が私立香川実科女学校をそれぞれ設立し、多くは後の公立・私立の高等女学校へと発展しており、特に現在の私学振興の歴史を物語と共に、それぞれの創立者は山口県下女子教育の先駆者とも見るべきであろう。

その若干名を紹介してみよう。

服部章蔵は吉敷毛利の憲章館教授服部東陽の子で、兵学を大村益次郎に受け、維新後海軍兵学校の教官となったが、明治十一年辞職してキリスト教の伝導に従うかたわら、同十二年下関に光塩私学を起し、また同二十三年山口に英和女学校を開いた。この女学校はその後光城女学院と改称したが、長崎創立の梅香崎女学校（校長広津藤吉）と大正三年に合併して、下関に私立梅光女学院（院長広津藤吉）が創設された。服部章蔵は東京小石川教会の牧師を勤めていたが、大正元年郷里吉敷に隠退し、同五年六八歳で病死した。

中村ユスは萩藩士中村常平の二女として吉敷郡宮野に生まれ、慶応三年山口野田の毛利氏別邸内で裁縫塾を開いていたが、同十四年山口米殿小路に校舎を新築して中村裁縫伝習所を開設した。同三十三年私立中村裁縫女学校と改称し中市に移り、同三十六年また今道に移った。大正十三年八四歳で病死。

村尾マツも萩藩士林藤右衛門の長女で、村尾治兵衛と結婚し、明治三年から七年間は旧山口藩主毛利元徳の四男四郎の養育主任を勤めていた。同十年に至って山口大殿大路に私立村尾裁縫所を開設し、同三十五年村尾女子裁縫学校、大正元年村尾裁縫女学校と改称し、同八年八〇歳で病死した。同校はその翌年山口野田に移転し私立野田女学校と改称された。

香川昌子は愛媛県出身で、南画と刺繍にすぐれていた。明治三十三年に当時の厚狭郡藤山小学校長であった兄愷太郎を頼って山

口県に来て徳基女学校に奉職し、同三十六年から私立香川実科女学校を設立した。戦後香川学園となり昭和二十八年八一歳で病死した。

右の外、下関の早鞆高校の前身である私立阿部裁縫女学校は、山口県玖珂郡余田出身の阿部ヤスが、夫肇の下関警察署勤務に随従して明治三十四年来関し、私宅に裁縫の家塾を開いたことに始まり、大正元年に至って私立阿部裁縫女学校を創立し、早川権五郎を校長とした。昭和二十三年私立早鞆高等学校と改称され、阿部ヤスは翌年七九歳で病死した。

(6)私塾教育　女子教育を除く各種学校の興廃は著しかったが、比較的存続期間が長く、或はその地方の教育に影響が強かったと考えられる私塾のいくつかを、塾主を中心に紹介してみよう。

明治六年山口の近藤清石が指導経営の任に当たった将弘学舎は、神職の養成施設で、同十五年山口皇典講究所となり、同三十年から山口国学院と改称された。この近藤清石は萩の藩士大玉家から近藤家に入り、国学歌学は近藤芳樹に、漢学は土屋鼎海に学び、藩政府の役人として藩史や儀式典故のことに従い、明治五年から十三年まで周防一宮の

近藤清石

玉祝神社宮司を勤めた。また、県の委嘱により旧記編纂兼地誌編集用掛に専任され、山口県に関する多くの歴史・地誌の著述に専念し、郷土の史実研究、文化財保存等に尽した功績は大きい。大正五年八四歳の高齢で病死した。

つぎに、明治十年佐波郡士族の共同私設にかかる周陽学舎は、前述の上司淵蔵を舎長として開校し、同十七年から今川新（岳南）が二代舎長となった。今川新は大田稲香・広瀬旭荘らに学び、右田毛利の学文堂教授となった。維新後は右田小学・周陽学舎の教師となり、明治二十九年病死した。六九歳。周陽学舎は同三十一年に郡立周陽学校となり、一時また私立から組合立周陽中学校となったが、大正四年県立山口県周陽中学校、同十二年県立防府中学校と改称された。

また、明治十一年山口に岡村圭三（黒城）が創設した黒城私塾は、明治期の代表的な私塾の一つであった。この岡村圭三は近江の人で、京都で岡村簀斎門下に入りその養子となった。ついで共に山口に帰り、学制頒布の時は山口第一小学校長となり、黒城私塾を開き、また書道を山口師範学校で教え、同二十一年には山口協力義塾を興したが、同四十三年六五歳で長崎に病死した。

郡濃郡花岡出身の弘鴻は、関流算法や暦法星学を学び、慶応三年萩の松本源一に洋算を、明治四年英人ラルキンに測量術を学ぶと共に、蘭学・国学等も修めて山口に移住し、鴻城学舎の数学教師となった。また後には山口師範学校でも数学を教えたが、同十年山口に数学塾（弘塾）を開いた。同二十年日文舎と称え、数学

と和文学を教えるかたわら、専門の数学・暦学方面の著書の外、国学・歌集等の著書も多く、その出版されたものは明治期の教科書として広く県下の学校で使用された。同三十六年七五歳で病死。

岩国錦見出身の東崇一（沢瀉）は、岩国の陽明学者で、維新には精義隊を組織したが、保守派によって桂島へ流され、明治元年釈放され、同三年玖珂郡保津村で塾を開き、同十一年正式に沢瀉塾として中等教育に従事すると共に、著述に専念したが、同十七年閉塾、同二十四年病死した。年六〇歳。

明治十一年山口に福永淑人（紅雪）が創設した西鄙私塾も、黒城私塾と共に有名な私塾の一つであった。福永淑人は都濃郡湯野の出身で、豊後・京都・江戸・大阪等で多くの学者の教えを受け、儒学・詩文・書道の奥儀を専攻した。その後郷里で子弟の教育に当たっていたが、明治八年山口に移っても福永塾を経営し、同十一年公許を得て西鄙私塾を開設した。同二十一年六二歳で病死したので、長男登一が継承して西鄙私塾と称し、英語・漢文・数学・法律を教えていたが、同三十一年頃に病気のため閉鎖し、同三十七年福岡県若松で客死した。

下関では広井良図（赤水）が明治十二年に硯湾私学を開設していた。広井良図は清末落の儒家の出で、萩の山県太華・大阪の森田節斎・後藤松陰らに学び、維新後清末県大参事に任ぜられた。辞任後は後進の教育に専念し、下関から清末に同十五年移って硯湾学舎と改称したが、同二十一年廃塾し、同三十六年七七歳で病死した。

明治十五年佐波郡右田の毛利藤内ら有志によって私立移風義塾が創立された。塾長の土肥実香（螺峰）は大田稲香門下で、維新後は下関・群馬県等で教員を勤め、帰郷して開塾、同十五年移風義塾に教え、のち山口中学校教諭となり、同二十一年山口に錦川学舎を開いた。同二十九年佐波郡周陽学舎の校長となったこともあったが、同三十二年六五歳で病死、右田聖人と呼ばれたいた。

萩の妙元寺僧中所可乗は平田涪溪・土屋蕭海の門人で、明治十四年八江塾（先師の塾名を踏襲）を開き、ついで八江学舎と改めた。同二十二年五〇歳で病死し廃塾となった。

吉敷郡台道には明治十七年開塾の憲章私塾があった。塾主の松岡敏は明倫館の都講を辞し郷里で寺小屋を開き、明治八年から十一年まで大道小学の教師となり、同十二年小郡村立小郡学舎に聘されてその副長となったが、翌年帰郷して家塾を開き、同十七年認可を得て同三十一年病死するまで憲章私塾を経営した。

鴻城義塾の創立者大谷新二は、長府の佐々部家に生れ、同地の大谷家の養子となり、明治七年ごろ山口に出て鴻城学舎に学び、ついで山口の大附教校や黒城私塾の数学教師となった。同二十年私塾教育を志し、山口に数英学舎を創立、翌年岡村圭三と共に山口協力義塾を開いたが、同二十四年に別に分れて私立鴻城義塾を創立した。同三十年鴻城尋常中学校、同三十九年鴻城中学校と改称し、大正二年に初代校長大谷新二は五六歳で病死、養子三郎が二代校長をついだ。

明治二十一年玖珂郡伊陸に私立育英館を創立した硯俊聡は、同

郡神代の村岡家に生まれ、伊陸の硯家の養子となり、大阪師範学校を卒業して各地の教員となり、明治二十年帰郷して私塾を興し、また伊陸村長を勤め、山口県会議長となり、衆議院議員に選ばれた。昭和六年八〇歳で病死。

また、明治二十二年ごろから夜学校教育が興り、三輪伊兵衛が山口夜学校（後に今道夜学校と改む。）、杉山秀男が山口夜学舎を、同二十五年には西順太が鴻東夜学校を山口に、同二十七年入江弥作が徳山夜学校を、同二十九年多田守家が見島夜学校を開設したことも注目に値いする。

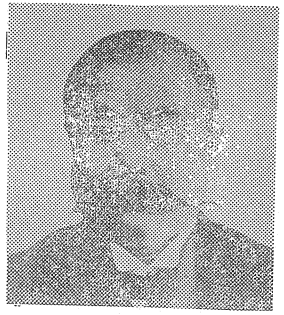
明治二十七年厚狭郡厚西に興成義塾を開いた粟屋活輪は、厚狭毛利家の医者の家に生まれ、初め協興学舎・華浦医学校に学び、ついで東京大学医学部予科に入ったが、帰郷して興成義塾を創立した。同三十九年財団法人の私立興風中学校を興し、同四十三年まで校長となり、ついで門司・大阪・福山等の各学校に教授し、昭和二年隠退、同十二年美祢郡伊佐で病死した。七四歳。

右の外、特異な学校として明治五年創立の大附教校がある。これより先、同二年山口端坊内に真宗学校があったが、同五年県令中野梧一は山口善生寺住職伊藤無闇らに計って、仏教・神道の各宗派協同の学校として大附教校を興した。同六年右の真宗学校も吸収して明導学寮と呼ばれたが、のち独立して開導教校を建て、また浄土宗も独立して浄土宗第七教区宗学教校となり、曹洞宗もまた独立して明治三十五年に防府に移り、私立曹洞宗第四中学林と称した。今の多々良学園の前身である。

伊藤無閑は宇部出身で、棚井の浄名寺で僧となり、江戸の小石川伝通院に修業し、帰国して豊浦郡粟野の昌泉寺住職となって、大津郡大日比西円寺の法道上人に師事した。ついで同郡菱海の大願寺、萩の報恩寺に転住して浄土宗伝法の道場設立を発起、明治三年山口古熊善生寺に山口講学場を開設した。同五年右の大附教校を創立し、同八年山口性乾院に転任、同寺は山口浄土宗中教院となり院長を兼ねた。同十年本山に入り、同十二年萩に隠棲したが、同十七年七六歳で病死した。

(7)社会教育　秋吉台の聖者と呼ばれた本間俊平は、新潟県の出身であるが、明治三十年キリスト教の洗礼を受け、同三十五年山口県秋吉台に移住し、大理石加工作業所を経営するかたわら、社会教化・成人教育に精力的な活躍をした人で、次の佐野図書館長とは親友であった。昭和六年に秋吉台を去り、各地を巡回したのち、同二十三年神奈川県川崎市で病死した。七六歳。秋吉台に葬る。

山口県内図書館の発展を基礎づけた佐野友三郎は、群馬県出身ではあるが、秋田県知事から山口県知事となった武田千代三郎の招聘に応じて、明治三十五年秋田県立図書館長から山口県立図書館の初代館長となった人で、山口県図書館協会を組織して市町村立図書館の設置を促進させ、また図書館界に多くの新機軸、例えば「公開書架の実施」「児童室の経営」「十進分類法の採用」「夜間開館の開始」「巡回貸出文庫の設置」「郷土資料の収集」等々を開いて図書館事業に尽した功績は大きく、当時山口図書館は日本



佐野友三郎

図書館界のメッカ的存在であるとまで評価された。大正九年に在職中神経衰弱にかかり自殺した。五六歳。

一方、山口博物館は作間久吉が初代館長で、明治四十一年皇太子行啓を記念して、山口県教育会私立の防長教育博物館が大正元年に開館された。同六年県立教育博物館となり、昭和二年大典記念県立教育博物館と改称した。作間久吉は萩藩士の家筋で、西部私塾に学び、ついで県庁の雇となり、明治二十四年防長新聞社へ入社して同二十八年主筆となり鴻東と号した。同四十四年山口町長に推され、大正四年まで町政を任された。博物館長となってからは、その経営に苦心し、博物館事業の基礎を作って昭和七年退職、以後著述・読書の生活をして同十七年七七歳で病死した。

山口育児院の創設者荒川道隆は、宇部の野村家から明治三年萩の洞春寺（後山口移転）に入って僧となり、同十一年に鎌倉の円覚寺で今北洪川に師事し、ついで萩の荒川家に入籍、同三十一年から山口の洞春寺住職となった人で、専ら社会救済事業に従事し、同三十七年寺内に山口育児院を設立して院長となり、日露戦争の戦災孤児を収容した。のち事業を拡張して一般窮民孤児を収容し、昭和二年財団法人組織に改めたが、間もなく五八歳で病死した。

山口県盲唖教育の恩人である今富八郎は福岡県出身の盲人で、下関に来て按摩鍼灸を開業していたが、盲人教育の必要を痛感し明治三十八年自宅に今富盲学館を開設した。ついで入館希望者も増大したので、聾唖者も加えて同四十年に下関博愛婦人会経営の私立下関博愛盲唖学校と改め初代校長となった。昭和十四年八二歳の高齢で病死した。これは下関の県立盲学校及び山口の県立聾学校の前身である。

下関の了円寺住職丘道徹は薫育寮を設立して感化教育を実施していた。県では明治四十二年この薫育寮を山口県感化院に代用し、大正元年代用感化院を廃して県立育成学校を創立、専任校長は来栖守衛であった。なお、丘道徹は安政六年了円寺内に生まれ明治十四年住職となり、同二十一年赤間関監獄教誨師となった。同二十三年から免囚保護事業を開始し、同三十二年出獄者保護院（薫育寮）男子部、同三十三年女子部を建造した。同四十二年から大正元年まで山口県代用感化院薫育寮監を命ぜられた。昭和十八年ごろ病死し、下関保護院は閉鎖された。

（四）教育実践者

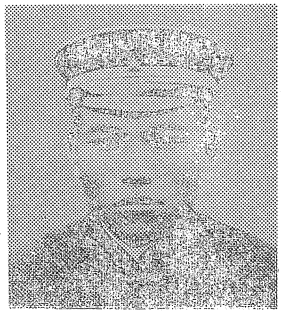
下関の片山寅一郎（高岳）は本姓蔵重氏、鈴木高輔に国学・和歌を学び、また江戸の平田鉄胤の門に入った。ついで長府藩儒の

片山家を嗣ぎ、三田尻講習堂の助教となり国典を教えた。下関の豪商白石正一郎は片山の学風をしたい、その女婿としたので下関へ移った。そして奇兵隊に招かれて隊士の教育に当たった。明治五年学制頒布の趣旨に感じ、早速資金を集めて小学を設立して教員となり、また同六年竹崎町と阿弥陀寺町とに学校を設立したが、病気にかかり翌年四五歳で死去した。

山口の高橋真作（漱石）は萩藩士で、山口講習堂の上田鳳陽のあとをつぎ、文久三年山口明倫館に小学舎が設けられた時、その教諭役となって専ら小学生教育に従事した初等教育の先駆者であった。明治十二年山口後河原に沈流塾を設けたことがあったが、同二十四年八一歳の高齢で病死した。

幼稚園経営のコルテス夫人はアメリカのニューヨーク州ビンガムストンの人で、ミシガン神学校を卒業してコルテス博士と結婚し、明治二十一年来朝して各地のキリスト教伝導に当たった。同二十七年ごろに山口教会堂に来て、同二十八年明星幼稚園を創立した。当時は岩国（明治十八年創立）・山口今道（十九年）・鴻東（二十年）・豊浦（二十五年）の四つの公立幼稚園があったが、私立としては県下に最初であった。夫人は約二年間園長をつとめ、帰米して昭和十二年七六歳で病死した。なお、四代園長のウエルス夫人は大正三年から昭和十五年までの二十七年間在任して幼児教育に尽した功績は大きいものがある。

次に、天才的な教育力を持った青年教師として、生徒の信頼を集めた水井文吉は、都濃郡四熊村の出身で、郷里の小学校の代用教員から、明治十八年山口師範学校へ入学したが、一年余で中退して広島県江田島海軍兵学校に勤め、同二十九年山口尋常中学校へ転勤、同三十一年福岡の修猷館に移ったが、同三十三年三二歳の若さで病死した。



水井文吉

山口県の理科教育を開拓し、家庭改善の指導に当たった重富亀一は、山口吉敷の出身で、明治二十年東京小高師を卒業後、鹿児島・熊本両県の師範学校に勤め、同二十八年山口県師範学校の教頭となった。大正四年退職したが、在職中は物理化学の研究に没頭し、退職後は山口県教育会講師として本県の科学教育振興に尽した。昭和八年病死、七一歳であった。

直接の教育者ではないが、山口県教育会の初代民間会長として県教育界の発展に尽した吉川安平は、三田尻の周陽中学校を卒業し、海軍兵学校・海軍大学を経て日露戦争に参加し、大正十二年海軍中将に進み、横須賀鎮守府司令長官を最後に、昭和四年予備役となって佐波郡右田に帰っていたが、山口県教育会に民間会長を選出する声が起こり、同七年就任することとなった。在任中に、昭和九年室戸台風の時、五児の生命を救って殉職した吉岡藤子訓導と、御真影を守って焼死した阿部三郎校長の両氏の銅像を

建設、吉田松陰全集・村田清風全集・山口県教育史等の出版事業、その他造林事業や映画教育・水泳教育等に努力し、同十四年辞任した。同三十四年防府で病死、七七歳であった。

吉岡薫子訓導は厚狭郡厚南村の出身で、昭和三年には豊浦郡岡枝小学校に勤めたこともあり、結婚後夫に死別し、苦闘の生活から苦労して裁縫専科正教員の免許状を取って同八年から大阪府豊津尋常高等小学校に奉職した。翌九年九月二十一日に近畿地方を襲った台風のため校舎が倒壊した時、五児を抱いて生命を救ったが、自分は殉職した。時に二六歳であった。

阿部三郎校長は吉敷郡平川の末広家から美祢郡綾木の阿部家の養子となった人で、山口師範学校農業教員養成所を卒業し、平川小学校を振出に、美祢郡桃木小学校長から同郡大嶺の城原小学校長となった。昭和十年三月四日同校からの出火を知り、猛火の中を奉安室に駆付けたが、御真影を捧持したままの姿で灰燼の中から発見された。時に四四歳であった。

（五）本県出身の学者

山口県でも、他県同様多くの学者が輩出しているが、時間的に充分な調査が出来なかったので、物故者中から筆者の気付いた学者若干名を五十音順に紹介するに止めたことを、記述に当たりお断りして置きます。

眼科学者市川清は防府出身で、京大医学部教授（医博）となり、昭和十二年六〇歳で病死した。法律学者岩田宙造は熊毛郡立野出身で、弁護士（法博）から戦後の司法大臣となり、国民協議会初代会長となって昭和四十一年九〇歳で病死した。幕末外交史で知られた大塚武松は岩国出身で、文部省維新史料編纂官となり、昭和二十一年六九歳で病死した。植物学者大野直枝は徳山出身で、明治四十三年東北帝大札幌農科大学教授（理博）となり、大正二年三九歳の若さで病死した。ドイツ文学者片山正雄は佐波郡八坂出身で、九大文学部教授を最後に昭和八年五五歳で病死した。鉱業学専攻の桂弁三は萩出身で、東大工科大学教授（工博）から工学院大学理事長・東大名誉教授となり、昭和三十六年八七歳の高齢で病死した。日本のマルクス主義経済学の先駆者河上肇は岩国出身で、京大教授（法博）となり昭和二十一年六八歳で病死したが、貧乏物語・資本論入門・自叙伝などは有名な著述である。経済学者河田嗣郎は玖珂郡伊陸出身で、大阪商科大学長を最後に昭和十七年六二歳で病死した。教育学者玖村敏雄は徳山出身で、ペスタロッチ・吉田松陰の研究者として知られ、福岡教育大学長となって昭和四十三年七二歳で病死したが、遺蔵書全部が山口県立山口図書館へ玖村文庫として納められた。電気工学の権威清水勤二は佐波郡出身で、文部省科学教育局長を勤めたことがあり、名古屋工大学長（工博）を最後に昭和三十九年病死した。夏目漱石の「吾輩は猫である」の津木ピン助こと杉敏介は玖珂郡米川出身で、一高校長であり、毛利公爵家の両公伝編纂所長でもあったが、戦後帰郷して昭和三十五年八七歳で病死した。日本の図書館学の先駆者田中稲城は岩国出身で、東大教授兼東京図書館長

から帝国図書館長を長年勤め、大正十四年七〇歳で病死した。日本最初の獣医学博士時重初熊は都濃郡戸田出身で、農科大学教授、農商務省獣疫調査所長となり、大正二年五五歳で病死した。また、山口県最初の農学博士畠永寡黙は、長府出身で、朝鮮総督府中央試験所長兼京城工業専門学校長となり、昭和十年七三歳で病死した。山口の吉敷出身の成瀬仁蔵は明治二十七年米国留学から帰朝して日本女子大学の創設を企図し、同三十四年開校して校長となり、一生女子教育に専念したクリスチャンであった。大正八年六四歳で病死した。英文学界の偉材といわれた原田治郎は大島郡屋代出身で、名古屋高校兼八高教授から東京国立博物館（美術史・文博）を最後に昭和三十八年八六歳の高齢で病死した。次は、学者というより救癩の父として知られたは光田健輔、防府出身で、長島愛生園長（医博）となって半世紀にわたる救癩事業をつづけ、文化勲章を授賞したが、昭和三十九年八八歳で病死した。最後に、歴史学者渡辺世祐は萩出身で、東大史料編纂官、毛利公爵家三郷伝編纂所長等を勤め、明治大学文学部教授（文博）として昭和三十四年八五歳で病死した。

× × × ×

以上、二回にわたって山口県教育の発展に尽して来られた人々の、ほんの一端を紹介して来ましたが、近代教育をささえた山口県の教育者は、みな、一人一人を見つめる時、その出身地の深い伝統の中から育った人々であることを改めて痛感しました。

（山口県文書館専門研究員）

第40回

人物を中心とした

徳島県教育郷土史

金沢　治

三宅雪嶺は「阿波人にふさはしからぬ二人かな大塩平八・岡本韋庵」と詠んでいる。

明治維新の徳島県（阿波の国）教育史は、まずこの岡本韋庵にはじまる。

岡本韋庵が明治維新を迎えたのは彼が三十歳の年で、彼はその三年前――慶応元年（一八六五）二十七歳にしてカラフト全島の海岸を踏査し、カラフトの北端ガオト岬に天照皇大神宮の祠を建てている。彼の満身は北辺の防備と北海道・樺太・千島の開拓移民に燃えていた。

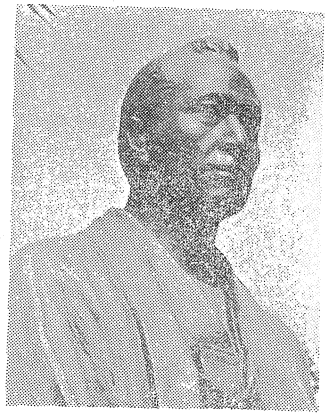
不幸にして、時の外交方針は樺太・千島の交換となり、彼の雄図は空しく挫折されたが、それでも挫けずに私費をはたいて東洋新報を発刊し、著書北蝦夷新誌・豪北日誌・北門急務以下既刊三十四部百十余巻、未刊二十余部、こんどは千島義会を起こし、五十三歳千島いり、苦心して用意した船が破船したり万難に出あったが国会に千島開拓請願を提出した。これも衆議院で否決された。支那へは四回も渡っている。

明治二十七年五月徳島中学の校長に迎えられた。ただし彼は月給をもらって学校の中だけを治める校長さんではなかった。在職三年後、台湾総督府国語学校教授となった。

明治三十七年六十六歳で、日露戦争の結果をみずに死んだ。

反抗精神は青年の特権である。しかし現代の若者の反抗的活動は一体何を目あてにしているのか。明治の夜明けに生きたわが岡本韋庵の憂国の熱情と開拓精神とはいまに県民の中に流れている。

いまひとりは賀川豊彦である。



岡本韋庵

彼は徳島市の北八キロ板野部大津（鳴門市）の豪商の家に生れたが年少にしてキリスト教に徹し、現在のキリスト教がキリストの復活を来世に説いているのに対し、彼のキリスト教は現世に物心一如の天国を実践することを念願し、神戸の貧民窟に死線を越えて神の国を実践し、消費者の協同購買組合を創案し、労働者のために労働組合運動を援助、国境を越えて人類の平和を唱いたことは五十代以上の諸君の記憶に新たなるところであろう。

この二人はいずれも、阿波人の根性がややもすれば保守的で安全第一であるのに対し、全く異質であるが、明治百年を通じて県民精神に一抹の爽気を注いでいる。

幕末まで学校教育は十分のための教育と医者を養成するための教育であった。

藩には長久館という学校があり、長久館は明治二年（一八六九）八月徳島城西の丸に再興されたが、それは当時までつづいていた医師学問所、寺島の学問所、洋学校などを統合したものであった。

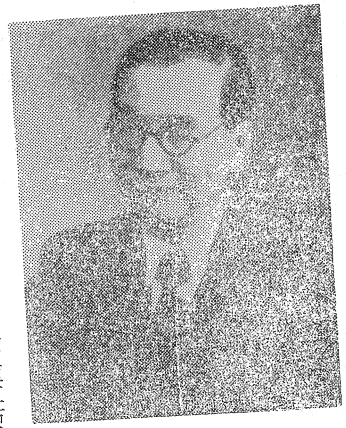
この長久館の解体期に興味ある問題が起こった。

明治四年（一八七一）学制が変わって藩費の医学校は禁止となったが、医学校教授藤本文策・賀川玄奄・興津春機らは同志をあつめ、私費を醵出して好生養舎を結成した。これは県立にひきつがれ明治十三年徳島県立医学校及付属県立病院と改称され、学生は遠く九州、中国から集まった。ところがこの学校もまた明治十九年県費で建てた医学校もいけないという法律が出て、廃校の悲運をみた。後年私立学校不毛の地と呼ばれる徳島県に明治当初にこの意気あるは爽やかな話であり、さらに明治十三年漢法医井上肇堂・筒井珉岱・寺沢道梁・近藤康斎・馬島春栄らは相謀って徳島市西横町に洋医に対抗して漢法専門の徳島済生病院を創設し医師を養成した。その趣意書を読むと日本人には日本人の血がある。これを哺んだものは日本の国土であり租先である。洋医はこれを一顧の価値なしとするというのである。たいじ、当局は医学機関として認可せず明治十七年閉院した。

さて、県下には上述の長久館のほか一般庶民の学校として私立三百七十七、寺子屋四百二十二があり、二万四千人の子供が学んでいた。

そこへやぶから棒に明治五年の西洋直訳の学制ができ、これを実施にうつしたのは静岡県沼津からやとって来た山田楽である。

当時徳島県は全国屈指の富裕県で小松島の大資本家井上三千太は沼津に進出し、独力で沼津に小学校の敷地建物、設備を寄附している。静岡県は教育の先進県で山田楽が沼津で相当の実績をあげてい



賀川豊彦

たので招いたものであろう。

明治六年一月名東県（当時の県名）は論達を発して右の学制を説明しているがこの草案も山田楽の手になるものであろうし、長久館をつぶし、西の丸に師範翔成学校を建て、東京師範学校卒業生桧垣直右、中島恭平を招いたり、村々に公費による小学校を建てさせるといった劃期的な仕事をしたのはこの山田楽であった。

そういう過渡期を代表する教育者として二人をあげると、まず長久館主流派の伝統をつぐものとして岡本斯文がある。

彼は天保十四年（一八四三）徳島市富田浦町藩の儒者の嫡子として生れた。慶応三年二十四歳で儒者に列し、明治三年東京に遊学、当時県下最高の漢学者である。学制頒布で旧藩主の建物を利用した富田の稚松小学校だけでは、児童が収容しきれなくなったとき、一般住民の寄附により抽楽小学校が建ったがこれは主として彼の奔走によるもので、実に県下民主小学校第一号である。斯文にはこういう一面もある。

斯文は明治十一年創設された徳島女子師範の校長心得、十二年徳島中学校の校長心得、十五年徳島師範学校長並徳島女学校長となった。ところが女子校は教育程度が民度から浮き上っていたので生徒がなくて二十四年の県会で廃止された。そこで彼は私財を投げて「養淑舎」をつくり、明治三十五年文部省が高等女学校令を出して法の力で県に一校は県立高等女学校をおけというまで私立の女学校を経営した。彼は本県女子教育の元祖であり、家門、学力、人格が当時の学校長の第一資格であった。私は彼の晩年を知っているがいかにも漢学者らしい清節の風があった。

次に寺子屋から小学校への過渡期の代表的教育者としては樋口杏斎がある。

樋口杏斎は天保十三年（一八四三）那賀郡櫛淵村（小松島市）に生まれ、家は代々医者、文久三年（一八六二）二十二歳の時、父を失い家の医業を継いだが翌元治元年から医業のかたわら自宅の納屋を改造して家塾「敬義斎」を開き、村の子供のために寺子屋をはじめた。世情騒然たる中に一切そういう問題には触れず黙々として子供のために基礎教育をたたきこんだ。その教え方はスパルタ教育であった。

わたしは教育を天職と思っているが祖業をやめては先祖に申しわけないと病人のためには深夜数キロの山道を歩いて往診し、医者は薬屋でないといって診察料や薬代には答えなかった。

教育が初・中・高と段々程度が上がると、自分の学力の不足を痛感し、十キロの道をあるいて徳島の阿部有清について数学を勉強した。（阿部有清は当時の日本的数学家である。）大正昭和の国史学者喜田貞吉が彼に背おわれて富岡（阿南市）まで試験をうけにいった

という話は有名な逸話である。

明治三十四年六十歳で櫛淵小学校の校長になった。大正六年樋口杏斎が病床についた時、村民は金をあつめて見舞として贈った。

明治十九年頃の日本は富国強兵主義教育の目標を鮮烈に示し、それは師範教育に顕著にあらわれたことは全国同様である。再来徳島県教育は徳島県師範学校色一色に塗りつぶされる。

師範学校は公費で貧農の子弟を吸収し、兵役免除で豪農旧家の長男を集めた。競争率はいまの東大並であった。その卒業生に有井源一がいた。有井源一は大正二年徳島県師範学校を卒業し、美馬郡半田村の久保尋常小学校に赴任した、体軀頑強・柔道・水泳・書道に秀でた。直情経行、極めて正直、右へ向けといわれたら一日でも右へ向いているという型の人である。当時の若い教員には二つの仕事が課せられている。一つは子供を教えること、他の一つは放課後村の青年を指導するということである。日露戦後戊申詔書が出たりする時勢で世の中はようやく軽佻浮薄、思想問題もそろそろ芽を出そうという時代、文部省は青年の補習教育に力をいれ、県学務課でも補習教育を鼓吹していた。

有井源一は補習教育に顕著な成績をあげたがそれは点数をかせぐ為では毛頭なく、むしろ彼の性格からであった。

単身赴任ではあり、体力はあり、彼は書道と柔道とをほんとうに一生けん命に土地の青年に教えた。

彼の逸話がある。彼の時代は出席督励ということも一つの重要な仕事で、当時（大正十年代）彼は美馬郡半平という山村に勤めていたが放課後長期欠席児童のために子供の家まで出かけていって出張自宅教授というのをした。（こうするので、彼の学級は毎月出席歩合は一〇〇パーセントである）

彼は空腹をかかえて六キロほどの山の夜道を下りかけた。まっ暗で通ったことのない道である。曲りかどでふみ外して崖をころげおちてしまい気がついてみると朝であった。

また、彼が吉野川の対岸に勤務していた時の事、吉野川は夏秋の交、大洪水が出る。川幅が五〇〇メートル位になることが何度かあり、船頭は危険だから渡船をとめていたが、彼は子供をあそばせるからと頼んだが船頭は応じない。よしとばかり洋服を頭にくくりつけて濁流にとびこみ二キロぐらい流されたが目的は達した。

樋口杏斎、有井源一、こういう小学校の教師が明治—大正—昭和戦前の小学校教師像である。

しかし、彼のような地味な素朴な教員よりももすこし華やかな教育が大正・昭和戦前三十年間を風靡した。その渕叢は男女師範学校の両付属小学校である。付属小学校は師範学校生徒の教育実習場であると共に新教育の実験場である。大正初期以来東京高師を中心として教員の中にもジャーナリズムが盛行し、徳島県でもこれに呼応して盛んに××主義を標榜する新教育論が唱えかつ実験せられた。藤本繁彰、妹尾芳太郎らは男付属の総師、東倉正衛、水田房次郎などは女付属の総師であった。

彼等は年々のように新しいスローガンを掲げ、秋冬期大発表会を開き、当日は全県下の学校は何とか工面してこの発表を参観しなければ時代におくれるという概があった。

したがってそこの訓導たちは年ならずして県下の大校長となり、付属閥なるものが生れた。

中学校の教育が大学の予備校であるという現在の性格は、明治ではまだまだなく、高等普通教育というものは当時の社会実態と遊離したもので中学校の卒業生ははけ場がなかった。

そこでいわゆる高等遊民が出来たわけだが、この高等遊民が大正の自由主義を生み民本主義となり日本人が太平洋戦後の政治経済の大革命に耐える基盤となったもので、敗戦後混乱は生じたけれどもともかくも明治維新のような大混乱にはいたらなかったことを思うと世の中というものは不思議なものである。

しかし、中学校の教育の中ではそういう自由主義は校長に忌避せられ、自由教育など口にも出せず、永年勤続の優良教員は質実剛健・漢学者風の人が多かった。

その代表は岡本由堯三郎であろう。

岡本由堯三郎は岡本斯文の女壻である。岡本塾を出て、明治二十一年十九歳の冬大阪の藤沢南岳の泊園書院に学び、さらに二十四年東京に進んで明治法律学校（いまの日本大学）に入った。明治二十九年から昭和五年まで徳島中学（城南高校）に勤続すること三十四か年、資性高邁、一種のユーモアがあり酒をたしなみ、詩書をよくし、書斎を対南と号し、多くの漢詩文の愛好者のメッカとなった。その詩と書は父午橋のとともに県下あまねく旧家の愛蔵するところである。

高等逸民の公子たちも岡本先生の前にはあっけなく浄化され、旧徳中（城南高等学校）一千の学徒はまったく先生の凛乎たる威厳に服した。

一方、中学校へゆけぬ青年のためには小学教員による補習学校が出来たが、さらに明治三十七年県立の工業学校と農学校が出来た。

（商業学校は明治四十二年）

当時の空気としては職工に学校教育をすることは無駄である。生意気で役に立たぬ、徒弟教育にかぎる。農業などは三年や四年で、教室で黒板で教えられるものでない。風土と経験が第一である。商業は簿記や経済学で動くものではないという世論であった。

しかし、実業学校もおそまきながらつくられ第一代の県立工業学校長には染織技術家吉田佐次郎が迎えられた。徳島県は日本有数の機業県であり、その製品は朝鮮、満州、中国へ積み出されていた。したがって彼は県技師を兼ねた。すなわち工業学校は、学校と試験場と商工会議所顧問とを兼ねたのである。彼は明治四十五年六月四日文部省から表彰せられたが、同時に阿波染職同業組合から「君、明治三十七年四月県立徳島工業学校長として来任せらるるや、本県技師を兼ね、我織業の今日の如く改良発達を致したるは君が終始かわらず、指導啓発の賜なりと信ず」

という彰徳状をもらっている。再来、昭和の戦前まで工業学校長には代々専門の技術者が迎えられその専門技術をとうして県下工業の発展に直接受与したことは本県工業史を語る上に忘れてはならぬことである。

ところで女子教育の方は県立高等女学校は上述の通り廃校になったが、さりとて明治も日清戦争のころになると、娘を徳島市へ出して町の空気にも触れさせ、行儀、作法、裁縫、家事も一通りは教えておきたいとう需要が澎湃として村々にあった。この要求にこたえたのが村崎サイ、佐香ハル以下所謂私立裁縫学校の設立である。

村崎サイが明治二十八年徳島市のどまん中、徳島駅の東二〇〇メートルのところに裁縫学校を建てた時、女の子が袴をつけて登校するのを見て市民は剣道の道場が出来たのかと思ったという。村崎サイの教育理念は女にも自力する力をつけねばならぬというのである。果して名声噴々。

大正十三年実業学校令が出ると徳島女子職業学校、昭和十九年創立五十周年の日改めて村崎女子商業学校とした。今日の徳島女子大学、徳島女子高等学校の前身である。彼女は後年リューマチで手足が不自由になっても全校生徒の成績物の評点は自分の眼で見た。彼女が病床にあるの時、近親のものがここは生徒の足音がやかましいからと静かな家敷へ病床をうつそうとすると「わたしはあの元気な生徒の足音をきくのがうれしいのです。どうか階段の下へ持っていっておくれ」といったそうである。

また彼女は授業料を自分の手で受けとった。「この娘の父母の心がじかに私にひびくから」というのである。

佐香ハルは武家の出、美古は藩の御絵師である。清廉高雅、何ともいえぬ上品さとつつましさがあった。

佐香ハルは結婚したが破鏡、二十六歳で東京に出、堀越和洋裁縫女学校に学んだが、卒業するとすぐ母校の教員に採用され、翌明治三十六年十月東京神田三崎町に和洋裁縫専門学校を創立した。三十歳の秋である。大妻ユタカ（大妻女子大学長）女史などもその頃の生徒であった。

二年の後、徳島市の有志に招かれて帰県、徳島市幟町の自邸を改造して私立佐香和洋裁縫専門学校を東京から移した。村崎サイの学校運日にあがり、女史は一代に二十数回棟上げをした。大正十三年（一九二四）実業学校令によって中等学校となり、昭和五年（一九三〇）には市民の興望によって私立の高等女学校を併設した。徳島市に、もう一つ高等女学校をつくってほしということは市民の強い要望であったが市長も市会議員もよう踏切れなかったのであるが、やってみると成績上乗たちまち毎年三学級を募集せねばならなかった。佐香高等学校の前身である。

さて、県立高等女学校の方は明治二十四年廃校以来、明治三十五年まで空白時代がつづく。そしてやっと明治三十五年徳島市に県立高等女学校が出来たことは上述の通りであるがここに新しい女学校経営者があらわれた。それは高津半蔵である。

高津半蔵は香川県大野原の産、高等小学校を出ただけで検定でたきあげて小学校長から香川県視学を勤めていた。

三好郡辻町に農学校がつぶれて県立の実業女学校を建てることとなった。その時校長に迎えたのがこの高津半蔵であり、彼を発見したのは時の三好郡視学藤岡真兵衛である。

当時高等女学校生徒といえば紫の袴を胸高にかけ、パラソルに靴をはいたお下げ髪も香ぐわしい平安貴族の姿を描く通念の中に、彼は鍬を学用品とし、もんぺを作業着とし、糞尿のたごを生徒に担が

せた。

彼は独学であったが実に驚くべき博学でかつ直ちにこれを実践した。また、子供や父母や部下に対しても、上級当局に対しても人の心をつかむのに一種の神秘力を有し、講演も会話も実にうまい。父母は入学式の日にとりこになり、生徒の事はいかなる生徒も家庭のすみまで知悉して相談に応じ、気を配って徹底的な教育をした。彼が昭和五年に建てた学校図書館は鉄筋コンクリート三階建、図書搬送のエレベーターを備えている。その蔵書は和漢洋、宗教、教育、家事、裁縫、動物、植物、工業、商業、農業、園芸、深羅万象に及び毎月フランスとアメリカの家庭雑誌をとっているし、いまの朝日新聞の縮刷版は創刊から揃えていた、書架は鉄製、購入、整理、配架の整然たることいまの県立図書館に遜色はない。

しかも、彼はことごとくこれを閲覧し、必要な箇所はシルシをつけて職員や生徒に回覧させた。彼はこの図書館を三好婦人図書館と名づけ、三好全部の婦人教育の大本山としようと意気ごんだ。

特に世間を驚かせたのは彼の園芸や牧畜に対するやり方である。彼は三ヘクタール余の実習地に最新の知識と技術を導入して花梨・野菜・牛・豚・羊・山羊・鶏・蜂を養い、バター・チーズ・醤油・味噌・ソースまでつくり、養蚕もした。

トマトやキャベツを郡内に普及したのは彼であり、グリア・チューリップ・シクラメン・フリージャー・グラジオラスが村々の庭先に見られるようになったのも彼の力である。

その頃(大正―昭和五年)県立学校でもミシンは四、五台しかなかったが彼の学校は十数台もっていた、かと思うと彼は中々のハイカラで洋食普及に力を入れ、議食室という貴賓室まがいのものをつくって生徒たちを喜ばせていた。茶・花・琴・ピアノその他遊芸に良教師を迎えたことはいうまでもない。小原因芳は「日本の新学校」で彼を招介しているが、私は徳島県の女子教育は彼の力で方向を変えたと思っている。

また、社会教育者としては井上万吉を挙げる。彼は天保九年勝浦郡西須賀村(徳島市勝占町)の庄屋大平家に生まれ、明治七年同村の御番人井上家を継いだ。温厚で篤実で、清廉で勤倹であった。明治七年三十六歳で副戸長にあげられ、大正九年病歿まで実に六十年の長きにわたる村長さまである。

彼は村をよくするには子供をよくするにありとし、尻打の大松尋常高等小学校を思い切って広大で宏壮な建物にした。理科の設備には自費で京都の島津製作所へいって実験道具を買って帰った。明治三十九年(一九〇六)児童の就学率四一位、大松川の出水で児童が通学出来ぬのを解決するため長さ八〇メートルの橋をかけた。村長はこの橋を通学橋と呼んだ。明治三十五年、当時県外にいた平岡長太郎をわざわざ出向いて三顧の礼をもって校長に迎え、毎日早く学校へいって自ら校門のあたりを掃いて水を打ち、そこへ校長が出勤する。「お早うございます」と村長からさきにいう。自分で招いて来てもらった校長さんだからこうするのがあたり前であり、校長も別にこれに気がねする風もなかった。

その学校は明治四十三年二月十一日、時の文部大臣小松原英太郎から日本一の小学校として表彰された。

もう一人は、柏木直平である。柏木直平の冗名(あだな)は「白風呂敷」という。徳島県師範学校簡易科を明治三十七年卒業、郷里阿波郡五町(阿波町)小学校の教員となった。彼の主義は主知主義とでもいうのか、人間を高くするのは知識を博くもたせるにある。日本はせまい。子供の理想は海外発展につながるべきである。そのためには海外物産の実物をみせるにある。かくて彼は授業の余暇全時間、全財産をはたいて日本国内はいうまでもなく台湾・樺太・千島・朝鮮・満州・中国をくまなく歩いた。そして例の大きな白い風呂敷に珍らしい教育参考品を何もかんでも蒐集して来た。筆者も少年時代その白風呂敷のお蔭でいままで標本だけしかみていないので石炭というものは三センチくらいの小さいものかと思っていたらあんな大きな炭盤であることを知った。

この事はひろく県民の賛助を得て各小学校を巡回展示し、また徳島市滝の山に五町文庫というすばらしい博物館を自力で建てた(戦災焼失)。

ちょうど日露戦争で日本が海外発展に躍起になっている時で、その展示や講演は年少子弟の心にいい難い強烈な開拓精神を植えつけた。

もう一人は、それは坂本章三である。彼は徳島市富田浦町中屋敷(徳島市富田橋三丁目)河野家の出、旧徳中を出、東京私立国民英学会に学び半人前の英語教師として母校徳中に迎えられ迂余曲折の前半生を送ったが歳五十歳、昭和二年(一九二七)いまの県立図書館長になった。

まず、藩から伝えられ秘蔵していた阿波国文庫三万九百五冊を整理した、巡回文庫、出張文庫、臨海文庫を創案した。講演会・講習会・講座・郷土研究会・童話研究会・渭殿吟咏会等々、彼の図書館活動は戦後アメリカの指導によるものを二十年前から先行していた。

すくなくとも図書館は貸本屋でないことを県民は彼によって実証した。いま県立図書館には彼のレリーフが掲げられている。

次に特殊教育が注意せられだしたのも民間の篤志家の篤行による。その代表者を四人挙げるが、盲唖教育においてまず五宝翁太郎がいる。この人は明治十七年徳島県師範学校を出た人だが徳島市新町小学校に在勤中(明治二十八年)二人の聾唖生が入学して来た。彼は深く同情し、徳島市寺町安住寺にこれらの盲唖生を集め、教職の余暇特別指導をした。この寺子屋式教育が世にいう私立徳島盲唖学校である。この間に彼は盲唖教育には特技がいることを痛感、三十二年京都盲唖学校、三十八年東京盲学校に自費で学んだ。師範学校の寄宿舎の残校をもらって経営したのはこの時のことである。

四十年文部省が盲唖教育を府県に命じたので、彼は師範学校付属小学校に併設された盲唖学校の訓導となり、この仕事に打ちこんだ。大正六年盲唖保護院、八年盲人会、十二年徳島鍼灸会を設立し、盲人の生活安定と団結をはかった。多少あった私財は傾けつくし、彼の洋服は夏一着、冬一着の黒の詰襟、筆者は当時徳島県師範学校の生徒として朝夕彼にあったがペスタロッチとはこういう姿の人であろうと思った。

もう一人は問題児、非行少年少女の父富士居力次郎である。彼は

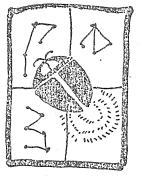
明治二十九年徳島県師範学校を出、小学校教員をしている間つねにいわゆる不良児の身の上に深い愛情を感じた。

明治四十一年内務省で第一回感化救済事業講習会が開催されると雀躍これに参加、終ると後一年になっている恩給年限を抛って私立阿波国慈恵院の感化部長兼孤児部長となった。大正十二年やっと県立の感化施設として徳島市沖洲に徳島学院が出来たが、実は徳島学院は富士居力次郎の個人的情熱の結晶である。

あとの一人は同和教育の父木村和蔵である。

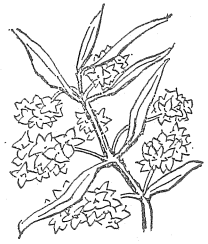
徳島県における同和地区は昭和二年（一九二七）四千二百戸、男女二万三千七百二十八人あった。彼が徳島県師範学校を出たのは明治三十八年であるが大正八年には当時名東郡上八万村（徳島市）一宮小学校長に抜擢された。この通学区は県下で一番著名な同和地区であるが彼は文字通り同和し、寝食を地区の人々と共にした。まず貧困を救い、次に娯楽を与え、青年の心をつかんだ。身の上相談、読書指導、就職の世話、結婚の世話――彼は大正九年三十九歳の若さで病没したがただの一日も家庭的なやすらいの日を送らなかった。彼の葬儀には大津麟平知事がわざわざ焼香に来たのである。

（注　戦後の教育史については紙面の都合で割愛した。）



人物を中心とした

香川県教育郷土史



県花……オリーブ

草薙金四郎
塩田清

一　明治まで

香川県は文化の早く開けたところであって、古来、宗教家、学者、文人、芸術家としてすぐれた人物が多く輩出している。いまこれを近世の教育の面についてみるに高松藩祖松平頼重は水戸光圀の兄であるが深く聖教の学を好み儒学者岡部拙斎および国学者深川公信を水戸より招聘し神道学者猪熊于倉を京都より招聘して大いに教学を振興した。じ来、篤学の藩主が相継ぎいわゆる水戸学の流れが顕著である。二代藩主松平頼常は講堂を建設して藩学の基礎を固くし五代藩主松平頼恭はこれを拡張充実して講道館と改称し後藤芝山を総裁に任じた。芝山はいわゆる後藤点の創始者であって漢文訓読について長く後世の規範となった。その子黙斎のために「庭訓」八条を書いて与えたがそれは家庭教育の資として適切であったので世に喧伝された。芝山の門人に柴野栗山がある。栗山は初め芝山に学んだが長ずるに及び江戸に出でて昌平黌に学び、学成って阿波藩の儒臣として経史を講ずること二十年であった。幕府の召命に遭い再び江戸に出でて昌平黌儒員聖堂取締御用を仰せつけられ文教の中心となり林述斎とともに昌平黌の学制改革を行ない、さらに老中首座松平定信を助けて国政に参与した。寛政異学の禁、もまた栗山の建議によるものであるが、思うに栗山は、考試の学科を朱子学に限ることによって教育の基本を確立し、教育の基本を確立することによって国論の向うところを一にして経世済民の実を上げようとしたのであろう。栗山は古賀精里、尾藤二洲（または岡田寒泉）とともに寛政三博士と称される大学者であったが同時に詩作と文章に卓抜し、示塾生、進学喩、などは後世に長く教科書に採択せられた。栗山は教育の目的を修身斉家治国に置き、ひるがえっては治国、斉家、修身の根本を教育に置いたようである。したがって学者が国政を担当することが理想であり、国政の中心を教育に置くものの如く看取せられる。松平定信のもとに国政に参与したことは栗山にとって大きい理想の実現であった。

香川県は高松藩、丸亀藩、多度津藩の三藩によって統治せられていたのであるが高松藩は徳川御三家に次ぐ親藩として東讃に十二万石を領し、丸亀藩は佐々木源氏の流れ京極氏が六万石を領して西讃を統治していたが京極高通が一万石を分封されて多度津に居館を構えた。

丸亀藩主京極氏もまた代々好学の人が相継いだ。したがって一藩に学風が高揚せられ二代京極高豊の時に井上通女が出ている。井上通女は朱子学者、井上本固の二女であるが幼より賢明の名高く十五歳の時処女賦、深閨銘を作って人びとを驚かせた。二十三歳の時、藩主高豊の母養性院に従って江戸に出で、居ること九年であった。学進み詩文に練達して諸侯より招へいされることしばしばであったがみな謝絶した。将軍綱吉に進講するに及んで名声一世に高く新井白石、林大学頭、跡部光海等当時の名士が交友を求めた。藤堂公はその容姿を評して源氏物語中の女三の宮と称し、貝原益軒はその才識を評して嵯峨帝の皇女有智子内親王以来の人なりと称し、室鳩巣は、男子に候はば英雄に相成るべきに惜しきことなり、と言った。帰郷して三田宗寿に嫁して三男二女の母となった。三男義勝が最も賢明であったがその家庭教育はいわゆる早教育であって幼時の躾を厳にした。義勝は八歳の時、五経と文選を誦して生涯これを記憶した。十五歳の時、槍術と剣術とを習い、二十一歳の時甲州流軍学を習い免許皆伝を得た。文武両道をもって藩に仕え、藩学の教授たること三十三年間であった。義勝はよく母の教誨に従い、母子二代にわたっての学者であり教育者であった。五代京極高中は藩校正明学館を充実整備して儒学、国学のほかに武術、砲術、練兵を教授して八歳の者より四十九歳の者までを入学せしめたので来りて学ぶ者多く一藩の学事は大いに振興した。六代京極高朗は琴峯と号して自らも漢詩を作り琴峯詩集四十冊がある。

多度津藩には自明館があって十分庶民ともに入校を許し漢学と皇学を教授した。

以上はいわゆる藩学にかかわるものであって朱子学派であるがこのほかに在野の学者もまた多かった。平賀源内は和漢洋の学に通暁して奇才縦横の人であった。火浣布、寒暖計、エレキテルを作り、陶器を焼き、油絵を描いた。本草学に関するもののほか著述が多い。中山城山は博学宏辞の人であって著書七十余冊あり、門人が多かった。門人の中で藤沢東畡が最もすぐれていた。東畡は城山について古文辞学をきわめ業成って大阪に出でて家塾を開き、勤王論を鼓吹した。東畡の子、南岳もまた父の学を継いで門人に教授した。三土梅堂は片山冲堂に学び漢文と詩学に達し各地に教授した。後の文部大臣三土忠造の岳父である。日柳燕石は三井雪航の門に学び経学と史学に通じて市井に講じた。家産を蕩尽

して博奕に鞆晦したが彼こそは真底の勤王家であり勤王の学者であった。作るところの詩は詠史を最も得意とし、吉田松蔭は好んで燕石の詩を朗誦した。かの松下村塾においては毎回授業の始めに燕石の詩を輪番にて高誦せしめたというからその影響は大きかったと思われる。燕石の交友は天下に広く高杉晋作、桂小五郎、久坂玄瑞、河野鉄兜、藤本鉄石、森田節斎等熱血の人が多かった。明治元年、會津征討の軍に加わって大総督仁和寺宮のもとに史官となったが熱病を発して柏崎に没した。林良斉は多度津藩京極氏に仕えて家老であった。藩学に教授するかたわら弘浜書院を設けて子弟に教授した。良斎は大塩平八郎の門に陽明学を学んだが病弱のゆえに天保の乱に参加することはなかった。河田迫斎は江戸に出でて昌平黌に学び昌平黌儒員となり将軍家定に進講した。ほかに国学者、神道学者、和算学者等多数の学者が輩出してあるいは郷土の藩学と私塾に教授し、または出でて中央の教学の中心となるなど常に清新なる学風が中央と気脈を通じて流れていたのである。一方においては村里の庄屋、僧侶、浪人等いわゆる手習師匠による寺子屋教育もまた隆盛であって庶民教育は広くまた厚くゆきわたっていたようである。かくして明治時代の新教育の基盤はすでに準備が整えられていたものということができるであろう。

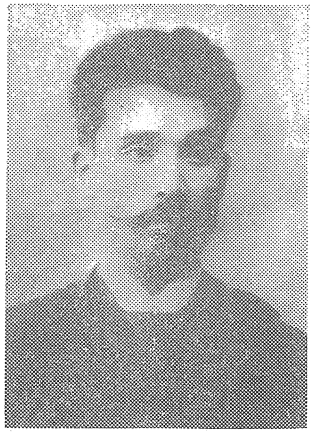
二　明治時代

1　藩学と私塾

慶応四年九月に改元されて明治元年となったが、教育のことはまだ前代の名残りをもち、藩学と私塾と寺子屋と明治政府による新しい学校とが併存したのが明治時代中期ごろまでの実情であった。高松には講道館があって皇学、漢学、洋学について教授し教長六名、教授十名、助教六十三名の指導によって一千八百名の生徒が在学した。明治三年に学制を改めて易、天文、習字、算学の諸科を加えた。山田純吉外二名を英国に留学させた。講道館は明治五年の学制発布によって高松学校と改称し、七年には成章師範学校と改編されて小学校教員養成の学校となりさらに香川県師範学校となった。高松藩主松平頼聰は講道館の経営に努力し、高松小学校創設については亀阜別館を開放して提供したり金一千五百円を寄付するなど教育のために尽瘁した。丸亀藩には従来の正明館のほかに敬止堂が創設されたが間もなくこれを合併して明倫館とし皇漢の学を教授した。多度津藩には自明館があったが明治四年に学制を改めて書道と撃剣を加えて。文武館と称した。

一方には民間の学者による私塾と私学校の経営は依然として盛んであった。高松の明善塾は文政十年に山川遜水が創設したものである。遜水は儒学はもとより、算学、占筮、測量術、陰陽道に通じ塾生に教えて倦むことなく明善塾主たること四十年に及んだ。藩主頼恕の時に講道館教授を命ぜられた。明善塾は遜水の子、南岡に継承され、南岡の女婿波次によって継承されて、明治大正昭和を経て明善短期大学になった。盈科義塾は黒木茂矩の創設によるものである。茂矩は秋山惟恭に漢学を、日柳燕石に漢詩を学び勤王の志が厚かった。明治二年に講道館教授となり、のち明治政府教部省の宣教師となった。徳望一世に高く塾生は一千数百

名に達した。茂矩の子、欽堂は東京師範学校講師となり後に高松工芸学校長となって生涯の教育者であった。高松にはほかに栄養塾、静修館、葆真舎、九思義塾、東原学校、大久保英語塾などがあってそれぞれの塾主の人格、徳望、学識によって特色のある教育が実施されていた。屏陽義塾は三豊郡高瀬の人、柳川竹堂によって明治三年に創立された。竹堂は広瀬淡窓の咸宜園に遊学すること多年にわたり、業成って帰郷し、自邸を開いて子弟を集めたが遠近より来り学ぶ者が多かった。琴平の明道学校は明治十年のころ金刀比羅宮宮司琴陵宥常によって創立されたものである。宥常は平田篤胤の神道と皇典学を学んだ。明道学校は修業年限を四年とし常時四百五十名の生徒を収容した。神道と国学をもととして史学、算術、経済、書道、図画のほかに体育と英語を教えるなど特色のある学校であった。教授陣容には特に意を用い、塾長には堀秀成を招へいした。堀秀成は明治政府の宣教権少教正として全



大久保彦三郎

国に教導する大雄弁家であったが東京に言霊社を創立して音義説を中心に語学を研究したことは国語学史上において大きい意義を持つものであった。秀成は明治天皇ならびに皇太后宮に国学を進講した。古川躬行、三井雪航、水野秋彦等等俊秀の教授が多く師弟の間も非常に親密なものがあり、教育効果は大いに上がった。明治二十八年のころまで存続したが県下各地に県立中等学校が設立される影響等もあって廃絶した。坂出の済々学館は鎌田勝太郎の創設によるものである。鎌田勝太郎は三野塾、村尾塾に学んだ後、福沢諭吉の慶応義塾に入学し、業を終えて帰郷し、各種実業のことにつとめた。資産を投じて鎌田共済会を興し、図書館、社会教育館、郷土博物館等を創設して地方の文化と教育に貢献するところが多大であった。その遺業は今日もなおそれぞれに維持され発展している。忠誠塾は大久保彦三郎によって明治十七年に創設された。大久保彦三郎は初め黒木茂矩について学んだが二年の後、東京に出でて三島中洲の二松学舎に入学した。学ぶこと三年にして病み帰郷した。三豊郡財田村の自宅に療養のかたわら忠誠塾を創設して近隣の子弟に教授した。三年の後京都に出でて尽誠舎と改称して再起した。深い学識と厚い人間味教育によって集まる者いよいよ多く、漢学の尽誠舎、キリスト教の同志社と並び称される時代を迎えたのであるが彦三郎は再び病んで帰郷した。明治二十七年四月、彦三郎は三度、志を新たにして満濃村四条に尽誠舎を興した。尽誠学舎はその後、善通寺に移され尽誠中学となり、尽誠学園となり、今日では嗣子直広に継承されて香川短期大学となった。彦三郎の兄、謐之丞は四国新道の建設者である。四

国新道は国道三十二号線として高松と高知を結びさらに愛媛県に延びる国道幹線である。高松の讃岐婦人進徳会長岡内清太によって進徳女学校が創立されたのは明治二十四年である。岡内清太は香川県教育会副会長として多年にわたって会長松平頼寿を助けて会の実質上の推進力となった。進徳女学校は明治三十五年に県立高松高等女学校となり、長く県下の女子教育の府となった。静修学校は古市カネによって善通寺に創設された。のちに実科高等女学校と改称され、県立に移管されて善通寺第一高等学校となった。和洋裁縫女学校は花岡タネによって坂出に創立されたのは明治四十年であった。のちに坂出実修高等学校と改称されて今日に至っている。

以上が明治時代における藩学と私塾ならびに私学校のだいたいの状況であるが、これを要するに明治政府の文明開化政策により、全国的に小学校中学大学と、その学制が整備されつつあったが、一方にはこうした各種の教育機関が普及していたので、県民の教育についての関心と意欲は高まっていたので政府の学校行政とその施策は順調に進行したものと考えられる。

2 学校

明治五年八月、学制が発布され、翌年の学区制発足により全国を八大学区、二百五十六中学区、五万三千七百六十小学区に区分した。香川県は全国八大学区の中の第三大学区に属し、西讃から順次東讃へ四つの中学区に分けられた。各中学区ごとに一つの中学校が設立される計画であったが本県では明治六年に高松の五番町に初めての中学が創立された。校舎はルネッサンス様式で当時最新の建築美を誇った。明治十九年の小学校令の発布につづいて二十三年には教育勅語が発布されて明治時代の学校教育はその学制と施策と方針とを完了し確立した。政治上の大変革と日清、日露の二大戦役を経験し、経済の変動と思潮の激動と、ことに教育思潮の推移には幾多の変転隆替が見られるが、ともあれ明治年間における香川県郷土教育史は隆昌の一路であった。中学校女学校農工商等各種の中等学校が相ついで設立され、明治四十年においては県立が十一校と私立が五校に達した。また小学校は三百四十九校に達し、ほかに高松に盲唖学校、多度津に染色学校、琴平と塩飽島に工業学校、粟島に航海学校、観音寺に三豊実業女学校などが地域社会の要望によって設立された。こうした学校の盛行につれて県民の教育意識も非常に高まり当時の学齢児童の就学率は九十九パーセントであり、その出席歩合は九十三パーセントであった。それは「邑に不学の戸なく、家に不学の人無し」という明治の建学の理想の実現であった。この県民の教育熱の中から生まれた教育者として谷本富がある。谷本富は高松に生まれ十九歳にして高松医学校を卒業し、明治二十年に教育特約生として東京帝国大学に入学し、ドイツ人講師ハウスクネヒトから当時の新興教育思想であるヘルバルトの学説を学んだ。卒業して山口高等学校、東京高等師範学校の教授となり欧米に留学し、特にドイツにおいてはヘルバルト派の碩学に直接の指導を受けるに至り、大いに学業が進んだ。谷本は語学を得意として英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語を自由に駆使して各地の大学に聴講し、また各地に講演したとのことである。帰朝して京都帝国大学の創設と

同時にその教授となった。明治二十八年に「科学的教育学講義」を出版したがこの書はもとよりヘルバルト主義を標榜せるものであって日本における初めての系統的、組織的、学究的教育論であった。そこには第一編教育の目的を論ず、第二編教育の方便を論ず、第三編教育の事業を論ずというが如くいかにも秩序整然と論理が展開されている。この書は全国に普及して広く読まれ、またたく間にヘルバルト教育主義時代を迎えることとなった。明治の教育思潮も初期啓蒙期から福沢諭吉等の教育功利主義時代へ、さらに「幼学綱要」による反動的思想時代を経過して、ここに教育の目的を倫理学に求めて道徳的人格の育成に置き、教育の方法を心理学に求めて五段階教授法を創唱したヘルバルト時代が到来したのであるが、その先駆をなす者が実に谷本富であった。彼は得意の弁論をもって全国に遊説することしばしばであった。その主唱の第一は新個人主義であって自己の尊重と個性の伸長とである。第二は順天主義であって自然に随順する教育と自我の要求に応ずる教育を主張した。第三は自学補導であって注入主義教育を廃して自家発展、すなわち自学自習である。教師は生徒の自学自習を促す補導役であるべきである——というのである。こうした教育論は、現在においてもじゅうぶんに生きているものと考えられるが、当時としては非常に新しいものであって全国的に大きい反響を呼び起こした。そこには旧教育観に対して截然と区別する新しいものがあった。谷本は帰郷の都度、県下の各地で講演したので県民との親近感は強かったが、かつて善通寺第十一師団長であった乃木希典が明治天皇の崩御に際して殉死するや彼は「乃木大将犬死論」を唱えてこれを非難したので県民の驚きは大きかった。間もなくしてから谷本は大学を退官した。その後、大阪毎日新聞社の客員として教育論説、随想録などを発表しまた全国に講演を試みて「谷本富大雄弁集」を出版するなど在野人として活動をつづけた。

松平頼寿

3 香川県教育会

香川県教育会が創立されたのは明治二十二年六月であった。その綱領は、教育および学術に関する講演会、講習会、談話会を開備すること、官庁の諮問に答申すること、教育に関し世論を起しまたは当局に建議すること、などであって、県の学校教育の後援もしくは外郭団体として大きい意義を持つものであった。香川県教育会は明治二十二年から昭和二十二年まで前後五十九年間、前記綱領に従って運営され、その所期の目的をよく達成したのであるがこの会の創立に力を尽したのが岡内清太である。岡内は初代

会長吉田豐文のもとに理事となり、その後六代目会長松平頼寿のもとに副会長となり以後十六年間会務のために精励した。岡内はこのほかに進徳女学校を創立して校主となり、香川県育英会の専務として生涯を教育の事業に献身した。松平頼寿が香川県教育会長に就任したのは明治四十一年であった。以来昭和十九年、逝去の日まで実に三十七年間という超長期の会長であった。それだけに彼はこの事業に精魂を傾けたのである。松平頼寿は高松藩主松平頼聰の子として明治七年に生まれ、早稲田大学を卒業した。その活動は広範にわたったが特に教育に意を注ぎ、人材の養成と教育の普及と後援とを目的として松平公益会を創設した。松平公益会は東京に本郷中学を創立し、松平頼寿が校長となった。郷里香川県においては明治三十八年に香川県育英会を創設してこれもまた頼寿が会頭となり終生に及んだ。香川県育英会は県内の優秀な学生多数のために学資金を貸与し、あるいは東京染井の自邸を開放して上京遊学する者のために玉藻寮を建設して宿舎を提供した。ほかに讃岐会館の建設、表誠館の建設、讃岐先賢堂の建設等香川県の教育に貢献するところが多かった。松平頼寿は伯爵として貴族院議員に選ばれ在任三十七年の長きにわたり、副議長を経て議長の任にあること七年四月であった。こうした中央政界の重責にありながら、しばしば郷里香川県に帰り、閑暇をつくっては香川県教育会長として県下一円の小学校、中等学校ならびに教育施設と文化団体を訪問巡視したので県民との親密度は非常に厚かった。

三　大正時代

大正時代は教育思想の進展と教授技術の革新と学校施設の拡充が顕著であった。教育学者と教師に新人が輩出し、正に百花一時に開く時代であった。小原国芳、石森延夫、後藤静香等新進教師がそれぞれ師範学校、女子師範学校にあって大きい影響を与えた。それは自由主義と民主主義とを根幹とするルソーとペスタロッティの影響が見受けられるが、生活教育であり、人格教育であり、創作教育であり、勤労教育であり、作業教育であった。実験教育学、教育病理学が研究せられ、児童中心主義教育の実践上の問題解決のため児童の自己活動と創造活動のための分団的、動的教育法の講習が県下の各地に開催されて香川県の教育界は当時の全国的注視の的となった。こうした風潮に従って県外に出て大いに活躍する県人が多かった。斉田喬は東京に出でて小原国芳の居る成城学園に入り、クレヨン画を創始普及し、学校劇の運動を起こした。児童劇に関する著書と、童謡の作が多い。鴨居武は東京帝国大学を卒業して欧米に留学し、帰朝して教授となり、大正十四年に名誉教授となった。香川県における博士第一号の人として有名な工学博士である。高瀬武次郎は惺軒と号して文学博士であって京都帝大教授であった。東洋哲学史の権威として著書が多い。伊賀駒吉郎は香川県師範学校教諭を勤務の後、大阪に出でて樟蔭女子専門学校長となった。心理学原論のほか著書が多い。林毅陸は上京して慶応義塾に学び、欧州に留学して帰朝し、教授となりさらに大正十二年、総長に就任した。学士院会員、枢密顧問官

などを歴任したが、終戦後、愛知大学学長になった。三輪田元道は東京帝大哲学科を卒業して東京三輪田高等女学校長となった。元道の岳父元綱は勤王の志士として京都に出でて三条河原足利尊氏像さらし首事件の首謀者として有名である。山下谷次は京都時代の尽誠舎に学び、大久保彦三郎が病んで帰郷するに際し後事を託されたが、よくこれを処理した。のち東京に出でて東京商工学校を創立して校長となり、衆議院議員となり、文部参与官となった。次に郷土に留まって郷土の教育に尽力した人に、福家惣衛が居る。福家惣衛は香川県師範学校を卒業して欧米に留学し、帰朝して各地の中等学校長を歴任した。特に郷土教育を主唱し「讃岐人物伝」をはじめ郷土に関する著書が多い。中井虎男は三豊中学校に数学教師たること三十年に余り「非ユークリッドの幾何学」の著がある。伊賀小四郎は農業補習学校、青年師範学校に教師として農村青年の指導に当たること六十年であった。

四　昭和時代

昭和時代――それは何か大きい期待に初まる時代であった。明治時代の創業期は輝かしい成果の中に終わり、大正時代の守成期はこれまた輝かしい栄光の歴史をつづり、日本は世界の三大強国の一として英国、米国に次ぎ、アジアの盟主、東半球を代表する大国としての誇りを持ったのである。昭和元年は一九二六年である。一九二六年は天皇が二十五歳の時である。新しい今上天皇は若かった。何か大きな期待の時代であり、飛躍と発展が予想される時代であった。教育もまた同様であった。昭和三年十二月に「教育ニ関スル御沙汰」を賜わり、大いに学芸を振い、もって国運の伸張に資せよと仰せ出された。昭和六年十月に「教育者ニ下シ給ヘル勅語」には、健全なる国民の養成は、一に師表たる者の徳化に俟つ。事に教育に従ふ者それ奮励努力せよ、と仰せ出された。昭和十四年五月に「青少年学徒ニ下サレシ勅語」には、気節を尚び、廉恥を重んじ、識見を長じ、中正の見を持し、本文を恪守し、文を修め武を練り、質実剛健の気風を振励すべし、と仰せ出された。教育者はいずれも天皇の意志を尊重し、詔勅のまにまに精励したのであった。しかし不幸にして昭和二十年八月十五日という日を迎えることとなったが、日本の国民性は再び日本に将来せられた自由主義と民主主義とを巧みに消化吸収して自国のものとなしつつあるのが現状ではあるまいか。そして教育もまた同様であって今や日本の教育界は世界の教育と肩を並べて歩みつつあるのではあるまいか。香川県教育界もまた世界の大きな渦、日本の大きな渦の中の一つの小さなうずを巻き起こしつつ歩み続けているのではあるまいか。その小さなうずの中に文部省主催による全国小学校の学力テストにおける昭和三十八年度、日本一がある。一方、中学校は昭和三十六年度、三十七年度、三十八年度の三か年間連続して「学力テスト日本一」の栄誉を獲得したのである。こうした全県を挙げての教育熱の要因ともなり、また背景ともなった人物群像を探ってみることとしよう。

三土忠造は、昭和二年四月に文部大臣に就任した。香川県における初めての大臣でもあったし、それが文部大臣でもあったので、県民の教育熱はいやが上にも高まって行った。三土忠造は旧

姓は宮脇である。朱子学派の漢学者であり、教育者であった三土梅堂の娘節子と結婚して三土姓を名乗り、東京高等師範学校に入学した。卒業して英国とドイツに留学して帰朝して朝鮮総督府にはいって朝鮮の教育行政を主管し推進した。衆議院議員に十一回連続当選し在任三十年を越えた。文部大臣のほかに大蔵、逓信、鉄道、内務、運輸の各省に大臣となった。香川県師範学校卒業者としてまことに異数の人であった。堀沢周安は香川県師範学校教諭の後、三豊中学校その他の校長として生涯を教育のことに携わったが小学校唱歌「田舎の四季」・「明治節唱歌」などがいずれも文部省の懸賞募集に入選して広く全国に歌われた。大西億衛は昭和二十三年の選挙による教育委員会の委員長となり、以来没年に至るまで二十年間その職にあった。次に戦後において大学総長または学長になった人および現にその職にある人を挙げてみることとしよう。南原繁は東京大学総長になった。全面講和論を唱えて一歩も退かなかった硬骨の学者である。フィフテの政治哲学、その他の著述が多い。岡田実は大阪大学学長である。熔接工学の権威である。安藤一雄は前に台北大学総長であったが現在は九州工業大学学長である。藤村トシは東京女子体育大学学長であったが、現在の同大学学長は実妹伊沢エイが後を引き継いでいる。細川馨は、伊賀駒吉郎の後を継いで大阪の樟蔭女子大学学長である。綾哲一は宮崎大学学長であったが現在は宮崎女子短大学長である。高橋穣は成城大学学長。桑田秀延は東京神学大学学長。真島正市は東京理科大学学長。香川綾は東京女子栄養大学学長。大島豊は東洋大学学長。田岡嘉寿彦は大阪経済大学学長。都崎雅之助は茨城大学学長。綱井輝夫は警察大学校校長。

次に県内の大学を一巡してみることとしよう。香川大学は、昭和二十四年に高松経済専門学校と香川師範学校、香川青年師範学校とが合併して香川大学が設立され、さらにその後、昭和三十年に至り香川県立農科大学を編入してここに経済学部、学芸学部、農学部の三科総合大学となった。現在では、その上に商業短期大学を加えている。初代の学長は神原甚造である。神原甚造は大審院判事を退官して郷里に帰り晩年を郷土教育に献身した。貴重な蔵書すべてを香川大学に寄贈し、神原文庫が設置された。現在の香川大学学長は前川忠夫である。貯水池、養魚池の研究学者である。四国学院大学学長は堀経夫である。本学はキリスト教精神による教育を標傍しており、短期大学を付設している。香川短期大学学長は小野嘉明である。本学は大久保彦三郎の尽誠舎が伸長発展したものである。明善短期大学学長は西本共介である。本学は山川遜水の明善塾が伸長発展したものである。上戸学園女子短期大学学長は上戸コトヱである。大学の状況は大略以上のようであるがほかに県立高等学校二十八校、私立高等学校七校、国立工業専門学校一、国立電波高校一、県立盲学校一、県立聾学校一、県立養護学校一、県立保育専門学校一、市町村立中学校九十、小学校二百二十一校、幼稚園は公私あわせて二百六あってその普及率は全国第一である。以上が香川県の学校状況の大略であるが、これと並行して図書館の歴史が古くまたその設置が多い。香川県立図書館は昔の藩校講道館の図書寮であったものが明治に至って香川県教育会の図書館となり、後に県に移管されたものである。蔵書は十

万冊。坂出市立図書館はもと鎌田共済会によって開設されたものであるが郷土関係の蔵書が多い。金刀比羅宮図書館は神仏道に関する蔵書が多くほかにも「なよ竹物語」など国宝級のものが多い。恩頼堂文庫は白鳥宮司猪熊家が代々にわたって収集した古典籍四万冊を蔵しているが特に猪熊信男の代に至って天皇の御宸筆多数を保存するに至って貴重な文庫となった。猪熊信男は宮中出仕三十三年に及び今上陛下の御親任が厚かった。多和文庫は多和神社社司松岡調が全国から集めた古典籍が多い。以上が香川県における著名な図書館と文庫であるがいずれも県民の誇りとするものであり、また本県の教育と文化のために与えた恩恵は大きい。

五　結　び

以上のとおり明治・大正・昭和の三代にわたる、人物を中心とした香川県教育郷土史の概況を述べてきたのであるが、これを要するに本県の教育は常に国家のそれ、中央のそれと隆替をともにしてきたもののごとくであり、そこには常に中央と直結しているものがあり、中央と呼応するものがあるもののごとくである。がいしてこれを言えば香川県の教育界に隆昌なり、ということであろうか。

今その要因の二三を少しく探ってみるにその第一は県民性であろうか。県民性の一は勤勉であり、二は温和であり、三は文化的能力である。一と二とは香川県の地勢と気候と風土の中から生まれたものであり、三はその歴史と伝統の中から生まれたものである。遠くは弘法大師の綜芸種智院がある。それは宗教の学校であり、また庶民の学校であった。また県人ではなかったけれども文学者菅原道真が国司として来任した影響も大きい。加うるに近世の藩主は代々好学の人であった。県民性として武事よりも文事に向かうはけだし当然であろうか。第二の要因は県の領域が狭いということであろうか。領域が狭く人口が少ないということは何ごとによらずまとまりやすい。県民が教育のことによく一致協力して努力するのである。その第三は香川県の位置ということではあるまいか。いわゆる近畿文化圏に近く、常に中央文化と接触して新しい風潮を摂取消化するのである。中央と香川県との間にはいつも大きく太い一本のパイプが通じているのである。その一本のパイプが香川県出身の文化人であり、教育者である。かくて香川県の教育はこれまでがそうであったごとくに、今後とも隆昌の道を進むことであろう。

草薙金四郎（香川県文化財専門委員）
（四国女子大学教授）
塩田清（香川県立善通寺第二高等学校講師）

第六回

人物を中心とした

愛媛県教育郷土史

県花‥‥ミカン

景浦　勉
高須賀康生

幕藩体制のもとにおける伊予国は、松山・今治・西条・小松・大洲・宇和島・新谷・吉田の八藩に分かれ、小藩割拠の状況であった。明治四年の廃藩置県によって、これらの八藩は八県となったが、やがて松山・宇和島の二県に統合された。これらの二県は翌五年に石鉄・神山県と改称されたが、さらに翌六年二月に合併して、現今の愛媛県が誕生した。この当時の県関係の文書のなかで、はげしい行政区画の変遷にともなう施政の困難なことを訴えている。明治創業期における政界の動揺と相まって、当事者の苦労は私たちの想像以上のものがあったに相違ない。つぎに同五年八月に学制が頒布されてからの愛媛県における教育界の発展を人物を中心としてながめてみよう。

1　岩村高俊と内藤鳴雪の教育行政

学制に規定されている抽象的な大綱を具体化する役割は、府県当局に負わされていたから、学校の設置・就学の奨励・学校財政の確立等はすべて地方官の政治力にかかっていた。この重責をになって同七年十一月に愛媛県に赴任したのが、岩村高俊権令であった。彼は土佐藩閥の出身で、岩村通俊・林有造を兄に持っていたが、兄有造と違って官吏の道を歩み、佐賀権令の時代には江藤新平の乱を鎮圧した。彼は、この経験を生かすとともに、自由民権運動をよく理解し、新しい施策を実行に移したので、開明知事として愛媛県に大きい足跡を残した。

岩村は、県内士族中の人材や豪農商層を行政面に参与させ、官民協力体制のもとで、教育の振興に乗り出した。まず同八年四月に県内の学校事務を統轄するために学校課を創設し、詳細な事務要項

を規定した。ついで従来各大区に設けられていた学区取り締まりに対し、学区取締事務章程を定めて「学区取締ハ管轄内教育一切ノ事務ヲ管掌シ、且ツ之ヲ拡張隆盛ニスル事ヲ職トス」とし、その職責を明確にした。また巡駐訓導を各大区ごとに置き、大区に設けられていた旧伝習所教授をこれに任命し、各学校の巡回指導に当たらせた。さらにこれを援助する機関として聯区監視を教員のなかから選んで、三、四～五、六校ごとにおいた。また学区ごとに各町村の名望家を選んで学区世話掛に任命し、主として学校施設の整備に当たらせた。

岩村高俊

このようにして学務体制を整えた後、岩村は学区世話掛の豪農商層を勧誘して学校の創設に全力をあげた。県下の小学校数を見ると、同七年に二九四校であったものが、同十年には七一九校に激増し、学制の理想とする一小学区一校がほぼ達成された。これよりさき同八年五月十五日に岩村は学事告諭を発し、学齢児童を持つ父兄を督励して、「(前略)人其好めるところの貴く賢からんことを欲せば、子弟をして人民普通の学問たる小学の課業を出精せしめざるべからず。子弟の学問なくして愚かなるは其子弟の恥のみならず、則その父母の恥はいふもさらなり」といっている。翌九年三月に各大区ごとに、各区々戸長・学区取り締まりなどを召集して教育会議を開き、学齢児童就学督促方法などを審議させた。その結果、就学率において全国平均には及ばなかったけれども、同七年の県下における就学率一三・七％（男二〇・九％、女六・六％）が、同十年には三二・七％（男四六・八％、女一七・六％）に躍進した。

学校教員の養成についても岩村は重大な関心を持ち、既設の松山伝習所のほかに五か所の伝習所をつくって、教員希望者に文部省規定の教授法などを修学させた。同九年九月には、内藤素行らの勧めに従い松山に師範学校を設置して、教員養成の一拠点とした。なお、伝習所は一時廃止せられたけれども、翌十年三月に講習所と改称のうえ復活し、教員の現職教育の場とした。

いっぽう中等教育については、愛媛県英学舎（旧松山藩校明教館の後身）を同八年九月に県立に移管して英学所とし、福沢諭吉に依頼して慶応義塾から草間時福を招いて校長とした。この英学所の生徒は、松山の勝山小学校の課外席を主体にして、士族の子弟を集めたもので、総計三八名で発足した。当時、草間は二十三歳の青年であったが、その薫陶をうけた生徒は次第に自由主義思想を身につけるようになり、勉学のかたわらすすんで演説会・討論会に参加した。また、岩村権令もこれらの言動に深い理解を示したから、彼らの意気は天を貫くありさまであった。岩村は中等教育に

対して「子弟ノ小学ヲ経由シテ尚高等ナル教育ニ上ラントスル者ハ最モ士族ニ多キカ故ニ、今管内ニ於テ最モ中学ヲ急需スルノ地ヲ求ムレバ、自ラ旧藩城下ニ就カザルヲ得ザルナリ」（県政事務引継書）といっているように、旧城下町に中学校を設けるように努力した。同九年五月に従来宇和島の有志の間で経営されていた不棄学校（英学所ともいう）を県立南予変則中学校とし、それにともなって松山英学所を北予変則中学校と改めた。同九年九月に香川県が愛媛県に合併されると、高松変則中学校を県立とした。ついで十一年七月に大洲に共済中学校を創設した。岩村は丸亀・西条・今治等の旧城下にも中学校を設立する考えであったが、残念ながら在任期間中に実現しなかった。また彼が松山および高松の病院内に医学校を設けて、地方における医学生の養成に努力したことも、注目すべき業績の一つであった。

この岩村権令のもとで直接に学事の振興に当たったのは、内藤素行であった。彼は松山藩上級武士の家に生まれ、明教館で勉学ののち昌平校にはいった。明治三年七月に松山藩権少参事となり学校掛専務の任に当たった。この時彼は明教館の機構を改革し、新設の洋典科の教授に慶応義塾から稲垣銀治を招聘した。また彼は、みずから洋学を身につける必要を痛感して東京へ遊学した。同五年松山に帰り、石鉄県学校（明教館の後身）で漢学を子弟に教授した。八月に学制が領布されると、彼は今までの経験を買われて、松山周辺の一五大区学区取締を命ぜられるとともに、第一小学校（勝山学校とよんだ）の教授方を兼務した。この当時学問にまったく関心のない一般の父兄を説得して児童を就学させるのは、容易なことでなかった。内藤は「鳴雪自叙伝」のなかで、その時の苦労を述べて、「松山は士族仲間に従来子弟を学問させる慣もあるので別に八釜しい事はなかったが、それも町家となり更に郡部の農家となると僅に習字を教へる寺子屋位の外学問をさせるといふ例がないので、全く余計の干渉をして農商業の妨げをすると思ひ随分不平を述べた。それを……学区取締の方から何うか小学校を其所に置かせて呉れ、児童を暫く貸して教へさせて呉れと手を合さん許りに頼むのだから可笑しい。……寺子屋の師匠も小学校が出来れば、門人を其処へとられて了う所から、内々父兄の腰押しをしてこの反抗を起させた点もあるのであらう。」といっている。そのほかに内藤は教科書を編集したり、勝山学校のなかに伝習所を開設することに奔走した。

岩村権令は愛媛県に着任すると、この内藤の活動に注目し、彼に教育に対する抱負を聞いた。内藤の意見は岩村の意に投じたので、同八年四月に十一等出仕の学務課勤務を命ぜられた。彼は教員の資質の向上をはかるために、教員養成の機関の伝習所の増設に力を入れた。同九年に来県した文部省視学官野村素介の示唆もあって師範学校設置を岩村に建議した。ついにこれが実現を見たので、彼は上京して東京師範学校卒業の松本英忠を校長に迎えた。松本は内藤らとよく協力して師範学校の基礎を確立し、さらに「小学校試験法」・「愛媛県地誌略」などを編集刊行した。その後、素行の思想は自由民権からドイツの国家主義に傾きはじめた。同十一年に文部省令によって小学教則を甲乙種に分けることになった時、彼は「有名ナル独乙ト雖トモ都会大邑ヲ除ク外通常ノ村落ハ僅ニ平民学校アルノミニテ其教則タル甚タ浅近卑俗ナリ。乃チ我国ノ如キモ先ツ歩ヲ此ヨリ進メテ可ナラントス。」（村落教則

を議するに当たっての彼の演説）といい、乙種教則の実施を促すとともに、山間僻村にはより簡易な丙種教則を設定した。この内藤の思想の転換は岩村との関係をやや疎遠にしたが、岩村の信任は依然として変わらなかった。同十三年三月に岩村が内務省戸籍局長に転じてしばらくして、彼の尽力により内藤は文部省にはいって活躍を続けた。同二十四年四月に内藤は文部省を辞した後は、旧藩主久松家の委嘱をうけて東京にある常盤会寄宿舎の監督となり、郷里から上京した学生の面倒を見た。その学生のなかに正岡子規がおり、内藤はその影響をうけて俳句に没頭し、子規と呼応して俳句革新の道を歩むことになった。

2　伊予教育義会による中学校経営

岩村と内藤とによって愛媛県における教育体制の基盤がつくられたが、同十九年となり県立中学校が全廃されるという非常事態が出現した。このころ松方デフレ政策の影響をうけて地方財政は窮乏しているうえに、大風水害の襲来、コレラ病のまんえんなどによる災害費と予防費のために、県財政はまったく底をつくありさまとなった。この時、森有礼文部大臣によって中学校令が制定せられ、地方税の支弁あるいは補助にかかる中学校は府県に一か所と制限されたので、県当局は経費節減の絶好の機会であるとし、第一中学（松山）を残して第二（高松）・第三（宇和島）中学校を閉鎖し、さらに業績のあがらない医学校を廃校することにし、臨時県会を招集してその承認を求めた。ところが議会では第一中学の廃止をも強く主張するものがあった。この時廃止をとなえた藤野政高・高須峰造らの論議は「小学校の如き国民教育に属するものはさておき、中学校のような高等教育は人智が進めば、政府・県はなるべく放任する方がよく、この際私立中学校を建設して学徒に独立自尊の気象を養うようすべきである。」というにあった。これに対し県当局は「現存する私立学校では慶応義塾などの二、三の学校を除いてみな不具者同様である。本県において到底私立学校の経営は不可能である。この際官民一致して県内一中学校の完成を期し、かつそれによってのみ中学教育を盛んにすることができる」と抗弁につとめたけれども、県議会は多数で廃止決議をした。

第一中学校が廃止されると、県の政財界の重鎮であった小林信近・井手正光・長屋忠明・藤野政高らは伊予教育義会を創立して、同校の先輩たちから、また内藤素行の助力により在京県人の有志から寄付金を募集した結果、八万円の基金を得た。このようにして同二十一年九月に私立伊予尋常中学校が誕生し、経営者・教職員・生徒たちは大いに勉学の意気に燃えたが、経営状況は楽観を許さないものがあった。同二十三年の校舎新築には全面的に県の援助を仰がなければならなかった。たまたま翌二十四年中学校令の改正により、中学教育の拡充がはかられ、県当局ではこの私立中学校を県立に移管した。このころ宇和島でも有志の手によって宇和島明倫館が運営されていたことは特筆されてよいであろう。

3　井手正光の教育活動

この伊予教育義会の幹事の井手正光もまた本県教育界では忘れることのできない存在であった。彼は杉山藩士の家に生まれ、藩

井手正光

学の明教館に学び、さらに崎門派の三上是庵の教えをうけ、俊才の誉が高かった。明治維新の後は知己の勧めを謝して、帰農生と号して晴耕雨読の生活を楽しんだ。ある時小学校教員の友人に教育についての信念を聞いたところ、友人は児童に学習させるようにすれば事足りるので別に何の主義も信念も持っていないと答えた。井手はこの言葉を聞いて驚くとともに、教育家が信念を持たないでは、後世子弟の育成を誤る結果になることを憂えた。彼は心機一転して自己の信ずる「天理人道」の主義で生徒の指導に当たろうとし、同九年三月に杉山巽小学校に奉職した。彼は同校の主席訓導として校規を定め、教憲を設け、学校の経済を整備し、また教員を選抜するなど、校務に勉励するかたわら、小学教育振興の基盤は学校の設備充実にありとし、校舎の新築と校具の整備とに全力をあげた。当時の女児の就学率の低いのを見て、同校内に課外席を設け、普通学科のほかに裁縫・手工を教授した。このため女児の入学者が増加し、同十一年には生徒数八百余名に達した。

その後井手は先輩の長屋忠明の勧めによって民権結社「公共社」にはいったが、やがて岩村権令の要望により郡吏となったので、しばらく教育界から遠ざかった。同十三年に岩村が離県すると、彼も官吏を辞したが、公共社を拠点として教育論を述べ、さらに同社教育部に明教学舎を開いて、中等教育に乗りだした。しかし自由民権運動の衰微とともに、公共社も解散した。また井手は関新平県令の要請によって、県下小学教育の中心校である松山の勝山小学校長となり、さらに巽・智環小学校長をも兼務した。

かねてから彼は小学教育の充実は学校施設の完備と教授法の振興にあるとの自論を捨てなかったから、この三小学校の合同をはかり、ついにその実現を見た。同二十年四月に彼はその実践力を買われて杉山高等小学校長をも兼務した。これよりさき彼は池内信嘉ら有志とはかり、商家の子弟のために商業夜学校を設立した。また杉山婦人会の結成にも尽力したが、同二十年五月に師範学校長佐竹義和・同校教諭町田則文らとはかって愛媛教育協会を設立した。同会では春季総会を開いて教育問題の討論および研究発表を行ない、各郡市の部会では毎月一回研究会を開くなど教育の振興につとめた。この教育協会は太平洋戦争の終末まで存続し、教員間の疏通をはかり、愛媛教育の発展に貢献するところ多大であった。同会から発行した月刊機関誌「愛媛教育協会雑誌」（後に「愛媛教育」と改題）は本県教育界の足跡を知るうえの根本資料となっており、また同会の編集した「愛媛先賢叢書」・「愛媛県教育史」前篇はともに本県史学界で貴重な文献となっている。）

さて井手は同二十二年六月に健康を害し、一時重態と伝えられたが、療養に長期間を要したので、あらゆる公職を辞した。回復ののち、海南新聞社長・伊予鉄道取締役・県会副議長・市会議長などをつとめるかたわら、松山高等女学校・松山商業学校の設立を側面から援助し、また私立興道学館・私立幼稚園を設置して、その経営に当たった。興道学館は、井手が公立学校では自己の主張を貫徹できないことを覚り、彼の日ごろの主義である天理人道教育を施すため、小学校卒業程度以上の子弟を集めて同二十五年に開校した。この学館の教育方針は「立身徳行」にあり、生徒も将来「忠良ノ民タラシムル」ことにあったから、生徒は全員寮にはいって集団生活をするのを原則とした。翌年に柔剣術を教科に加えて、体育をも重視した。さらに英学科を併置して学館の発展をはかったけれども、漢学を主体とした精神教育の学園であったから、期待したほど生徒も集めることができなかった。やがて資金欠乏のために、学館を閉鎖するのやむなきに至った。

4　城哲三・白川福儀と北予中学校

一代の教育家をもって任じた井手が学校経営に失敗したのに対して、十八歳の無名の青年城哲三によってつくられた北予英学校（昭和十三年県立に移管）が現在まで存続発展したのは、皮肉な現象である。城は明治八年松山に近い久米郡川上村の開業医の家に生まれ、高等小学校を卒業したのち、松山に出て私塾で漢籍を修めた。さらに米人宣教師について四か年間英語を学んだが、「吾邦人ニシテ英語学ニ達セサルハ商業其他百般ノ事業彼レニ対シ其不幸ヲ見ルモ亦少ニアラズ」（設立主意書）と感じて、同二十六年六月に北予英学校を開いた。その当時、城は一人で校主と教員とを兼ね、心をかたむけてその拡張と発展につとめたので、形態も次第に整備し、同三十二年には修業年限五か年の北予中学校に脱皮することに成功し、県から年々経常費の補助を得ることができた。ところが、同三十四年に城の経営方針について教員と生徒とが反対したため、ついに内紛に発展した。そのうえ校舎新築による負債が山積したので、城は万策尽き果てて学校経営の座を去らなければならなかった。

城の懇請をうけて北中校の経営を引き受けたのが、白川福儀・藤野政高・井上要らの政財界の中心人物であった。彼らは、社団法人北予中学会を組織して校運のばん回につとめた。とくに白川は専務理事兼校長として負債の償却に全力をつくすとともに、生徒の訓育にも専念した。白川は松山藩士門田家に生まれ、白川家にはいり、明教館・石鉄県学校に学んだのち、東京に遊学した。帰郷して公共社にはいり、また海南新聞の主筆として活躍したが、やがて藤野政高とともに自由党の領袖といわれた。県議会議長や松山市長を歴任したのち、北予中学校長に迎えられた。彼の教育方針は誠実・醇朴（じゅんぼく）にして剛毅な人物を養成することにあったことは、「堅実なる志意（ママ）を持つ青年を養ふて如何なる時如何なる場所に於て如何なる事に出合ふも毫も屈せざる様な気概を持たせたいと思ふ」といっているので明らかである。この白川の主義が蛮風で有名な北中生徒の気分に合致し、彼は慈父のように慕われた。この北予中学校はやがて松山中学校と並んで多くの人材を輩出することになった。白川校長は大正五年一月に逝（せい）去したが、その悲報に接した生徒・同窓生たちは彼の家にかけつけ、遺がいを囲ん

で号泣したという。

5　私立女学校の振興

つぎに県下の女子教育についてながめてみよう。学制頒布以後の小学校における女子の就学率の低かったことでもわかるように、女子教育に対する一般の関心はきわめて薄かった。この状勢のなかで、同十九年九月に松山に私立松山女学校が二宮邦次郎らの手によって創立されたことは注目に価する。二宮は岡山県出身で新島襄らの感化をうけてキリスト教徒となり、京都同志社神学校に学んだ。その後伝道師となって松山に来たが、男子に中学校の施設があるにもかかわらず、女子にはこれに該当する教育機関がないのを見て、四国で最初の女学校を創立した。当初は生徒数も僅少で、その創業期における経営は苦難の連続であり、そのうえこのころからおこって来たキリスト教排撃の気運も手伝って、二宮は郷里の屋敷を処分してようやく飢えをしのぐありさまであった。

その結果、同校は同三十九年に米国伝道会社の管理に移され、純然たるミッション・スクールとなり、アメリカ宣教師のコルネオ・ジャジソンが校長となり、その経営もようやく軌道にのった。なおこれよりさきに、ジャジソンは二宮・西村清雄らの協力を得て、働く青少年のための教育施設として松山夜学校を創立した。同校は授業料を徴収しなかったばかりでなく、通学に不便な生徒のために寄宿舎の施設があった。

さらに女子教育について見ると、光野マス子によってつくられた裁縫研究所（同四十年創立）から発展した勝山女学校があり、沢田裁縫女学校（同三十四年創立）と家政女学会（同四十二年創立）とが合併して愛媛実科女学校ができあがったことである。この両女学校は同四十五年に合併して済美女学校となった。この間において学校の経営に苦心したのは、沢田亀・船田操・清水久米一郎・渡部明綱らであって、とくに済美校については船田の奮闘努力に負うところ多大であった。

6　森盲天外の公民教育

白川福義と同時期に県内で名を知られた人物に森恒太郎（盲天外）がいる。彼は伊予郡余戸村（今は松山市）の庄屋の長男に生まれ、勝山中学校に学んだ後、北予変則中学校（後の松山中学校）にはいり草間時福の教えをうけ、さらに上京して中村敬宇の同人社の門をたたいた。同十九年帰郷して政治運動に興味を持ち、改進党にはいって機関誌「予讃新報」の編集をし、また県会議員として活動を続けた。ところが同二十九年に失明の悲運にあい、世をはかなんで三度も自殺をはかったが、叡山での修業で悟りを開き、同三十一年郷土の人びとに望まれて余戸村長となった。彼は村の統治に当たってまず村の真の実態を見きわめる必要があると考え、役場吏員を総動員して同三十三年に膨大な「余戸村是調査資料」を完成した。この資料に基づいて小学教育の改善、青年教育の実施、耕地の改良、勤倹貯蓄、共同購入、小作保護、副業の奨励等の七方針を決定した。そのうち森の最も力を注いだのは、青少年教育であって、教科書による抽象的な教授のほかに、さきの村是調査資料を教材に組み入れ、生きた公民教育を断行させた。この教育方法のなかで、注目されたのは児童役場の実習であった。その内容については彼の著書「我が村」（昭和二年刊）のなか

森盲天外

に詳しく述べられている。その一節に「一教室の入口に余戸村児童役場の看板を掲げて毎月第二・第四の土曜日午後之を開きます。この役場は学校を村として全校生徒はこの村の住人であり、尋常三年以上の男生を以って公民としているのであります。この公民より正式投票に依りて十二名の村会議員が選挙せられました。この村会に於て選ばれた村長が職務を執っています。助役も収入役も村長の推薦に依り村会の選挙したもので、書記は村長が任命しました。（下略）」といっている。このようにして彼は児童役場で訓練を試み、公民としての観念を養成することにつとめた。

このほか学校園を作って土に親しむ農民としての心情を養うことにつとめたが、学校園を教材に生かす試みは県下では珍しかった。青年に対しては青年実習会を組織して、公民・修身・経済科の教科を授けるとともに、実習教育を行なって余戸村の将来の指導者養成に当たった。また森は自分が盲人であったことにより、盲唖者の境遇にだれよりも理解していたから、学校の設置にはひじょうな努力を払った。同四十年十一月に愛媛教育協会はその熱意に動かされ、篤志家の後援を得て松山市に私立愛媛盲唖学校を設置した。

7　加藤彰廉と松山高等商業学校

つぎに、関西私学の雄として名を知られた松山商科大学の生いたちについて述べてみよう。大正十一年に松山高等学校教授の北川淳一郎は高等商業学校設立を提唱したところ、伊予鉄道会社社長井上要が耳を傾け、松山市長加藤恒忠に相談し、話を大阪の新田帯革製造所社長新田長次郎に持ちかけた。新田は、今までに北予中学校に多大の援助をし、私学教育に最も理解の深い人物であった。そこで新田は、言下に賛成して創立に関する経費の支出を承諾したので、この高商設立案は直ちに軌道にのった。

加藤彰廉

新設の校長には、北予中学校長の加藤彰廉を迎えることになった。加藤は、かつて大阪高等商業学校教授を経て衆議院議員となった人物であったから、新設の初代校長としてはまさに適任であった。彼は松山藩士の家に生まれ、加藤彰（県会議員・五二銀行頭取）の養子となり、明教館・勝山学校に学んだのち、大阪英語学校、東京大学に修学した。卒業後山口高等中学校教諭・広島中学・大阪商業・大阪高等商業学校の校長を歴任し、大正四年に推されて衆議院議員になった。この時、白川北中学校長が逝去したので、井上・新田らの北予中学会の有力者たちは加藤に白羽の矢を立て熱心に懇請したので、加藤はついに校長に就任した。加藤の校長就任は北予中学校の地位を不動のものとしたが、さらに松山高商校長就任により、大阪・中国地方の県外からも彼の名声を慕って遊学するものが多かった。加藤は学生の訓育に意を注ぎ「実用、忠実、真実」の校訓を定めたが、これは同校の伝統的精神として現在に至るまで受けつがれている。

なお、学校の伝統的精神を養成した点では、大正十年に創設された松山高等学校の初代校長の由井質、また大正二年から十年間にわたって愛媛県師範学校につとめ同窓生たちから師父と慕われた山路一遊らを忘れてはならないであろう。学校経営に多額の寄付をし郷里における教育の振興につとめた実業家には、前述の新田長次郎のほかに山下汽船株式会社々長の山下亀三郎があり、第一・第二山下高等女学校を創設したことに注目すべきであろう。

8　新教育を推進した人びと

明治時代の本県教育界は学校設備の拡充に重点が置かれ、教授理論の研究には手が回らなかった。わずかに愛媛県師範学校付属小学校で文部省から諮問された高等科に手工・英語科を課することの可否についての調査報告、単級学級の問題などを研究していたに過ぎなかった。

大正年間にはいって全国的に流行した自由教育運動に、本県も当然のことながら巻き込まれ、自由教育実践活動がはなばなしく展開された。この自由教育を最初に採用したのは、明治四十三年に師範学校から独立した女子師範学校とその付属小学校であって、「自発的学習態度の養成に関する研究」を共同で行ない、大正十年に自由教育を採用することを内外に明らかにした。この運動推進の中心に立ったのは武田米蔵らであって、当時訓導の二神常一はその教授法について、「画一的な指導から開放的な指導へ、教師中心から児童中心へ、つめこみ教育から創造教育へと進んでいった大正時代の自由教育思潮にそった指導計画であり、学習指導であった」と述べている。

いっぽう、これまで初等教育の中枢をもって任じていた男子師範学校および付属小学校は、始めから女子師範の自由教育に対して著しく批判的であった。そのために両校の間でこの問題に対して論争が繰り返された。しかし、師範学校も全国教育界を風靡した自由教育に無関心ではいられず、大正十二年にアメリカのヘレン・パーカストのダルトンプランを実践するに至った。付属小学校主事の松山隆や訓導重見貞一・大野静らは尋常四年以上の学年にこれを適用し、一斉指導の時間割を撤廃し、教室を各教科別の研究室に切り換えた。あらかじめ研究細則をつくり、これに基づいて児童に学習計画をたてさせ、自由に教科研究室にはいって自

学自習し、疑問点を教師に聞く方法をとった。

この成果は、同十二年から十五年にかけて「愛媛教育」に発表され、一時は県下小学校教員の耳目をそばだてた。この実践運動は同十三年四月に、パーカスト女子を招いて講演会を開催した時期に最高潮に達した。しかし、県内にはこれに対して批判的な意見が次第に強くなり、その弊害を説くものが現われたので、師範学校長浅賀辰次郎は同十五年にこの実施を中止することにした。ここに師範付属小学校を牙城としたダルトンプランもついに廃止される結果となった。

師範・女子師範の付小を中心に展開した自由教育を地方の小学校で実践したのが、新居郡泉川小学校長川崎利市であった。彼はこれを個別教育と名づけ「児童各自の自己活動を基調となし、児童生活の心理的傾向を洞察し、最も具体的なる事実に固く足を踏みしめ、教師のあらゆる干渉、圧迫、注入、束縛の伝統から脱して人間本具の独立性を満足せしめ、その価値を発揮せしめんとする教育聖道なのである」（「個別教育の実際」昭和三年刊）と主張した。川崎は訓導鴻上弥三郎・真鍋寅勝らとともにその実践につとめたが、児童の学習差が大きくなり、劣等児が就学を嫌悪する傾向を生じ、父兄の一部は校長排斥運動をくりひろげた。彼は西条町大町小学校に移り、訓導白川芳松らの協力のもとに昭和三年十一月に全国個別教育研究大会を開いたので、その名を全国に知られるようになった。しかし、翌年に大町校の生徒の西条中学校入学問題から紛争がおこり、ついに個別教育是非論まで展開した。彼は越智郡波止浜小学校を経て東京の新教育協会にはいり、個別教育活動を続けた。

この自由教育に代わって教育思潮の中心となるのは郷土教育であった。本県で早くから郷土教育の理論と実践に取りかかったのは師範の代用付属の余土小学校であって、芥川準一郎ついで村上万寿男校長らがその熱心な提唱者であった。彼らは同二年に同校で開かれた教育大会で「農村に於ける小学校教育の使命は如何にあるべきか」の問題に対して「郷土教育に立脚した教育」を提議し、以後三か年間これらの実際研究に取り組んだ。その成果は同五年の教育大会に「郷土教育の理論と実際」として公表された。郷土教育の目的は「郷土生活を指導し郷土を正しく把握せしめ、愛郷心を養いよりよき郷土生活建設の意識を養成せん」（「郷土教育の実践」）とするにあった。この郷土は広義に解すると国家領域に到達するから、この郷土教育は文部省のすすめる国民教育に結びつくものであった。

このようにして時流に乗った郷土教育は、越智郡盛小学校の森光繁・男師付小の大野稔らの推進者を得てますます発展した。その結果、県下の各地域で「郷土読本」が続々とつくられ、以後十年間郷土教育を採りいれない学校は皆無であった。やがて十年代になると、軍部による政府の思想統制は次第に厳重となり、皇国教育・錬成教育が軍国主義を背景として強制的におしすすめられた。これらの画一的なまた極端な国粋主義的な風潮のもとでは、もはや自由な教育の研究や独自の教育理論の発展を望むことは不可能であった。

（愛媛県教育センター）

第33回

人物を中心とした

高知県教育郷土史

橋詰延壽

国家有為の人材を

吉田数馬

竜馬の愛した餓鬼大将

坂本竜馬を心から尊敬している教育家がいた。これが山内藩校の中学海南学校長吉田数馬である。彼は少年時代から坂本竜馬の知遇をうけた。吉田は弘化四年（一八四七）十二月十七日生まれだから十二歳若い。南国市十市に生まれ、高知市汐江の里に成長。少年時代は餓鬼大将で通っている。漢籍と武芸ができ紅顔の美少年になると、竜馬は彼の才能を愛し、いつも彼を同伴した。

この吉田数馬は、戊辰東征に従軍した。迅衛第三番小隊長片岡健吉の指揮下にあった。

吉田は維新後は明治三年（一八七〇）七月、フランス砲兵少尉アントアンの指揮で砲兵の訓練をうけた。こうした根からの武人である。その吉田数馬が学校長になった。

制服は竜馬の初旅姿

東京芝の安養院に私立学校ができたのは明治六年（一八七三）一月のことである。これが海南学校の前身で海南私塾のまたその前身である。東京に本校、高知に分校があったが後に合併し、高知が本校となった。

その校長になった吉田は、空理空論を排して、国家有為の人材をつくる陸海の軍人を養成することを目標にした。そのため自分の少年時代から尊敬している坂本竜馬のようにお国のために役立つ人間をと念じた。吉田は海南中学の服装も、坂本竜馬江戸への

初旅の姿にあやかった。

十九歳花筐に燃えてさっそうと江戸行きをやる竜馬は、紺の筒袖、紺の袴、手甲脚絆に行李をふりわけにしていた。それをそのまま紺の筒袖、紺の袴にした。平素はそれにシュロの横縞の下駄ばきである。帽子には藩校の流れをくむ山内家の三柏葉の紋が校章になっている。

質実剛健

当時、土佐は自由民権の黄金時代で自由の声が山野に満ちていた。時には政府の悪口雑言をしないと人間でないようにいっていた。その時彼は、耳も傾けず、お国につくす軍人になれ、へ理屈はいうな、いざという時は生命を君国に捨てよと教育した。

日本で最初に執銃教練をやったのも中学海南学校である。和服姿に背のうをつけ、木綿の靴下に短靴をはき、銃をもっての教練である。

ひるはコリ弁当である。網に入れて背のうにくくる。食事は全員立食。ぜいたくなサイを入れていると先生が一巡し、ものもいわず投げすてた。だから家庭でも、ミソ、漬物、ジャコ、野菜、梅干のようなものである。

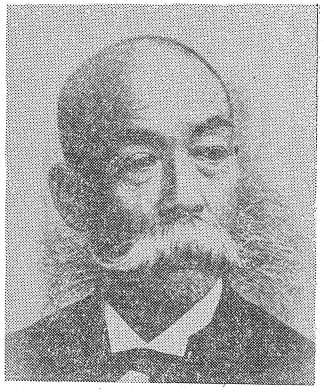
お茶を入れる湯のみも使わない。コリ弁当にそのまま入れるので、ボチボチとしずくが落ちる。今のような栄養をいわない。「腹の詰めじゃ。ぜいたくをいうな。戦場ではどうするか。」とすぐ戦場にたつことに結んだ吉田独特の教育である。

スパルタ式以上

時々演習で野宿をした。さて学校にかえる。校長は馬にまたがっている。その、馬が急に門に入らずに引っ返したことがある。それは生徒の中から、演習がやっとすんでくたくたに疲れていたので、

「おお、くつろいだ。」

とこぼした。校長はそんな弱虫で何の役に立つかと、また二里ほど行軍をやり直した。



吉田数馬

下宿は他校の生徒と同宿させなかった。冬も火鉢を使わさず、メリヤスのシャツに紺の筒袖一枚であった。時々先生が下宿に不意に行って違反は厳重に処罰した。

袴はスネまで、長いのは服装検査の時だまって鋏で長い部分だけつみ切った。理屈をいわずぴしぴしとやる。

夜間外出禁止、たまたま禁を破った生徒がみつかった。校長は全校生徒に非常集合のラッパをふかせ、執銃で街頭に出る。その生徒が「街を見たかった」という理由の外出だった。校長は例によって馬上から、その傍に違反生徒をしたがえ、舛形から五丁目の間を幾回か往復した。

「街を十分見たか。」

「はい十分見ました。」
これで全校生徒は学校に引きあげた。

校長自ら陣頭

政争のやかましい当時の高知で吉田校長に○党に参加せよと勧誘というか、おどしがかかった。吉田校長は「私は政党のことはわからん。そんなことは真っ平だ。」と言下にはねつけた。

九月に入っても鏡川で水泳をやった。生徒がたじたじとしていると吉田校長は自ら先頭になって泳いだ。

明治四十三年八月十二日朝五時不帰の客となった。墓は野中兼山の墓地の下方にある。

（資料　同窓会刊行、吉田数馬先生）

民権闘士の妻
女流教育家　前田茂

この女性あり

旧姓は今村茂。アメリカで苦学勉強、後に自由党の闘士前田岩吉に嫁して前田茂。華族女学校での教壇、夫君とともに南満州では女子師範学堂の創立に力をつくし、その教官となった。さらに東京では東京殖民学校の創立、女子美術学堂の開設、京城では外人経営の梨花学堂への援助等その功績は大きい。

不幸にも大正二年（一九一三）十二月二十日京城の自宅で愛児とともにオンドルのガス中毒にかかった。和田医師のけん命の努力と熱誠あふれた夫君の看護に見守られながら、遂に及ばず四十五歳を一期として他界した。

家には子なく、ただ夫君前田岩吉が弧影しょう然として瞑想する姿だけであった。

茂は、明治元年（一八六八）五月十五日今の土佐市高岡町で生まれた。父は今村鉄猪、母は豊で、実家は今村家で三百石の士族。今村梨の元祖で有名である。

茂の父親は豪傑肌と社交と女性のために産を傾けた。茂は頭がよかった。学問がすきであった。茂は小学校を卒業すると海外発展を志し、高知市の英和女学校に入学。明治二十六年（一八九三）茂二十六歳の時、宣教師グリナンの帰国を機会に衣裳、かんざし全部を売って旅費にかえアメリカに渡った。

華族女学校の教壇に

茂はカリフォルニア州ミルス大学に入り、八年の螢雪の功なり、抜群の成績で卒業した。専攻は文学。ミス・エルス教授、チェン・ブレーン教授の指導をうけた。父鉄猪は完全に破産してビタ一文の送金もない。茂は学校事務の手伝い、寄宿舎、病室の世話をし、月謝免除の特典を得た。夏季休暇を利用し裁縫で米塩の資を得た。

彼女は卒業後アメリカ各地を巡遊し、明治三十四年（一九〇一）九月、三十四歳で帰朝した。

その秋、板垣退助夫人、下田歌子の推せんで華族女学校の教師になった。住居を東京に定め老父母に孝養をつくした。

翌年の明治三十五年四月自由党の闘士であった前田岩吉と結婚、三十九歳の夫君、三十五歳の彼女である。琴瑟相和の家庭が生まれた。

茂は華族女学校には四か年勤務した。当時は先生にも生徒にも階級意識が強かった。蝶のように着飾った生徒、プライドの高い教師の中につつましく質素な女性が一人。明るくおとなしい。これが前田茂である。豪商森村市左衛門がいたく茂に感動し、自分の娘を彼女に託したほどである。

翼をつらねて大陸

明治三十八年十月華族女学校を辞した前田茂は、官命をおび南満州女子教育調査のため故国を出発した。夫君とともに翼をつらねて——。

翌年三月奉天省で女子師範学堂を創立しその教官となった。在任三年、その間夫君を扶けて東京で私立東京殖民学校の創立に力をつくす。

また満州では女子美術学堂を開いた。文化の向上に日も足りないありさまである。これはみな公務のひまにやる仕事である。

奉天省の教官を退いたあとは、夫君の事業の内助につとめた。安東省で生活をしたこともあり、大連で暮したこともある。

茂が満州にいた時のことである。夫君岩吉のもとに下僕の佐佐木少年がいた。大変心掛けのよい少年であったので、彼女は賞与にかえて旅費を与えて内地にやった。佐佐木少年は大阪の菓子店に見習いとしてはいり、技術をおぼえて安東省に帰った。そうして菓子店をりっぱに経営した。彼は独立の生計をたてることのできたよろこびを前田夫妻に感謝し、生涯の恩人と仰いでいる。

運命の日

明治四十五年の夏、前田夫妻は京城に移住した。茂はすぐ外国人経営の梨花学堂の経営を援助した。

夫君との間に子供のいない茂は、京城一の料亭弥栄園の女主人の子供、幸一を貰ってわが子のように可愛がった。また出入りの橋本家の女中のりっぱなのに感心し、先記の安東省の菓子店佐佐木青年に媒妁した。

その挙式が行なわれる大正二年十二月二十日の朝である。ガス中毒で幸一少年はねむるように死亡。茂は意識不明である。夫君によって和田病院にかつぎこまれた。茂は

「幸一！　幸一！」

と意識混とんの中に幸一少年の名をよびつづけて遂に他界した。

彼女はアメリカ留学中は日本の民謡や日本の国風を集めて流暢な英文詩で発表した。これは当時アメリカ文学界の傑作として好評を博した。

茂は京城では日本キリスト教会の客員として各地の集会に出席講演もした。信仰を経に、天生の柔和さを横糸に織る綾——その茂女は清く優しい日本女性の花であった。

（資料　私の執筆るねさんす一二九号）

実業補習教育に
この人　仁尾重實

柏島水産補習学校

明治二十六、七年の頃である。

当時、文部省は盛んに実業教育の振興に力をつくした。高知県も石田英吉知事が、熱心な青木定謙事務官の手腕にまかせ、三十

校が誕生した。室戸と土佐の両端柏島に水産補習学校が設置された。この柏島は仁尾重実校長と地元の協力で大成功。つぎつぎと実業学校が閉鎖、廃校の時、柏島水産補習学校だけは朝日の昇る勢である。

視察者松原新之助氏は感激して鐘、太鼓をたたいてその特色を歌った。農商務省の技師が来た。文部省の役人が校長の意見を聞いた。

明治三十五年愛媛県の選出代議士清家吉次郎氏は、その視察記を海南新聞に発表した。

仁尾校長

この経営の仁尾重實は、独学で小学校教員となり、実業学校を経営し、水産技師となり、退職後は自ら漁場の経営をした。

西峰は彼の雅号で俳句、詩歌、書画、彫刻、お茶、生花等多趣味である。子女八名の父で、八十三年の生涯中もっとも情熱をこめて活躍したのが柏島水産補習学校の時代である。

彼は元治元年（一八六四）九月十五日高知県高岡郡窪川町に生まれた。父は重陽、母は萬喜子。父が京都御所守護のため出陣の時の出生である。陶治学校、東京農学校で一年水産の勉強をしている。

柏島水産補習学校が創立されたのは、明治二十八年（一八九五）の四月である。創立同時に校長兼教師兼小使いである。同僚一人あるでなしのただ一人。月給二十円。しかも四年間一文の昇給もない。生徒は十一名。小学校四年を終わって来たものである。今なら小学校五年生ということになる。これを三年やるから今なら中学一年で卒業することになる。

学校は昔の小学校の敷地で、校舎の一部十二坪を使用。事務室兼校長室兼教室であり、小使い室である。寝室三畳、実習所五、六坪、年間経費四二〇円、備品費二二円、消耗費一七円。いかに物価の安い明治時代とはいえお粗末そのものである。

八年間いのちをかけて

仁尾校長は単身赴任した。生徒とともに寝食をともにし、漁撈をやり、遊びかつ働いた。昼は正科を、夜は補習教育をし、標本の網の手製、魚、貝、海藻の標本も全部手製、校長と生徒の協力である。製造機械も漁場図も手製。当時ウニのカンヅメもつくった。イカ一つ二毛でカンヅメにして原価五銭が二〇銭に売れた。魚類のクンセイ、酒盗のビンヅメをつくり利益の貯金一、〇〇〇円、これが基本財産になった。

時に実習船で沖に出る。時に貝拾いに行く。

貝は大阪の水産問屋を通じて島津の標本におくる。金がくると生徒に配分する。生徒は皆貯金通帳を一冊あてもつ。漁網を日に二時間もすくと八〇銭になる。これも全部貯蓄した。

月曜日毎に一厘貯金をはじめ、それに漁をした金、貝拾いの金、網すきの金を三年集めると卒業旅行ができる。

明治三十三年には下関に全国水産大博覧会が開かれた。仁尾校長は生徒とともに大阪に出た。ここで水産問屋を見学し、山陽線で下関へ。当時としては記録破りの修学旅行である。明治三十五年には、生徒は一躍六六名になった。

歌心、詩心

明治二十九年、仁尾校長は柏島で長者貝を発見した。これはブリュー・ロトマニア・ニヲと命名、学名ニヲがつけられた。感激の一首

わだつみのなみのそこよりこがねいろの
たからの貝をえしぞうれしき

月曜日の一厘貯金に
巧なる人のいさををたたえつつ
千代までつまむちりもあつめて

明治三十七年水産読本刊行の時
あまの子のためとてえりしいた木なれば
海原いずこながれゆくらむ

昭和十五年（一九四〇）十月柏島の仁尾会から招かれ、老軀をひっさげ喜寿の賀をうけた。

昭和二十一年七月三日別府市で嗣子重人に見まもられた八十三歳の生涯を終わる。

（資料　私の執筆るねさんす一二三号）

土佐女子高校創立者

前田松壽

前身の高知女学校

人口二三万の中都市高知市のどまん中、高知城下に唯一無二を誇る土佐女子高校は、創立以来六十八周年を迎えた。この学校の創立者が前田松壽女史である。

明治三十五年（一九〇二）三月私立の高知女学校が誕生した。この生みの親が前田松壽女史である。彼女は高知市五台山の出身である。

小学校裁縫科の専科教員の資格をもって、香美郡土佐山田町楠目小学校に勤務した。校下の父兄は、前田女史があまりにも教育に熱心であるのに感心して頼母子講をつくり、その金で東京の今の渡辺裁縫学校で勉強させた。

彼女は卒業とともにそのお礼の意味で再び楠目校に帰った。女子の教育熱と裁縫の技術の優秀を伝え聞いて隣村からも子女を託すほどになった。

前田女史は女学校経営を念願して高知城下に開設したのが高知女学校である。この時、楠目から三人の女子生徒がついて行った。そのうちの一人が岡村多与志で先生の用使いに行った。朱塗りの文箱をもって県庁や市役所に行く。すると市民たちが

「それ、御殿女中のおつかいじゃ」

とはやしたてたという。

合併、発展

私立高知女学校は渡辺知事から設立認可のもと、十余名でスタートした。設備も粗末であったが、県が高等女学校設立の機運が熟した時であったので、まず私立を援助した方が得策と考え直接間接の援助があった。

開校間のない時、横田久寿吉の経営している成女学舎から合併の申しこみがあった。県下女子教育のためよろしいというので一気に合併になり私立土佐女学校と改称した。

四月十日南部義籌が初代校長となり、教員に前田松壽、北村

浩、西森元、幹事横川正水の陣容である。四月十八日授業開始、普通科一年生六〇名、二年生五六名、技芸専修科一二名計一二〇名である。この私立土佐女学校が、六十八年後に生徒二、五〇〇名、教職員一〇〇名の私立土佐女子高校に成長する。

苦闘を越えて

私立土佐女学校は発足した。しかし前田女史は設備の資金に困った。学校教育に理解ある方々の募金で学校協会を創立し、五月二日には貴族院議員山本忠秀を会長とし、地方委員を依嘱して八〇〇名となり、一名三円五〇銭で計二、八〇〇円、別途二、二〇〇円の寄付で計五、〇〇〇円の募集に成功し三十五年を切り抜けた。

次の年は生徒が倍加するので校舎増設に県の補助を願った。猛烈な運動のもとに、県立第一中学校の建物二棟の交付と、一、三〇〇円の移転料を得た。

学校は次の難関校地の狭隘に直面した。前田女史は協会並びに会員の力をかりて第二回目の合併に成功した。それは一万円をもつ高知共立学校との合併である。この結果現在の追手筋の地に移り、市から譲りうけた二棟を移築し、学校の基礎が固まった。世にこれを「女学校の嫁入り」といっている。

さらに女学校を

前田松壽は、明治三十七年まで土佐女学校に勤務し、経営の見通しがつくと、家庭のつごうもあり退職した。

のちに静岡県浜松市に転住。ここでも私立の北浜女学校を創設し、学校長としてこれを経営した。これが後の北浜実科高等女学校に成長した。

大正十年の秋、病気のため退職、昭和二十九年二月、八十三歳で死亡した。生涯に二つの女学校を創立した前田松壽は、現代私学教育史上に輝く名婦といってよい。

（資料　執筆者編集の「同校六十周年記念誌」）

東亜の典型

西山庸平

三つの銅像の一つ

三ツトセ緑は宇田の小松原、港は手結の盆踊り　コノ盆踊り
アア　コリャコリャ

これは高知県香美郡夜須町の「夜須音頭」の一節である。

宇田の松原は、一千余年前の紀貫之が船路の紀行文「土佐日記」に見える宇田の松原である。その宇田の松原のつきる町に夜須町小学校がある。その校庭入口近く西山庸平の胸像がある。この胸像は、太平洋戦時中、土佐の銅像という銅像は全部赤鉢巻で戦場に出た。すべて未帰還であるが、戦った銅像が三つある。それは海の護りの坂本竜馬、陸の護りの中岡慎太郎、教育の護りの西山庸平の像である。

この一事でも彼が偉大な教育者であったかがうなずけると思う。

英・仏・独の語学と心理学

彼は香美郡田村宇十四番屋敷（いま南国市）に明治二年（一八六九）二月二十六日出生。明治三十五年（一九〇二）無試験で小

学校本科正教員の全科（修身教育、国語、漢文、英語、数学、歴史、地理、物理、化学、博物、習字、図画、体操）をもった。

西山庸平

この夜須校校長には明治三十六年（一九〇三）三月赴任。大正三年（一九一四）七月南国市大篠校長に転ずるまで十一年間勤続。比類のない才腕を発揮して有名をうたわれている。

西山庸平は、篤学力行の人物で、英仏独の語学をはじめ、漢籍にくわしい。特に心理学は専門で、ジョン・デューイの学説に共鳴した。教育方法、児童の訓育は西山式といわれるほど異彩を放った。一名自発主義の教育と称した。明治四十二年（一九〇九）文部省から優良校として表彰をうけたのは、その実績によるもので夜須校の名は一躍全国的に有名になった。

彼には著書が多い。生活としての学習、読方心理学原論、郷土心理学、哲学概論、デューイの心理学、心理学史、綴方の心理学、文化主義学級経営論、読方教育原論、カント哲学、学習概論、新教育の哲学的背景、等十数冊。

自発の教育

「汝を教育するものは、汝の父母にあらず、汝の教師にあらず、汝の生活それ自身である。汝の学習それ自身である。」

「生活を離れて別に教育なるものあることなし。生活は教育であり教育は又生活である。教育が、ある生活の準備であるにもせよないにもせよ、教育それ自身は即ち刻々の生活そのものである。教育てう規範のもとに行わるる生活が教育それ自身であり、教育の全部である。」（生活としての学習）

この著書の一つにも彼の教育の根本的な立場がよくわかる。

彼は、高知市から大阪市に転出して十五年在職、さらに昭和十二年北支に行き、天津の教育行政の顧問として大いに活躍した。一言でいえば西山庸平は明治、大正、昭和の三代にかけての教育学者であり実践家である。

当時の教科書は、全部白黒の印刷であった。彼はこのことで色刷りをすることを土佐にいる時からいち早く提唱していた。

昭和十六年（一九四一）没。七十三歳

東国典型

前記の彼の胸像は、彼の教育をうけた浜口青果の恩師をしのぶ作品であり、台座に刻んだ頌は浙江（省）周善培の選文である。彼が儒学者としても有名であったため、彼の六十八歳の時、彼の徳を讃え日本と中国の有志がこれを建設したものである。

除幕の当日は汪兆銘の代理として白堅、ならびに通訳が参列した。当時は日中互いに協力して東亜の安定をはかろうという空気が強かった。

なお碑文は次のとおりである。

東亜典型

西山先生記念碑　浙江（省）周善培謹書　昭和十四年十二月九日、日本通儒西山庸平先生は、本年六十有八、著す所の書十二種、みなその学なり。病篤して口授して東亜民族の指標を論す。すなはちその憂世の志大いに迫る。通貞これが序をつくる。翌年十一月三日、人その徳を思い、銅に鉋して像となし、これをその郷高知県夜須村に奠めて碑となす。余に文を徴す。余、先生と交はること不幸にして日浅し。その学に志すこと、余の心に入り、流るるに至る。すなはちこれが銘をつくりて曰く、

人ほろべば国薨し、その存すれば則ち栄ゆ。一介の堅、全域に百ばいす。烈々たる楠公、これ念い、これ程る。はじめ隠顕を一にして、終りには死生を斎む。淵の如きその言、嶽の如きその行、たれか歩み、たれか越かん。治をたて、且つ平なり。式は厳恭を嗜、精誠を髣髴す。千齢万祀、この銘を没せざらん。

（原漢文）日本中国有志敬立　（資料　拙著　夜須風土記）

生涯を一校に

今村久晃

十三歳の授業生

土佐の高知のはりまや橋から、名勝地桂浜に行く中間に高知市横浜がある。浦戸湾に面した風光明眉の地である。ここに生涯を一校にすごした偉大な教育家がある。名を今村久晃という。

彼は明治元年（一八六八）一月十八日吾川郡長浜村瀬戸（現在高知市）に生まれた。父は熊太郎、母はとら、その長男である。彼は瀬戸横浜の小学校に学んだ。神童とうたわれた。独学で明治十三年（一八八〇）横浜小学校の授業生に任用された。わずかに十三歳である。

明治三十二年（一八九九）十月同校校長になり、大正十五年（一九二六）八月五日五十九歳で没するまで四十五年間一校に勤務し一校に始終した。その間文部大臣をはじめ、県知事から十幾度の表彰をうけている。

自治教化に

今村久晃はやせた身体であるが、美しいヒゲをたくわえ、みなりをきちんとしていた。温厚な性質と、深い慈悲心と、博学雄弁で、その上情熱を傾けて教育にとりくんだ。一挙手一投足すべて教育愛にみちみちていた。それで瀬戸、横浜の人たちは父母のように尊敬した。

瀬戸、横浜が県下の模範部落になったのもまったく今村久晃校長の自治教化に負うところが多い。

いま日本にある公民館活動を自治会の名でそのまま実践した。衣食住、相互扶助、清掃土木、田役に至るまで自主的にやった。経済、貯蓄、消費面もお互いに研究するよう指導した。時には夫婦げんかの中に入ったり、媒妁もたくさんやった。今なら公民館長であり、社会教育主事であり、厚生、経済の指導者でもある。

徳化今に

彼の教育をうけたものになかなか人物が多い。小さい全校一〇

○名もいない小学校からである。

弥長勝衛（東京農工銀行頭取）

大崎勝猪（横浜共同火災重役）

竹下　泉（東京専売局）

今村久晃

山本清衛（陸軍中将ビルマ方面軍司令官）

井林　稔（小倉市で土木建築業）

なお、母校である横浜小学校には山本清衛中将ら教え子たちによる今村久晃の頌徳碑が建っている。また彼の墓所は春秋の彼岸には、その二、三日前から必ず清掃され、香華がかざられている。これは「おさなご園」の園長であることが最近に判明した。この園長も教えをうけたものである。

また本年八月五日には、山本清衛元中将、池永市会議員、貝原繊維会社重役、和田高知新聞販売次長らが発起人になり、今村久晃の四十五回忌を行なった。会するもの九十余名が墓参をして保育園で今村校長のありし姿を偲び、思い出話に花が咲いた。

なお、後継の今村正広氏は、父の遺業をつぎ、教育界を引退後は、高知市公民館連絡協議会長として地域社会教化につとめている。

（資料　私の著　高知市史跡めぐり）

奇才縦横

教育評論家　上田庄三郎

教育の自由なる研究のため

本名は上田庄三郎であるが、愛称は上庄である。本稿は上庄で行こう。

上庄は四国の西南、海底公園で有名な土佐清水市三崎の出身である。上庄自作のクドキの中に、

三崎屋松町　忠太がせがれ、ここに上田の庄三郎は、木の川お鶴の連れ子でござる。お鶴十六おぼこい娘、音に聞えた木の川小町……

その一人息子が上庄である。明治二十七年十一月十日出生。とても頭のよい少年だったので、土地の教頭匠藤善太郎が師範学校にすすめたものである。

上庄は奇才縦横、稚気横溢、変幻極りない。大正三年母校の訓導で俸給は一七円。これをふり出しに、下川口、下ノ加江、益野と勤めの大正十四年「教育の自由なる研究のため」という理由で退職している。

土佐にいる時、妻を迎えに生徒を斥候に出し、生徒が出合橋まで来ていると報告すると自分も行って、人力車を後から押したという奇談もある。長笹の乙女に恋して長笹通いをしたこともある。

十あまりいさりび並びに動きいる　海見る嬉し君の家より

東都に活躍

大正十四年（一九二五）今の土佐清水市益野小学校を退職した上庄は、神奈川県茅が崎新設の雲雀が丘児童の村小学校長となった。

上庄はここでは、昭和二年（一九二七）同校が閉鎖になったので東京に移り、教育出版社、日本教育学会に入った。

さらに昭和四年には小砂丘忠義、千葉春雄、峰地光重、野村芳兵衛らと「綴方生活」を創刊。生活綴方運動を起こす。

教育評論家であり実践家である上庄には次の著書がある。

一九三〇（昭五）　教育戦線　自由社
一九三三（昭八）　調べた綴方とその実践　厚生閣
一九三四（昭九）　激動期の教育構図　啓文社
一九三五（昭一〇）　綴方評論　中之書房
一九三六（昭一一）　青年教師の書　賢文館
　　青年教師啄木　啓文社
一九三六（昭一一）　青年教師石川啄木　〃
一九三八（昭一三）　教育国防論　〃
一九四二（昭一七）　人間吉田松陰　〃
　　横井小南　〃
一九四七（昭二二）　民主教育の先駆者　三鶯書林
一九四八（昭二三）　情熱の青年教師石川啄木　宣言社
一九四九（昭二四）　青年教師の書　西森書店
　　新しき教育のために
一九五一（昭二六）　教育界人物地図　明治図書
一九五三（昭二八）　基地の子　光文社
一九五五（昭三〇）　石川啄木　三一書房
一九五七（昭三二）　抵抗する作文教育　新光閣書房
一九三八（昭一三）　教育評論　啓文社

三部作
　大地に立つ教育
　教育のための戦
　新しき教育への出発

一九三九（昭一四）　教育の新世紀　啓文社
　　松陰精神と教育の革新　〃
一九四一（昭一六）　国民学校教師論　〃
　　女教師論　〃
　　頼山陽　〃
　　青年教師論　〃

上庄は昭和三十三年十月十日死亡、戒名宏徳院昌庄光居士、小平霊園に葬ってある。

自作の歌

貧乏の家に生まれて店奉公　夜な夜な泣いた十六の頃
ひそひそと話す子等ありなにやらん　吾が盗まれし長笹のうた
君かへる家に我なし我かへる　家に君なし末法の夜ぞ

（資料　私の執筆るねさんす一八三・一八二号）